

京都府遺跡調査報告集

第139冊

1. 温江遺跡第6次
2. 室橋遺跡第15・17次

2010

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)人面付き土器



(2)人面付き土器



(1) 室橋遺跡遠景(北西から)



(2) 室橋遺跡第17次2区 溝SD17203(南から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は「京都府遺跡調査報告集」として、平成20年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した温江遺跡と平成19・20年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した室橋遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された京都府建設交通部をはじめ、京都府教育委員会・与謝野町教育委員会・南丹市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

温江遺跡第6次

室橋遺跡第15・17次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	温江遺跡	与謝郡与謝野町加悦	平20.11.25～平21.2.13	京都府建設交通部	岩松保・ 肥後弘幸
2.	室橋遺跡	南丹市八木町室橋	平19.9.5～平20.3.7 平20.12.3～平21.2.25	京都府建設交通部	辻本和美・ 高野陽子

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 温江遺跡第6次発掘調査報告	1
2. 室橋遺跡第15・17次発掘調査報告	43

付表目次

1. 温江遺跡第6次

付表1 調査トレンチ概要	2
付表2 7トレンチ溝S D02出土弥生土器の構成に係る数量把握	22

2. 室橋遺跡第15・17次

付表3 室橋遺跡調査回数一覧	43
----------------	----

挿図目次

1. 温江遺跡第6次

第1図 調査地周辺主要遺跡分布図	1
第2図 調査トレンチ配置図	2
第3図 1トレンチ平面図	4
第4図 1トレンチ北壁土層図	5
第5図 2トレンチ平面図	5
第6図 2トレンチ北壁土層図	6
第7図 3トレンチ北壁土層図	6
第8図 3トレンチ平面図	7
第9図 3トレンチ ビットP26実測図	8
第10図 3トレンチ ビットP28実測図	9
第11図 4トレンチ北壁土層図	9
第12図 4トレンチ平面図	10
第13図 5トレンチ平面図	11
第14図 5トレンチ北壁土層図	12
第15図 5トレンチ溝S D01・33実測図	12

第16図	5トレンチ溝S D31実測図	13
第17図	5トレンチ溝S D31遺物出土状況実測図	13
第18図	6トレンチ北壁土層図	14
第19図	6トレンチ平面図	14
第20図	6トレンチ溝S D01実測図	15
第21図	7トレンチ北壁土層図	15
第22図	7トレンチ平面図	16
第23図	8トレンチ北壁土層図	17
第24図	8トレンチ平面図	17
第25図	出土遺物実測図 土器1	19
第26図	出土遺物実測図 土器2	20
第27図	出土遺物実測図 土器3	23
第28図	出土遺物実測図 土器4	25
第29図	出土遺物実測図 土器5	27
第30図	出土遺物実測図 土器6	29
第31図	出土遺物実測図 土器7	30
第32図	出土遺物実測図 土器8	32
第33図	出土遺物実測図 人面付き土器	33
第34図	出土遺物実測図 石器	34
第35図	温江遺跡環壕・竪穴式住居跡状遺構配置図	37
第36図	温江遺跡集落遺構想定図	38

2. 室橋遺跡第15・17次

第1図	調査地位位置図	44
第2図	室橋遺跡調査区配置図	45
第3図	第15次調査地配置図	46
第4図	第2地区遺構配置図、溝S D150201土層断面図	47
第5図	第3・4地区遺構配置図、横列S A150402、掘立柱建物跡S B150403実測図	48
第6図	第3・4地区土層断面図	49
第7図	第5・6地区遺構配置図	50
第8図	第5地区遺構配置図	51
第9図	掘立柱建物跡S B150501・150502、櫓S A150503実測図	52
第10図	第6地区遺構配置図、溝S D150601・150602土層断面図	54
第11図	第7地区遺構配置図、溝S D150701土層断面図	55
第12図	第9・10地区遺構配置図	57

第13図	竪穴式住居跡 S H 151002・151003実測図	58
第14図	竪穴式住居跡 S H 151004～151006実測図	59
第15図	溝 S D 151001・151007土層断面図	61
第16図	第10地区東壁土層断面図	62
第17図	出土遺物実測図	63
第18図	第17次調査地配置図	66
第19図	第1地区調査区配置図・遺構配置図、溝 S D 17101・17102断面図	67
第20図	第1地区土層断面図	67
第21図	第2地区調査地配置図・遺構配置図	68
第22図	第2地区土層断面図	69
第23図	第2地区古墳時代遺構配置図	71
第24図	溝 S D 17202・17207、土坑 S K 17210実測図	72
第25図	竪穴式住居跡 S H 17205実測図	73
第26図	掘立柱建物跡 S B 17213・17216、土坑 S K 17208・17217実測図	75
第27図	溝 S D 17201・17204実測図	76
第28図	溝 S D 17203・17209実測図	77
第29図	第3地区土層断面図	78
第30図	第3地区調査区配置図・遺構配置図	79
第31図	溝 S D 17301土層断面図	79
第32図	第4地区土層断面図	80
第33図	第4地区調査地配置図・遺構配置図	81
第34図	溝 S D 17401土層断面図	82
第35図	出土遺物実測図(1)	84
第36図	出土遺物実測図(2)	85
第37図	出土遺物実測図(3)	86
第38図	大堰川水取水堰・新庄用水配水路図	88
第39図	調査地北部遺構変遷図	90
第40図	調査地南部遺構変遷図	91
第41図	室橋遺跡調査区配置図	92

図版目次

1. 温江遺跡第6次

図版第1 (1)調査地遠景(東南東から)

(2)調査地遠景(西北西から)

- 図版第2 (1) 1トレンチW 全景(東から)
(2) 1トレンチE 全景(南東から)
- 図版第3 (1) 1トレンチW 北壁土層西半(南東から)
(2) 1トレンチE 北壁土層西半(南東から)
(3) 1トレンチE 北壁土層東半(南西から)
- 図版第4 (1) 2トレンチ全景(東南東から)
(2) 2トレンチ北壁土層(南南西から)
- 図版第5 (1) 3トレンチE 全景(西北西から)
(2) 3トレンチE 全景(東南東から)
- 図版第6 (1) 3トレンチE 東半現代土坑(西から)
(2) 3トレンチE 溝SD04・05(東南東から)
- 図版第7 (1) 3トレンチE 溝SD04・05全景(南から)
(2) 3トレンチE 溝SD05北壁土層(南東から)
- 図版第8 (1) 3トレンチW 全景(東南東から)
(2) 3トレンチW 全景(西北西から)
- 図版第9 (1) 3トレンチE 東半現代土坑(東南東から)
(2) 3トレンチW ビットP26(北西から)
(3) 3トレンチW ビットP28(南西から)
- 図版第10 (1) 4トレンチE 全景(西北西から)
(2) 4トレンチE 全景(東南東から)
- 図版第11 (1) 4トレンチW 全景(南東から)
(2) 4トレンチW 北壁土層(南西から)
- 図版第12 (1) 5トレンチE 全景(西北西から)
(2) 5トレンチE 全景(東南東から)
- 図版第13 (1) 5トレンチW 全景(東南東から)
(2) 5トレンチW 全景(西から)
- 図版第14 (1) 5トレンチE 溝SD01(南西から)
(2) 5トレンチW 溝SD31(東南東から)
- 図版第15 (1) 5トレンチW 溝SD31(北西から)
(2) 5トレンチE 土坑SK09(北東から)
(3) 5トレンチE 土坑SX08(北西から)
- 図版第16 (1) 6トレンチ全景(西北西から)
(2) 6トレンチ全景(東南東から)
- 図版第17 (1) 6トレンチ西半(西から)

- (2) 6 トレンチ溝 S D01(南西から)
- 図版第18 (1) 7 トレンチ E 全景(西から)
(2) 7 トレンチ W 全景(東から)
- 図版第19 (1) 7 トレンチ W 溝 S D02遺物出土状況(南東から)
(2) 7 トレンチ W 溝 S D02完掘状況(南東から)
- 図版第20 (1) 7 トレンチ W 溝 S D02遺物出土状況(南南東から)
(2) 7 トレンチ W 溝 S D02遺物出土状況(西から)
(3) 7 トレンチ W 溝 S D02遺物出土状況(北東から)
- 図版第21 (1) 7 トレンチ W 溝 S D02北壁土層(南東から)
(2) 7 トレンチ W 土坑 S X03完掘状況(南西から)
- 図版第22 (1) 8 トレンチ全景(西から)
(2) 8 トレンチ全景(北西から)
- 図版第23 出土遺物 1
- 図版第24 出土遺物 2
- 図版第25 出土遺物 3
- 図版第26 出土遺物 4
- 図版第27 (1) 出土遺物 5
(2) 出土遺物 6
- 図版第28 (1) 出土遺物 7
(2) 出土遺物 8
- 図版第29 出土遺物 9
- 図版第30 出土遺物 10

2. 室橋遺跡第 15・17 次

- 図版第 1 (1) 第15次調査地遠景(上が南)
(2) 第15次調査地遠景(上が北)
- 図版第 2 (1) 第15次第 1・2 地区(南から)
(2) 第15次第 4～7 地区(南から)
- 図版第 3 (1) 第15次第 1 地区(南から)
(2) 第15次第 2 地区(南から)
(3) 第15次第 2 地区溝 S D 150201断面(南から)
- 図版第 4 (1) 第15次第 4 地区(上が東)
(2) 第15次第 4 地区全景(北から)
- 図版第 5 (1) 第15次第 3 地区全景(南から)
(2) 第15次第 4 地区柵 S A 150402(南から)

- (3)第15次第4地区欄S A150402柱穴P1内柱根(南から)
- 図版第6 (1)第15次第4～6地区遠景(上が東)
(2)第15次第5・6地区(上が東)
- 図版第7 (1)第15次第5地区掘立柱建物跡群、欄列(上が東)
(2)第15次第5地区掘立柱建物跡S B150501・150502・150504(上が東)
- 図版第8 (1)第15次第6地区(上が東)
(2)第15次第6地区全景(南から)
- 図版第9 (1)室橋遺跡北部調査地遠景(上が南)
(2)第15次第7地区(上が西)
- 図版第10 (1)第15次第5地区掘立柱建物跡S B150501・1505012(北から)
(2)第15次第6地区溝S D150601・150602(南から)
(3)第15次第7地区溝S D150701(北から)
- 図版第11 (1)第15次第10地区調査地遠景(西から)
(2)第15次第10地区全景(北から)
- 図版第12 (1)第15次第10地区調査地中央部(上が東)
(2)第15次第10地区調査地北半部(上が西)
- 図版第13 (1)第15次第10地区竪穴式住居跡群(北から)
(2)第15次第10地区竪穴式住居跡S H151003(北から)
(3)第15次第10地区竪穴式住居跡S H151003竈(西から)
- 図版第14 (1)第15次第10地区竪穴式住居跡S H151002(北から)
(2)第15次第10地区竪穴式住居跡S H151002(南から)
(3)第15次第10地区竪穴式住居跡S H151004～151006(北から)
- 図版第15 (1)第15次第10地区竪穴式住居跡S H151004・151005(北から)
(2)第15次第10地区竪穴式住居跡S H151004・151005(南から)
(3)第15次第10地区竪穴式住居跡S H151006竈内高杯出土状況(西から)
- 図版第16 (1)第15次第10地区溝S D151001・151007(北から)
(2)第15次第10地区溝S D151007断面(南から)
(3)第15次第9地区全景(南から)
- 図版第17 出土遺物1
- 図版第18 出土遺物2
- 図版第19 (1)第17次調査地遠景(南東から)
(2)第17次調査地近景(北西から)
- 図版第20 (1)第17次調査地北部近景<手前に新庄用水、丘陵背後に文覚池>(東から)
(2)第17次調査南部調査区全景(上が北東)
- 図版第21 (1)第17次調査第1地区全景(上が北東)

- (2) 第17次調査第3地区全景(上が南西)
- 図版第22 (1) 第17次調査第2地区全景(上が南西)
(2) 第17次調査第2地区南部全景(上が北東)
- 図版第23 (1) 第17次調査北部調査区全景<正面丘陵の基部に大堰川>(南東から)
(2) 第17次調査第4地区全景(上が南西)
- 図版第24 (1) 南部調査区調査前全景(南東から)
(2) 第17次第1地区全景(南東から)
(3) 第17次第1地区全景(北西から)
- 図版第25 (1) 第17次第2地区全景(南東から)
(2) 第17次第2地区溝S D17203(南から)
- 図版第26 (1) 第17次第2地区竪穴式住居跡S H17205(南東から)
(2) 第17次第2地区竪穴式住居跡S H17205竈(南東から)
(3) 第17次第2地区溝S D17202・17207(南から)
- 図版第27 (1) 第17次第2地区溝S D17202土器出土状況(南西から)
(2) 第17次第2地区溝S D17202断面(南から)
(3) 第17次第2地区溝S D17202・17207断面(南から)
- 図版第28 (1) 第17次第2地区掘立柱建物跡S B17213(北西から)
(2) 第17次第2地区掘立柱建物跡S B172165(北西から)
(3) 第17次第2地区落ち込みS X17212(南東から)
- 図版第29 (1) 第17次第2地区溝S D17204(南東から)
(2) 第17次第2地区溝S D17204断面(C-C´)(南東から)
(3) 第17次第2地区溝S D17204断面(D-D´)(南東から)
- 図版第30 (1) 第17次第2地区溝S D17203(南東から)
(2) 第17次第2地区溝S D17203断面(南から)
(3) 第17次第2地区溝S D17209断面(東から)
- 図版第31 (1) 第17次第2地区土坑S K17208(南東から)
(2) 第17次第2地区西壁土層断面(北東から)
(3) 第17次第2地区南壁土層断面(北西から)
- 図版第32 (1) 第17次第3地区全景(南東から)
(2) 第17次第3地区溝S D17301断面(南東から)
(3) 第17次第3地区溝S D17301西肩部柱穴検出状況(北から)
- 図版第33 (1) 第17次第4地区調査前全景(南東から)
(2) 第17次第4地区溝S D17401(南から)
(3) 第17次第4地区溝S D17401(北西から)
- 図版第34 (1) 第17次第4地区溝S D17401(南東から)

(2)第17次第4地区溝S D17401(南東から)

図版第35 (1)第17次第4地区溝S D17401土層断面(B-B')(南東から)

(2)第17次第4地区溝S D17401土層断面(C-C')(南東から)

(3)第17次第4地区溝S D17401底部検出状況(南東から)

図版第36 (1)出土遺物1

(2)出土遺物2

図版第37 (1)出土遺物3

(2)出土遺物4

図版第38 (1)出土遺物5

(2)出土遺物6

1. 温江遺跡第6次発掘調査報告

1. はじめに

温江遺跡は、加悦谷のほぼ中央部、東から西に張り出す丘陵上に位置している。この丘陵は、西側に突出した、南北900m、東西600mの三角形を呈しており、丘陵の北辺には蛭子山古墳・作山古墳があり、東の山裾には温江大塚古墳や温江丸山古墳が造られている。南には、谷を隔てた丘陵上に、後野円山1・2号墳や鳴谷東古墳群が造られている。この地域は与謝野町はもとより、丹後地域でも大規模な古墳が集中するところとして知られている(第1図)。

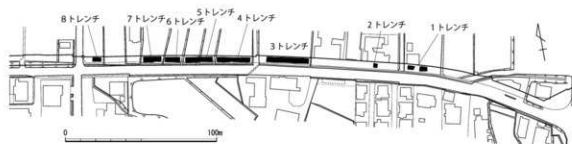
それに対して、こういった古墳群を造営した集落の実態についてはよくわかっていない。温江遺跡は広い丘陵上に立地しており、そういった古墳群を造営した集落の一つである可能性が考えられている。今までに5次にわたる調査が実施されているが、遺跡の詳細はよくわかっていない。温江遺跡の第1・2次調査は、昭和63年度・平成元年度に、国道176号バイパスの建設時に実施



第1図 調査地周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 四辻・大江山)

- | | | | | | |
|-------------|--------------|-----------|-------------|----------|-----------|
| 1 温江遺跡 | 2. 日吉ヶ丘遺跡 | 3. 蔵ヶ崎遺跡 | 4. 須代遺跡 | 5. 火口遺跡 | 6. フカサ遺跡 |
| 7. 黒谷遺跡 | 8. 河ノ辺遺跡 | 9. 戸ノ谷遺跡 | 10. 裏ノ谷遺跡 | 11. 谷垣遺跡 | 12. 中上司遺跡 |
| 13. 鳴谷遺跡 | 14. 馬岡遺跡 | 15. 井前遺跡 | 16. 駒田遺跡 | 17. 福井遺跡 | |
| a. 蛭子山1～8号墳 | b. 作山1～5号墳 | c. 温江丸山古墳 | d. 温江大塚古墳 | | |
| e. 小虫古墳群 | f. 後野円山1・2号墳 | g. 鳴谷東古墳群 | h. 明石愛宕山古墳群 | | |

(古墳・古墳群は主要なもののみ、中世山城関係は省略した)



第2図 調査トレンチ配置図

された。この時の調査では、遺跡のほぼ中央を南北に貫く形で発掘調査が行われ、弥生時代後期、古墳時代後期および平安時代の遺構が確認されている。その後の旧加悦町教育委員会により店舗新築工事に伴う調査や道路の拡幅工事に伴う調査が実施されている(3～5次)が、その時の知見を大きく変えるような成果は得られていない。

今回、国道176号バイパス以西で京都府が府道温江加悦線の道路緊急安全確保小規模改良(交安)事業を計画し、その事前調査として発掘調査を実施した。この調査は、与謝郡与謝野町加悦地内で実施し、温江遺跡の第6次調査にあたる。

府道温江加悦線は、遺跡範囲のやや南側をほぼ東西に貫通しており、道路の北側を幅約5mにわたって拡幅する計画であった。このうち、温江遺跡の範囲となるのは、総長約250mの部分である。調査対象地は、田畑と住宅地として利用されており、府道温江加悦線に直交して生活道路や畦畔が南北に取り付いている(図版第1-(1)・(2))。畦畔の保護のため、耕作地については基本的に、一筆毎に調査地を設定し、住宅の前面については、生活に支障のない範囲で調査を実施することとし、一部の宅地前面では調査を行わないこととした。最終的に、8か所の調査区を設けて、計約125mの長さにわたって調査を実施することとした。東から西に向けて、1～8トレンチとした。また、各調査地の周囲に安全フェンスを設置したため、幅約5mの調査対象地内に幅約3mのトレンチを設けるのが精一杯であった。

温江遺跡では国道176号より西側では発掘調査が実施されていないため、国道176号の西側では

付表1 調査トレンチ概要

トレンチ	面積㎡	概 要	調 査
1トレンチ	25.0	水性堆積層を確認	反転調査
2トレンチ	6.8	水性堆積層を確認	西半のみ
3トレンチ	96.0	弥生時代前期溝・ピット・土坑、弥生時代後期～古墳時代前期溝・土坑	反転調査
4トレンチ	62.9	弥生時代前期～古墳時代前期土坑・ピット、現代土坑	反転調査
5トレンチ	57.0	弥生時代前期～古墳時代前期竪穴式住居跡2、掘立柱建物跡(構)1、現代土坑	反転調査
6トレンチ	31.5	弥生時代前期～古墳時代前期竪穴式住居跡2、古墳時代後期か溝	反転調査
7トレンチ	39.5	弥生時代前期溝、弥生時代前期～古墳時代前期竪穴式住居跡2	反転調査
8トレンチ	14.8	現代溝	東半のみ

遺構が遺存しているのかどうかという点も含めて遺跡の実態がわかっていないこと、排土を置く場所が近くに確保できないということから、まず、8か所の調査対象地内のほぼ1/2を掘削・調査し、残りの半分を排土置き場とすることとした。

そして、遺構・遺物の有無を確認した上で、必要に応じて、調査済みのトレンチを埋め戻した上で、残りの半分を調査することとした。結果的には、8本のトレンチのうち、1トレンチでは壁面の崩落のため、2・8トレンチでは顕著な遺構・遺物を確認できなかったため、全面の調査を実施しなかった。1～8トレンチの総調査面積は333.5㎡である。各トレンチの概要は別表のとおりである。

調査期間は平成20年11月25日～平成21年2月13日までを要した。調査期間中の2月6日に、地元の温江・加悦地区住民を対象に説明会を実施した。現地調査は、調査第2課課長補佐兼第3係長石井清司、同主任調査員岩松保が担当し、平成21年度に整理作業を行った。現地調査及び整理作業に係わり、京都府教育委員会・与謝野町教育委員会には多大なご協力をいただいた。発掘調査・整理作業に関わる経費は、京都府建設交通部が負担した。現地調査・整理作業には多くの方々に参加していただいた。また、人面付き土器の評価については、設楽博己、山田康弘、深澤芳樹、大野薫各氏にご教示を得た。ここに記して、お礼を申し上げます。

2. 温江遺跡と周辺遺跡の調査(第1図)

今回の温江遺跡の調査では、後述のように、弥生時代～古墳時代の集落遺構を確認した。以下、旧加悦町内の弥生時代と古墳時代を中心に、周辺遺跡の内容を概観したい。

弥生時代前期の遺跡には蔵ヶ崎遺跡がある。蔵ヶ崎遺跡では、弥生時代の溝、矢板列、土坑、奈良時代以前に造られた水田などが調査されている。弥生時代の溝は、前期中頃のものが2条、中期のものが1条あり、後者には矢板列が設けられていた。これらは水稻耕作に伴う水路であり、居住関連の遺構は確認されていないが、加悦谷でいち早く水田を営んだ遺跡である。

弥生時代中期の遺跡には、日吉ヶ丘遺跡、須代遺跡がある。日吉ヶ丘遺跡は台地上に立地し、弥生時代中期中葉～後葉にかけての環濠、貼り石をもつ墳墓、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡が調査されている。遺物には、多量の土器の他、玉原石や未製品、石鋸、筋砥石などの玉作り関連遺物、鍛造鉄器や鉄滓、鉄製品を磨いた砥石など一般集落とは異なる遺物が出土しており、大型の墳墓を検出したことから、この地域を代表する拠点集落と考えられている。

須代遺跡は小扇状地に位置する遺跡で、弥生時代中期～後期、古墳時代末期～平安時代末期の遺構が検出されている。特に注目されるのが、幅約5m、深さ約1mの大溝で、弥生時代中期後半に掘削され、後期後半まで存続したようで、集落を巡る環濠と推測されている。弥生時代中期中頃～後半にかけての竪穴式住居跡3基が見つかった。また、須代遺跡の東に位置する須代神社裏山からは、須代銅鐸が発見されている。

温江遺跡では、国道176号バイパスの建設時に弥生時代後期の貯蔵穴状の土坑が調査されている。集落の実態は不明であるが、後期の集落が周辺に広がっていることは確実である。また、古墳時代後期の竪穴式住居跡が調査されている。

駒田遺跡は野田川の左岸に位置し、古墳時代前期の竪穴式住居跡と飛鳥時代の竪穴式住居跡が調査されている。

中上司遺跡は温江遺跡の南東に接して分布しており、扇状地上に位置する。この遺跡では、古墳時代中期後半の竪穴式住居跡3基、後期後葉～末頃の竪穴式住居跡6基、平安時代後期頃の掘立柱建物跡2棟が検出されている。この遺跡の周辺には前・中期の古墳が密集する位置にあり、同時期の集落跡が確認できたことは重要である。

裏ノ谷遺跡では、発掘調査により遺構は確認されていないが、弥生時代中期末～中世にいたる遺物が確認されている。弥生時代の遺物には、中期末頃、後期後半頃のものがあり、古墳時代の土器には、後期後半頃のものがある。

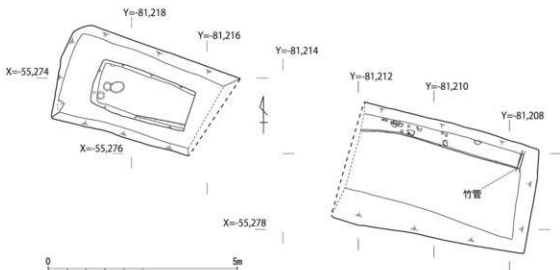
このほか、火口遺跡では、時期不明の溝・ピットを検出している。調査により、古墳時代～中世の遺物が出土しているが、弥生土器の散布地としても知られている。フカサ遺跡は古墳～平安時代、黒谷遺跡は弥生時代後期～平安時代の散布地として知られている。芦ノ谷遺跡では弥生土器・土師器、河ノ辺遺跡では弥生時代後期～古墳時代の遺物が確認されている。駒田遺跡は97年に調査されており、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、溝などと共に、弥生時代後期、古墳時代中期、平安時代の遺物が出土している。井前遺跡では古墳時代前期～中期の土師器が出土している。

3. 検出遺構

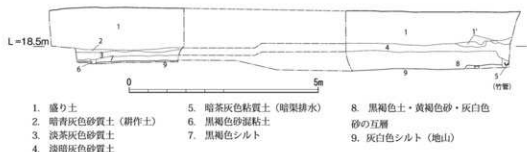
1) 1トレンチ(第3・4図、図版第1～3)

4.5m×16mの範囲を対象に調査を実施した。この敷地は、現有道路面よりも0.6m程度高くなっており、旧地権者の方のお話しによると、現在の宅地を建設したときに盛り土を行って整地したとのことであった。

当初の計画では、まず西半を掘削し、東半に掘削土を置いて調査した後東半を調査する計画とした。ところが、重機掘削の段階で、黄色砂を主体とする厚さ1.1mの盛り土層を確認した。予想以上の盛土であったため、当初に計画した範囲で排土が置けなくなり、予定面積の掘削を行えなかった。西半の調査地では、遺構状の小ピットを確認したため、西半を埋め戻し、東半を掘



第3図 1トレンチ平面図



第4図 1トレンチ北壁土層図

削したところ、盛り土部分が水を含み、壁面が崩落しかけたため、急速、土層の観察と記録を行った後に埋め戻しをおこなった。以上の理由のため、中央部分は未調査となった。西半の調査地が幅2.5m、長さ4.6m（下段が幅1.25m、長さ2.6m）、東半の調査地が幅3m、長さ4.8mで、間に約4.5mの長さの未調査部分がある。

東半の4層と西半の2層は、整地以前の旧耕作土である。3層は耕作に関連する整地層もしくは旧耕作土と判断されるものである。旧地表面に10～15cmの高低差が認められることから、未調査部分に田畑の段差があるものと想定される。トレンチの東端部分で、4層の下面から5層を埋土とする暗渠排水施設である竹管が埋設されていた。

東トレンチの8層と西トレンチの7層が対応する土層である。8層は黒褐色土・黄褐色砂・灰白色砂が縞状に水平となって互層に堆積しているもので、比較的流速の早い流水内で堆積した土層と判断される。7層は黒褐色シルト層で、3～7トレンチで認められる黒褐色土よりもやや色調が薄いもので、粘質も強く、粒子も細かいものであることから、流水内の堆積土と判断されるものである。7・8層の下には9層の灰白色シルトが堆積しており、東半ではその間に拳大の石礫が入り込んでいた。西半と比べて、堆積時の流速が早いためであろう。9層の地山の上面に高低差が認められることから、第4図にあるように、東側に下る流路状の地形が復原される。東半を埋め戻す際に重機で一部断ち割りをを行ったが、十数センチ下げると灰白色の堅く締まった砂質となり、丘陵の基盤を形成する地盤層となる。

遺構としては西端で柱状のビットを3基検出した。土層で見ると7層の上面から掘り込まれている。検出した深さは10～15cmである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

出土遺物としては、7層中から古墳時代前期の土師器甕片が出土している。

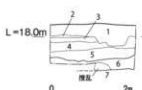
2) 2トレンチ(第5・6図、図版第4)

この地点は民家の庭先にあたり、対象面積5m×9～12mの範囲にトレンチを設定した。まず、西半に2.5m×2.5mのトレンチを設定して調査を行った。

表土の碎石の下には、耕作土の淡茶灰色土があり、淡黄褐色土、黄褐色土、暗褐色土が堆積していた(第6図)。これらは耕作に伴う整地土層と判断される。2～4層は下層



第5図 2トレンチ平面図



1. 淡茶灰色土 (耕作土)
2. 淡黄褐色土
3. 黄褐色土
4. 暗褐色土
5. 淡灰褐色砂質土 (粗砂)
6. 黒褐色土
7. 灰白色シルト (地山)

第6図 2トレンチ
北壁土層図

に、淡灰褐色砂質土(粗砂)が15~30cmの厚さで堆積しており、洪水等による流路内堆積と判断された。この砂礫層は西側にやや下がっていることから、2トレンチの上位から西側に流路があるものと想定される。その下層で黒褐色土の堆積を認めたが、湧水が著しく平面的に掘り下げることが困難であり、東端部を断ち割ったところ、約30cmの厚さを確認した。6層は粘質の強い、細かな粒子のシルト質を呈しており、流水内の堆積と判断された。この下面には7層の灰白色シルト層を認め、地山と判断した。7層は、1トレンチの地山とよく似ており、5層の粗砂の存在と考え合わせて、この位置及び東側に流路があったか、もしくは流路に近い位置で堆積した土砂と判断された。6層の黒

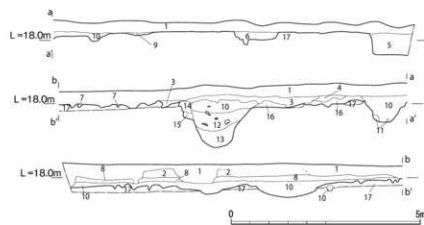
褐色土からは古墳時代前期(第27図1・2)が出土している。

湧水が著しく遺構精査が困難なこと、顕著な遺構・遺物を確認しなかったこと、民家への出入りのために通路の確保の関係から、対象地の東半の調査は行わなかった。

3) 3トレンチ(第7~10図、図版第5~9)

5m×34mの対象地内に、まず東半に幅3.3m、長さ16mのトレンチを設けて調査したところ、トレンチの西端近くで大溝S D05をはじめとして多くの遺構を検出した。その後、排土を折り返して、西半部に幅3.5m、長さ12mのトレンチを設定して調査を行った。

遺構面までの層序(第7図)は、東半部が耕作土である淡茶灰色土直下が黄褐色粘質土の地山となるのに対して、中央より西では耕作土直下には黒褐色土層および16層の黒褐色斑混黄褐色土が堆積する。遺構は黒褐色土層直下で検出し、16層の黒褐色斑混黄褐色土は土層の観察では遺構の



- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1. 淡茶灰色土 (耕作土) | 10. 黒褐色土 |
| 2. 淡茶褐色砂質土 (整地土) | 11. 黒褐色土 (黄褐色土混) |
| 3. 1・9層の混合土 | 12. 暗茶褐色土 |
| 4. 1・9層の混合土 (1層が主体) | 13. 黒茶色土 |
| 5. 淡灰色斑混黒褐色土 | 14. 黄色・白色斑混黒褐色土 |
| 6. 淡茶灰色斑混黒褐色土 | 15. 黄色斑混黒褐色土 |
| 7. 黒褐色土 (足跡状の小穴) | 16. 黒褐色斑混黄褐色土 (9層と同じか?) |
| 8. 暗茶褐色土 | 17. 黄褐色粘質土 (地山) |
| 9. 黒褐色斑混黄褐色土 | |

第7図 3トレンチ北壁土層図

下に堆積するものであるが、その堆積時期等は不明である。また、中央部より西では、耕作土直下には、底面が波打つ形状をした3・4層が堆積しており、現代の耕作に伴う機械もしくは人力による攪乱土と判断された。西端部分では、耕作に伴う整地土である淡茶褐色土が堆積しており、黒褐色土との間には8層の堆積が認められ

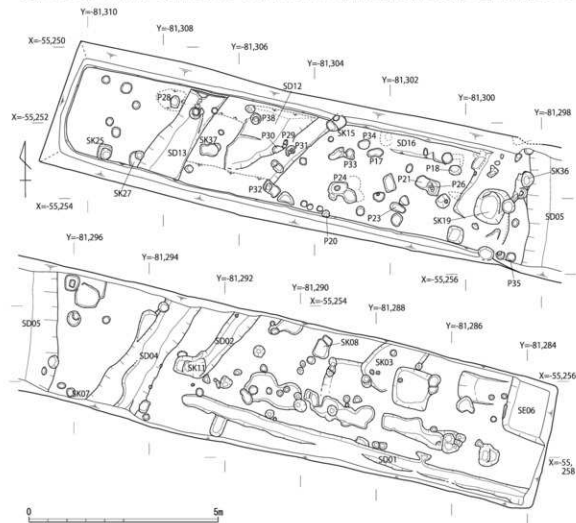
た。

遺構は地山面である17層および16層の上面で検出した。10層の黒褐色土中には弥生時代前期・古墳時代前期の土器片が混じり、いわゆる包含層であるが、同じ土がピットや溝などの遺構内に埋めているものがあり、その違いを認識することはできなかった。

なお、西半部の重機掘削時に、調査地内が水分を含みやや軟弱になっており、重機の重量により調査面に轍跡がついた。第8図にあるように、東西方向の2条の窪地状の溝が平行している。

検出した遺構には、大溝、溝、土坑、ピットがあるが、遺構の埋土は2種に分かれる。一つは黒褐色土を埋土とするもので、基本的に中央部やや東側で検出した溝SD02よりも西側で検出した遺構を埋めるものである。もう一つは、溝SD02よりも東側で検出した溝、土坑、ピットであり、黒褐色土に淡茶灰色土や淡灰色土が混じるものである。概して柔らかく、黒褐色土に混じる土砂が耕作土に近似することから、現代の耕作に伴う機械・人力の攪乱や溝・土坑と判断される（SE06、SK03、SD01～SK03・SE06の間の不定形の土坑）。これらの土坑・溝は、トレンチの中央部より西で、耕作土（1層）直下で確認された、底面の波打つ3・4層に対応する。

遺構の埋土は基本的に包含層と同じであり、7層の地山直上が遺構を検出した調査面である。



第8図 3トレンチ平面図

地山面の高さは、調査地北壁で見ると、調査地の東端から溝S D02までが標高約17.2mとほぼ水平であるのに対して、そこから西に下る。溝S D04の東肩が17.1m、溝S D05の東肩が標高16.9m、調査地の西端で標高16.8mである。溝S D02から西端までは約40cm低くなっており、溝S D02より東側では黒褐色土が堆積していないことを考慮すると、東半は数10cmの削平を受けたものと推定される。そのため、溝S D02よりも東側では、弥生時代前期から古墳時代前期に遡る遺構の数が、西半と較べて少ないのであろう。

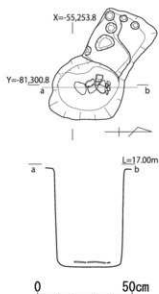
ピットを多数検出したが、掘立柱建物に復原できるものはなく、その性格は不明である。

溝S D01 (図版第5-(2)・6(1)) 調査地の東南部で検出した溝で、現況の道路および田畑の区画に平行する。内部からは現代の土器片等が出土し、田畑に伴う区画溝と判断される。検出長は9.4m、幅30~40cm、検出した深さは15cmである。底面は東から西に下る傾斜をもつ。この溝の北側に平行して不定形な土坑・溝の連なりを検出している。底面は凸凹であり、小ピット状の窪みも認められる。現代の耕作に伴う溝・土坑と判断される(図版第5-(2)・6-(1))。

土坑S K03 (図版第9-(1)) 東半部北辺で検出した土坑で、北半部は調査地外に延びる。埋土は淡茶褐色混黒褐色土で、耕作土と黒褐色土が混じったものである。1層の耕作土が混じり込んでいることから現代のものと判断する。長さ1.65m、幅1.1m、深さ15~25cmである。南東部に一辺1.05m、深さ約20cmの方形の土坑が重複している。埋土が耕作土とほぼ同じであることから、現代のものと判断される。

井戸S E06 調査地の東北隅で検出した土坑で、西南隅を検出した。ほぼ直角を呈しており、野井戸状を呈する。西辺1.5m以上、南辺1.3m以上を検出し、深さ約60cmである。内部から、椀瓦が出土している。

溝S D02 調査地の東半、トレンチの中央付近から北側で検出した溝で、現在の道路にほぼ直交する方向にある。溝底はほぼ水平であるが、南端に土坑S K11があるため、端部の状況はよくわからないが、浅くなって終わっている。遺構検出面の地形は、北東から南西にやや下る傾斜面をなしているため、トレンチの中央で終了している点から、自然の溝とは考えにくいものである。検出長は2.4mに北に延びる。溝幅は40~60cmで、深さは最大で20cmである。埋土は黒褐色土である。内部から土師器片と判断される土器片が出土している。

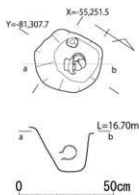


第9図 3トレンチ
ピットP26実測図

溝S D04 (図版第6-(2)・7-(1)) 中央部やや東で検出した溝で、幅0.85~1.3m、深さ40~50cmである。北から南に下る傾斜を有する。溝S D02と同じく、現在の道路面にほぼ直交する方向を有する。埋土は黒褐色土で、土師器片が出土している。

溝S D05 (図版第6-(2)・7) トレンチのほぼ中央で、ほぼ南北に掘削された溝である。溝の規模は、幅約1.85~2.0m、深さ1.1~1.2mと大きなもので、溝の断面形状は「V」字形となる。内部から弥

生時代前期の土器が出土した。遺構面は北東から南西方向に下る地形であり、ほぼ南北にあることから、人工的に掘削されたものと判断される。7トレンチで検出した溝S D02とほぼ同規模で、同時期の遺物を含むこと、後述のように、両溝間に同時期の遺構が分布することから、弥生時代前期の集落の周囲を巡る環濠と判断される。埋土の堆積を3層確認したが、ほぼ水平な堆積で、土塁状の盛り土が流入した形跡は確認できなかった。弥生時代前期の土器が出土しているが、第7図にあるように、中央よりも西屑に近い位置で出土しており、西側から入り込んだ状況である。遺物の出土量は、7トレンチ溝S D02と較べて少なく、1箱程度である。第25図3～9の壺・甕が出土した。



第10図 3トレンチ
ピットP28実測図

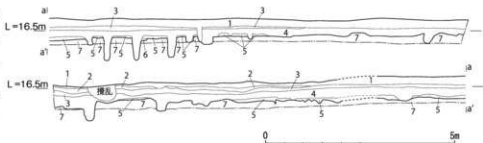
溝S D12 トレンチの西半で検出した溝で、北東から南西に向けて検出した。幅1.6～1.8mで、東肩部は深さ約30cmで、二段の掘形となっており、ほぼ直線的であるが、西屑は浅く10cm未満で、不定形である。南端部は重機の轍跡によって検出できなかった。溝底は南から北に向けて下る。埋土は黒褐色土で、第25図18の高杯脚柱部、19の鉢が出土している。古墳時代前期。

溝S D13 調査トレンチの西端で検出した南北溝で、幅0.8～1.1m、北壁際は深さ10cm程度と浅く、南端が最大で約30cmである。北東から南西に下る。第25図13の甕片が出土した。弥生時代後期のものと判断される。

土坑S K19 溝S D05の西側で検出した大形の土坑で、0.8×0.9mのほぼ方形を呈する土坑である。検出高は85cmと深く、内部から第25図12の弥生時代後期の甕が出土した。

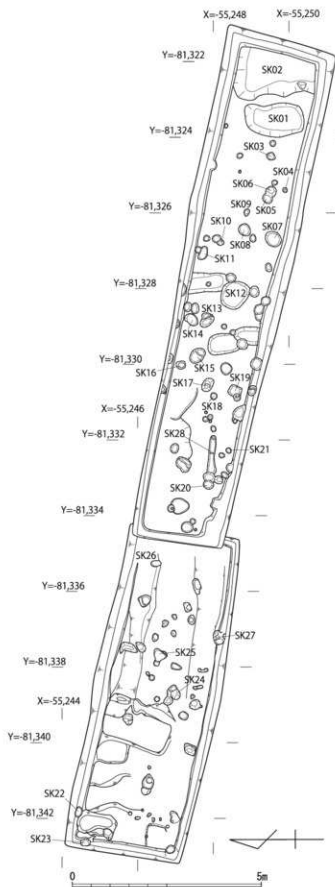
ピットP26 (第9図、図版第9-(2)) 溝S D05の西側で検出したピットで、ピットS P21と重複関係を有するが、遺構の切り合い関係からの先後関係は確認できなかった。一辺35cmの隅丸方形を呈し、検出した深さは63cmである。ピットの壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、底部より数cm程度浮いた状態で、高杯の杯身部分が出土した(第25図17)。底部近くからまとまって出土したことから意図的に埋納したものと推定されるが、検出時には元の形を保っていないことから、当初から破片となっていたようである。古墳時代前期。

ピットP28 (第10図、図版第9-(3)) トレンチの西端で検出したピットで、直径30cmの円形を呈し、検出した深さは最大で30cmである。ピットのほぼ中央、底部から約10cm浮いた状態で、第



- | | | |
|-----------------|----------------|-----------------|
| 1. 暗灰色砂質土 (耕作土) | 4. 黒褐色土 | 6. 黒褐色土 (4より黒い) |
| 2. 茶灰色土 (耕作土) | 5. 黒褐色真鍮黄褐色粘質土 | 7. 黄褐色粘質土 (地山) |
| 3. 淡茶灰色土 (床土) | | |

第11図 4トレンチ北壁土層図



第12図 4トレンチ平面図

25図14の小型丸底壺が口縁を横にして、土圧により割れてはいたが、ほぼ完形の状態で出土した。この上位より、15の小型丸底壺が出土している。古墳時代前期。

この他、P35、SK37より弥生時代前期の土器片が出土したが、それ以外の遺構番号を付したものは土器小片が出土しているが、時期は不明である

4) 4トレンチ (第11・12図、図版第10・11)

東半の25~29×13.5mの調査トレンチを調査した後、西半の3×8.5mの調査を実施した。耕作土の下には3層の床土があり、その下位には厚さ15~30cmの黒褐色土の包含層が全面に認められた。遺構の埋土もまた黒褐色土であり、トレンチ壁面の土層を観察しても、遺構と包含層の黒褐色土を区別できなかった。西半部の調査地は、重機で表土掘削を行った際に、地盤が水分を多く含んでおり、重機の重量により地盤が窪み、トレンチの北壁と南壁近くに2条の轍が溝状についた。また、地山が水分を多量に含んで粘度を増したため、バックホーによる掘削作業がうまくできずに、10~15cm程度、7層の地山を掘り過ぎてしまった。そのためか、東半と比べて遺構の検出密度が少ない。土層の観察では、包含層がほぼ同じ厚さで、トレンチの東端から西端まで分布してい

るので、地形の改変による削平は受けていないものと思われる。

土坑S K 01 調査地の東端で検出した土坑である。長さ1.55m、幅0.9m、検出した深さは50cmである。内部から棧瓦が出土している。

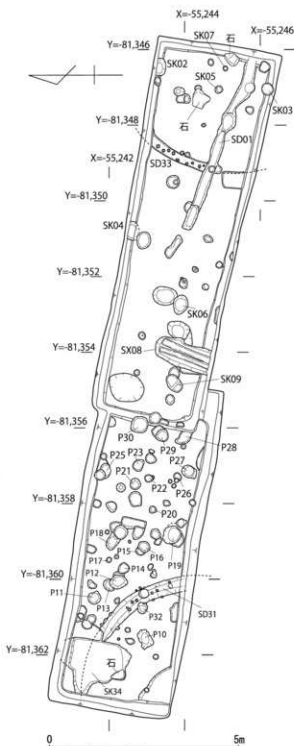
東半を中心に、多くのピット・土坑を検出したが、掘立柱建物等に復原できるものはない。ただ、掘削深が65cmと深いものもあり、概して遺構の残り具合は良いものである。出土した遺物は小片のものが多く時期の決め手に欠く。弥生時代前期の土器は、土坑S K 07からは甕(第26図22)、S K 10からは壺(同20)、そのほかS K 06から小片が出土した。弥生時代後期の土器は、土坑S K 27からは甕(第26図27)、S K 12・20・23からは小片、古墳時代前期の土器は、土坑S K 19から甕(第26図28)、S K 09からは土師器小片が出土している。

土坑S K 02 調査地の東端で検出した土坑で、東半は調査地外である。1.6m以上×2.2m以上、検出高は25cmである。内部から棧瓦が出土している。

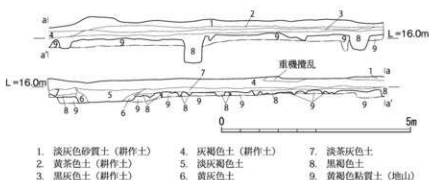
5) 5トレンチ(第13～17図、図版第12～15)

2枚の田畑をまたいでトレンチを設定した。東側の畑の耕作面は西側に比べて約30cm程度、高い位置にある。排土置き場の関係より、東半の一段高い畑部分3～3.3×10.1mを調査した後、西半の一段低い畑部分3.3×8～8.8mの調査を実施した。

東半は1～3層が畑に伴う耕作土であり、耕作土を除去すると8層の黒灰色土層が5～10cmの厚さで堆積しており、これを除去すると、9層の黄褐色粘質土(地山)となる(第14図)。西半は4層の耕作土の下に7層の淡灰色土が床土としてあり、その下面に厚さ数～15cm程度の黒灰色土があり、その下位が黄褐色粘質土の地山となる。地山面上で溝・土坑・ピットを検出したが、基本的には8層と同じ黒褐色土が埋土となっていた。



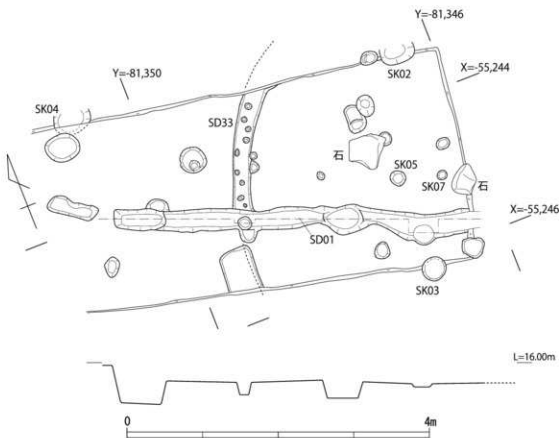
第13図 5トレンチ平面図



第14図 5トレンチ北壁土層図

古墳時代前期の弧状に巡る溝、古墳時代の布掘り状の柱穴列、時期不明の弧状に巡る溝、多数のピット・土坑を検出した。

溝 S D01 (第15図、図版第12-(2)・14-(1)) トレンチの東端で検出した溝で、トレンチの方向にほぼ平行し、東端は調査地外に延びる。幅30cmで、深さ25cm程度、総長4.9mにわたって検出した。西端部と中央部に、長さ70cm、55cmにわたって、溝底から30cm、20~25cmの深さの土坑が溝幅分に掘られていた。土坑の間は心々で2.7m離れる。検出面からは最大で50数cmの深さに達する深いものである。土坑部分の土層断面を観察したが、溝内および土坑内には黒褐色土の堆積だけが認識でき、柱掘形や柱抜き取り痕、溝と土坑の重複関係などは確認できなかった。溝と土坑がほぼ重なっていることから、溝と土坑は同一の構造物であると判断する。これらの土坑は、特に西端のものは柱掘形としてはやや細長い形状を呈している。柵もしくは掘立柱建物であろうか。この場合、柱と柱の間の溝には板状のものを立て並べたと判断される。この遺構面は、後述のように、堅穴式



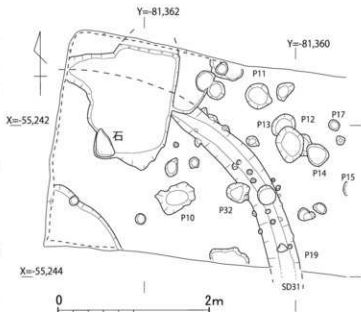
第15図 5トレンチ溝 S D01・33実測図

住居の壁穴の高さ分の削平があったと考えられる。そうすると、溝S D01の最深部の検出高が55cmあるので、溝S D01の元々の掘削深度は最低でも1mを超えることとなる。土師器小片が出土している。

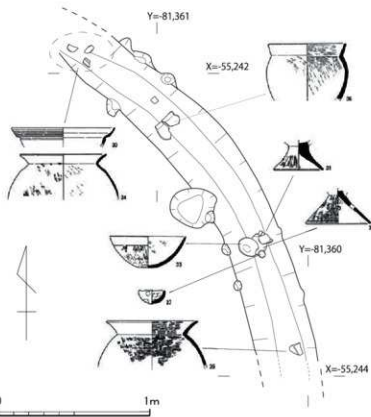
溝S D31(第16・17図、図版第13-(2)・14-(2)・15-(1))トレンチの西端で検出した溝で、円弧を描く。幅約35~40cmで、検出高20~25cmである。底面には小ピットが穿たれていた。総長2.8mにわたって検出した。西半部は現代の土坑S K34により攪乱を受けていた。

トレンチの西壁に溝S D31の埋土が観察できたため、調査地外に延びることが確認できた。径約6mに復原できる。また、弧状に巡る溝の内側から、25cm×40cmの三角形を呈した黄色の砂岩系統の平たい石が、半ば地山に埋もれていた。溝内からは第26図30~37の土師器甕・碗・高杯が出土しており、古墳時代前期のものと判断される。

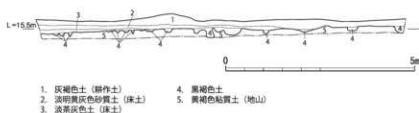
溝S D33(第15図、図版第12-(2)・15-(1))トレンチの東辺近くで検出した溝で、溝S D01と重複関係にあるが、先後関係は不明である。幅20~25cm、深さは数~10cmで、約2.2mにわたって検出した。溝は北で東にやや湾曲しており、南から北に向けてわずかに深くなる。北壁の土層断面では幅約60cm、深さ約10cmと幅広の浅いもので、その中の深い部分が平面的に検出されたものである。溝の底面には、径10cm未満、深さ5~10cm程度の杭状の小ピットが穿たれていた。小ピットは溝の南側



第16図 5 トレンチ溝S D31実測図



第17図 5 トレンチ溝S D31遺物出土状況実測図



第18図 6トレンチ北壁土層図

延長ライン上では検出できなかったが、溝底は南に向けて浅くなるため、南側の小ピットは削平により消失してしまったのであろう。

円形に巡るとすると、直径約6mに復原できる。また、溝SD01と同様、溝SD33の東側1.6mと2.9mの位置には、平らな石が座っていた。溝内からの遺物は出土しなかった。

土坑SX08 (図版第15-(3)) トレンチ中央部南半で検出した土坑である。内部には、針金で結ばれた丸太2本が埋め置かれており、針金が上方に向けて延びていた。地元の方の話によると、近辺に鉄塔があったとのことであり、鉄塔もしくは電柱を張るための重しと判断される。

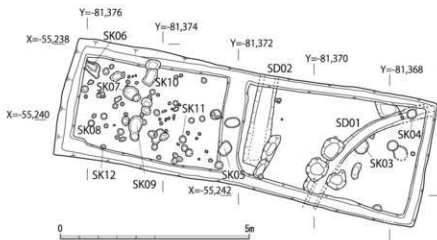
土坑SK34 トレンチの北西端で検出した土坑で、調査地外に延びる。北壁土層に見るように、耕作土直下から掘り込まれたもの(第14図5・6層)で、現代のもの判断される。

このほか、出土遺物の図化はできないが、弥生時代前期の遺構としてP30・27、弥生時代後期の遺構としてSK05(第26図38の壺)・P25、古墳時代前期の遺構としてSK02・P14・P17・P10がある。古墳時代後期の土坑SK06からは須恵器杯蓋の天井部の破片が出土している。また、P19からは縄文土器片(第26図41)が出土している。

6) 6トレンチ(第18~20図、図版第16・17)

まず東半の調査をしたの後、西半部の調査を実施した。東半の掘削土・排土は西半部に仮置きし、西半の調査時には東半の調査区を埋める予定であったが、後述のように、表土直下が遺構面であり、予想以上に土量が少なかったため、すべての土砂を7トレンチの西半部に移動して、調査を実施した。トレンチは幅3~3.3m、長さ9.8mである。

耕作土・床土(1~3層)を約15~25cmを除去すると、黄褐色粘質土の地山となり、他の調査区で認められているような黒褐色土の包含層は認められなかった(第18図)。しかし、一部の遺構

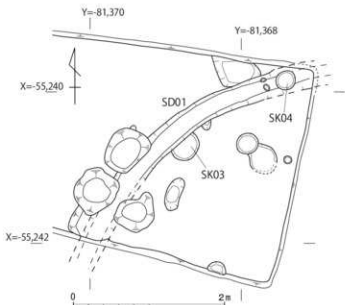


第19図 6トレンチ平面図

には黒褐色土が入り込んでいるので、田畑の造作時に削平を受けて、包含層は消失したものと判断される。遺構を検出したのは標高15.4~15.6m付近で、床土・耕作土中には弥生時代前期~古

墳時代の土器片が混じっている。

弥生～古墳時代と判断される遺構は少なく、東半では溝SD01とこの溝の東側のピット群、溝SD02である。また、西半部では多くの遺構を検出しているが、これらは底が丸くて浅い小ピットが中心で、黒褐色土をベースとしながらも耕作土である灰褐色土が混じり込んでいるものもあることから、耕作に伴う鋤や杭の跡と判断される。ただし、土坑SK07・09・10の南北にやや大振りの土坑を数基検出しているが、これらの



第20図 6トレンチ溝SD01実測図

検出高も15～40cmと深く、掘り方はしっかりしており、今回の調査で確認されている弥生～古墳時代の遺構と判断される。それ以外のピットからは、遺物の出土を見たものもあるが、基本的に現代のものと判断される。

時期不明の竪穴式住居跡1棟、溝を検出した。

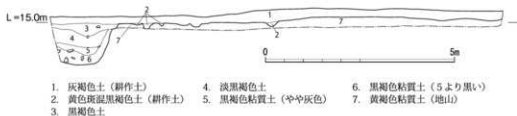
溝SD01 (第20図、図版第17-(2)) 調査地の東側で検出した円弧をなす溝で、南東部は現代の攪乱により削平を受けている。幅25～30cm、深さ約10cmで、約3.8mにわたって検出した。復原すると径7m程度の規模となる。埋土から弥生時代前期の甕片(第26図42)とともに、受け口状を呈した土師器甕の口縁が出土しており、古墳時代前期のものと判断される。土坑SK03・04との重複関係は不明であるが、土坑SK04からは弥生時代後期の甕片(第26図43)が出土している。

溝SD02 調査区のほぼ中央で検出した南北方向の溝で、2.3mにわたって検出した。溝幅50～60cm、検出高は最大で15cmと浅いものである。南端は急に浅くなって終わっており、底面はほぼ水平をなしている。その形状より、人工のものと判断される。埋土より、須恵器小片、埴輪片(第26図45)、土師器高杯脚柱部(44)が出土している。

このほか、土坑SK05・10からは土師器と判断される土器小片が出土している。

7) 7トレンチ(第21・22図、図版第18～21)

13×5mの調査範囲のうち、まず、東半部に幅2.8～3.2m、長さ7mの調査地を設け、調査終



- | | | |
|-----------------|-----------------|------------------|
| 1. 灰褐色土(耕作土) | 4. 淡黒褐色土 | 6. 黒褐色粘質土(5より黒い) |
| 2. 黄色灰黒褐色土(耕作土) | 5. 黒褐色粘質土(やや灰色) | 7. 黄褐色粘質土(地山) |
| 3. 黒褐色土 | | |

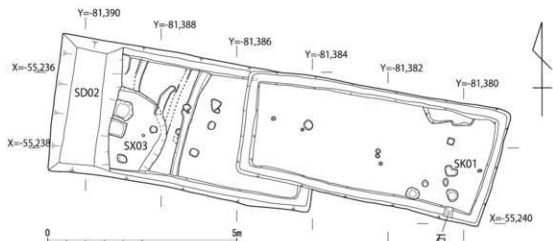
第21図 7トレンチ北壁土層図

了後に西半部に幅3.6m、長さ5mのトレンチを設けて調査を行った。土層は、基本的に耕作土(灰褐色土)の下には7層の黄褐色粘質土があり、地山である(第21図)。6トレンチ以東で確認される黒褐色土の包含層は認められなかったが、遺構検出面が標高14.95~15.05mであり、東側の6トレンチの西端の地山高の標高15.5mと較べて約50cmの高低差があることから、本来は包含層が堆積していたのが、後世の削平のために消失したと判断される。実際、現在の地表面は、田畑の段差により45cm程度の比高差が認められる。

地山直上での精査により、耕作に伴うと判断される小ピット、小溝を多数検出した。これらは、黄褐色混黒褐色土を埋土とするが、耕作土の灰褐色土を主体するものもあり、現代の耕作に伴う溝・小ピットと判断した。部分的に黒褐色土を埋土とするものがあり、調査地の東南部で検出した土坑S K01をはじめとするピット群、西側約4mで検出したピット、西辺で検出した溝S D02、土坑S X03とともに、これらは弥生時代~古墳時代に遡るものと判断される。なお、東トレンチを埋め戻し、西トレンチを掘削する際に、地山が水分を含み軟弱となり、バックホーの自重のため、遺構面に轍跡がついた(図版第18-(2))。

小溝群(図版第18-(1)) トレンチの西端、溝S D02の東側で検出した。北北東から南南西に掘削されており、幅15~20cm、深さ10cm内外の溝である。埋土は黄褐色斑混黒褐色土で、耕作土の灰褐色土が混じっており、現代の耕作に伴う溝群と判断するものである。

溝S D02(図版第19・20・21-(1)) トレンチの西辺で検出した南北方向の溝で、西辺は調査地外のため、幅は不明である。遺構面の傾斜と異なる方位を有することから、人工的に掘削された溝と判断される。検出した長さ3.2m、幅は1.6m以上、深さ1.1mを測る。溝底はほぼ水平で、南北3mの間で北側が数cm低くなる。土坑S X03と重複関係を有しているが、共に黒褐色土を埋土としており、先後関係を確定することはできなかった。検出面より25cm程度下面、4層上半で多数の土器片(第27~32図)、石礫が出土した。土器片は東側がやや高い位置にあり、集落側と判断される東側から投棄された状態で出土している。完形に近い土器が土圧で潰れた状態で出土しているものもある(図版第20-(3))が、洗浄後に接合しても、完形近くに接合できるものは少



第22図 7トレンチ平面図

なかった。このことから、完形に近い土器を廃棄したのではなく、主として破片になった土器を廃棄したものと推測される。人面付き土器(第33図)は、多数の弥生時代前期の土器片に混じって、この大溝から出土した。土層を見ると、第6層が東肩からの流入土とも判断されるが、この土層だけでは、土壘等が東側に盛られていたのかどうかは判然としにくい。

この大溝は、3トレンチの大溝と対になり、集落をめぐる西側の環濠になるものと推定される。

土坑 S X03(図版第21-(2)) 溝 S D02と重複しているが、埋土には溝 S D02と同じく、黒褐色土が入り込んでおり、その重複の先後関係はわからなかった。2m以上×18mの平面規模で、検出高は最大で約30cmである。平面形は隅丸の方形を呈し、横断面で見ると、土坑の中央が最も深く、底面からゆるやかに10~15cm立ち上がりつつ壁面に至る。底面の北辺近くでは2基の土坑を検出した。それぞれ、径約45cmで、深さ15~20cmである。内部からは時期の特定できる遺物は出土しなかった。土坑 S X03の周囲にはピットや土坑が数基しか検出されていないことから、多くのものは削平を受けたと思われる、他のピット・土坑が削平を受けても消失しない程度の深さで掘削されていたと判断される。その形状および規模、底面に土坑などが穿たれていることから、竪穴式住居の残欠と推定する。

8) 8トレンチ(第23・24図、図版第22)

調査対象地の東半に、2.6×5.7mの調査区を設定して調査を行った。耕作土(暗茶灰色粘質土)の下には整地土層と判断される暗茶灰色砂混土が堆積しており、その下が淡黄灰色砂・淡明青白色粘質土の地山となる。地山面以小ピット、溝などを検出したが、2層の暗茶灰色砂混土を埋土とする溝・小ピット、1層の耕作土を埋土とするピットのみで、他のトレンチで検出したような黒褐色土を埋土とするようなものはなく、現代に近い時期の遺構と判断された。また、1~7トレンチで確認された黒褐色土の包含層も確認できなかった。

遺構を検出した地山面の標高は、1355~134mで、東から西に傾斜する。

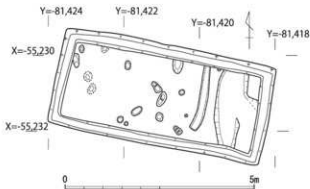
このように、顕著な遺構がなかったため、西半部の調査は行わなかった。

8トレンチの東側には、比高差約1mの崖面があり、この崖面を形成する際に遺構面は削平を受けたものと思われる。8トレンチの東側の崖面は、現地表面を観察すると北・南に連なり、特に北に延びる崖面は、蛭子山古墳や作山古墳の丘陵裾まで追えるものである。また、8トレンチの西側の道路の西には水路があることから、本来この位置に段丘崖面が形成されていたと判断された。そのため、



1. 暗茶灰色粘質土(耕作土) 3. 淡黄灰色砂(地山)
2. 暗茶灰色砂混土 4. 淡明青白色粘質土(地山)

第23図 8トレンチ北壁土層図



第24図 8トレンチ平面図

温江遺跡の範囲も8トレンチよりも東側の丘陵上に限られるものと想定されていた。

今回の8トレンチの調査により、東側の崖が後世の削平によるものと判断され、丘陵を形成する地山が8トレンチの位置にまで広がっていることを確認できたことから、温江遺跡が載る丘陵はさらに西側に延びていたと判断される。

4. 出土遺物(第25～34図、図版第23～30)

調査により、1・8トレンチからの遺物の出土は見なかったが、2～7トレンチでは、弥生時代前期・後期、古墳時代前期の土器片が出土している。また、6トレンチでは、埴輪片および須恵器片がわずかに出土した。近現代の遺物は、3～5トレンチで出土したが、古墳時代後期～近世にいたる遺物は全く出土していない。遺物の総量はコンテナ25箱である。

特に多くの遺物が出土したのが7トレンチの溝S D02である。この溝は先述のように、環濠集落の西辺を画する溝と判断されるものである。東側から廃棄された状態で出土しており、4層に集中して出土したもので、一括性が高いものと思われる。

以下、2～6トレンチから出土した遺物と7トレンチのS D02から出土した遺物を項を分けて報告する。2～6トレンチから出土した遺物は小片が多く、図化できたものは少ない。

1) 土器・土製品(第25～33図、巻頭図版、図版第23～30)

(1) 2～6トレンチ(第25・26図、図版第23・24)

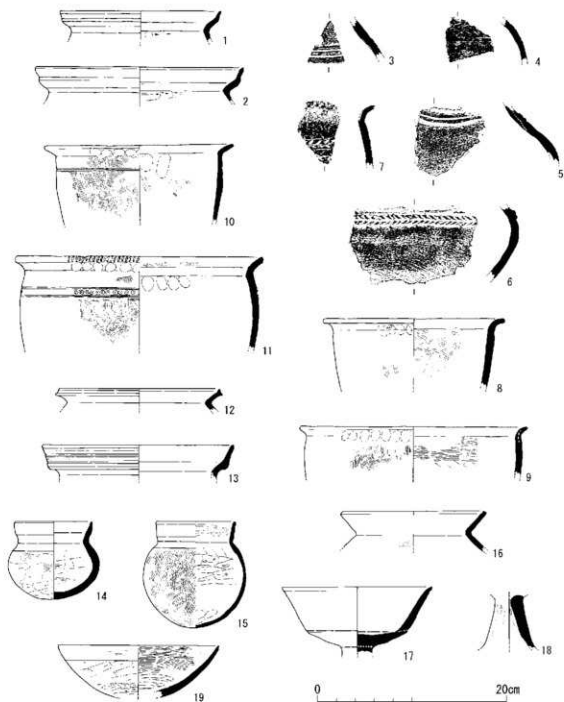
第25図1・2は2トレンチの黒褐色土から出土した甕である。ともに、「く」の字に屈曲する頸部から斜め上方に広がりつつ立ち上がり、さらに上方に屈曲し、受け口状の口縁を有する。口縁下部には幅広い平坦面を有し、強くナデられている。1は小片であるが、口径17.0cm(復原)、器高3.1cm(現存)、2は口径22.0cm(復原)、器高3.6cm(現存)である。ともに古墳時代前期のものである。

3～19は3トレンチから出土した遺物である。3～11が弥生時代前期、12・13が弥生時代後期、14～19が古墳時代前期のものである。

3～9はS D05から出土した弥生土器である。この溝は、環濠集落の東辺の溝と判断しており、7トレンチ溝S D02と対になるものである。7トレンチS D02と異なり、遺物の出土量は少ない。3・5は壺の頸部から胴部にかけての破片で、削り出された突帯の上にヘラ描き沈線が巡る。4は壺の肩部の破片で、貝殻羽状文の下にヘラ描き沈線3条が施される。6は壺の腹部の破片で、貼り付け突帯の上にヘラ状のもので綾杉文が刻まれている。7は甕の破片で、口縁端面に刻み目が施され、口縁下に横方向のヘラ描き沈線が3条あり、上2条の沈線の間と最下段の沈線の下には貝殻羽状文が刻まれている。8・9は口縁部が短く外反する甕である。

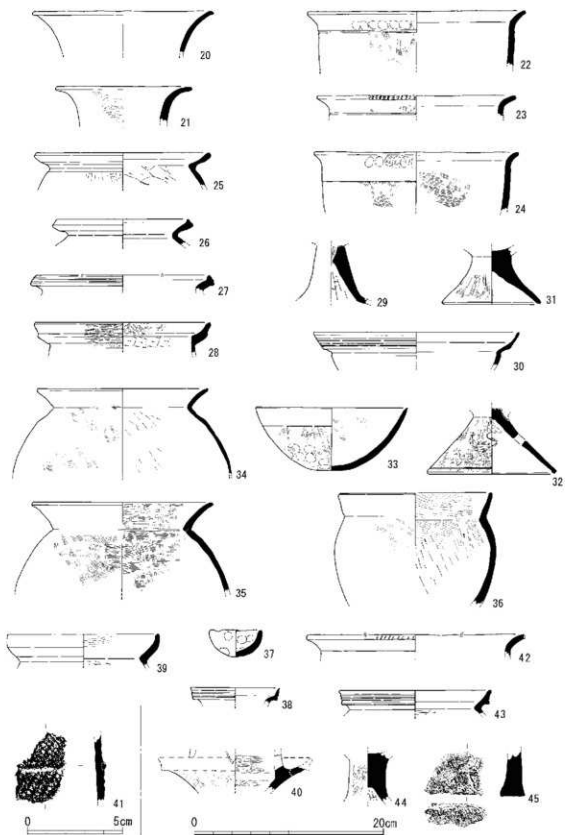
10の甕はP32より出土した。頸部に1条のヘラ描き沈線が巡る。11は甕で、頸胴界に2条のヘラ描き沈線文を施し、その間に竹管文を入れる(図版29)。包含層中から出土した。12の甕は土坑S K19、13の甕はS D13から出土した。

14・15の小型丸底壺はともにP28から出土した。出土状況とその遺存率の高さから一括性の高



第25図 出土物実測図 土器1(2-3トレンチ)

いものである。14は口縁部をほぼ1/2欠くもの、体部はほぼ完存するものである。口径8.0cm、器高8.2cm。15は口径8.3cm、器高11.2cmで、全体のほぼ2/3が残存している。外面には細かなタテハケで、内面は横方向にヘラ削りを行っている。16の古墳時代前期の土師器甕はトレンチ東側の小ピット群から出土した。17の高杯杯部はP26の底面近くに埋め置かれていたもので、脚部はないが、杯部のほぼ2/3が遺存している。口径は復原で15.8cm、器高は現存で7.0cmを測る。18・19はともにS D12より出土した。18は高杯脚部で、杯部および脚部底部は遺存していない。外面



第26図 出土遺物実測図 土器2(4～6トレンチ)

の一部にミガキが見て取れる。19の鉢は口径17.0cm(復原)、器高5.5cm(現存)である。33とよく似る器形を有する。古墳時代前期のものであろう。

第26図20～29は4トレンチから出土した。20～24が弥生時代前期、25～27が弥生時代後期、28・29が古墳時代前期のものである。20・21は広口壺の口縁で、20は土坑SK10、21は包含層中から出土した。22～24は甕である。24はハケの削り出しによる段をもつ。22はSK07、23・24はSK06から出土した。25はSK22、26は包含層中から、27はSK27、28はSK19から出土した。

第26図30～41は5トレンチから出土した。30～37の土師器はSD31から出土したもので、30は弥生時代後期の高杯と考えられる破片で、混じり込みと判断されるが、他のものは一括性の高い一群である。30は段を有して上方に大きく開く口縁を有するもので、外面に擬凹線が施されている。31・32は土師器高杯脚部で、ともに杯部はない。31は外面に細かな縦方向のハケメが施されている。底径の約1/4、脚部全体の約1/2が遺存している。底径10.2cm(復原)、器高5.9cm(現存)である。32は土師器高杯脚部で、杯部はないが、脚部はほぼ完存している。円形の透し穴が4方向に空けられており、外面は細かなハケメ、内面はナデている。底径の1/6を欠くものの脚部はほぼ完存している。底径13.3cm、器高6.9cm(現存)である。33の鉢は丸い底部と上に大きく開く半球形状の体部を有するもので、口縁外面は横方向のナデによりハケ目が消えている。口径16.0cm(復原)、器高6.7cmを測るものである。全体の1/2が遺存している。34～36は土師器甕で、34・35は「く」の字に大きく外反して折れ曲がる口縁を有する。35は口縁の約1/3が遺存している。36はやや小型のもので、頭部から上方にややすまる口縁をもつ。口縁の約1/3が残存している。37は小型の杯で、手づくねによるものである。38はSK05から出土した。39は包含層中から出土したものである。40の裝飾器台は包含層中より出土した。41は縄文土器で、P19から出土している。前期の北白川下層式のものである。

第26図42～45は6トレンチより出土した。42は弥生前期壺で、SD01より出土した。43は弥生時代後期の甕で、SP04より出土した。44は土師器高杯柱状部で、45は埴輪片で、外面に朱が塗布されている。ともにSD02より出土した。

(岩松 保)

(2) 7トレンチ出土遺物(第27～33図、図版第24～30)

① 溝SD02出土遺物

溝SD02からは、コンテナ20箱分の遺物が出土した。多くが第4層から出土したが、冬季における悪天候と湧水のため層位ごとの取り上げは十分ではない。ここでは、溝内一括資料として報告する。

a. 弥生土器(第27～32図、図版第25～29)

出土した弥生土器には、壺形土器(以下壺)、甕形土器(以下甕)、鉢形土器(以下鉢)、蓋形土器(以下蓋)および小型の鉢などがある。まず、これらの土器片の器種構成を考えたい。出土した土器の大半は、容器状のものと考えられる。これら容器は、部位ごとに壊れやすさが異なる。口縁部は薄く破損しやすく、底部や把手は厚く破損しにくい性質をもつ。特に弥生前期の土器の場合、

多くの遺跡で破損しにくい底部が目立つ傾向にある。S D02出土の弥生土器も類例にもれず底部が目立ち、口縁部は余り目立たない状況にあった。また、可能な限り接合作業に取り組んだが、甕が数個体復原できたのみであり、多くは破片でしかも同一個体の破片はまとまって出土していないことが明らかになった。すなわち、S D02に投棄した段階ですでに、部位の足りない破片であったものが多いと判断された。

まず、口縁部及び連続する部位の形状から壺・甕・鉢・蓋および小型の鉢に分けてその個体数を把握した。口縁部の小片については形状の把握に不確定な要素が高くなるので、概ね3cm以上の破片に限った。その結果、壺31個体、甕41個体、鉢20個体、蓋2個体、小型の鉢3個体の計97個体を確認した。これら97個体の口縁部の残存率の合計を器種別に数えたところ、壺5.3個体分、甕6.7個体分、鉢1.9個体分、蓋0.3個体分、小型の鉢1.3個体分となった。その総合計は15.4個体分にすぎない。

一方、底部や把手を基準に分類すると、壺もしくは鉢の底部と考えられるものは49個体、甕は39個体、蓋6個体、小型の鉢3個体となる。なお、残存率が1/8以下のものは除外した。これらの計は97個体となり、偶然にも口縁部で認識した個体数と一致した。しかし、残存率の合計は付表に示すように57個体分と口縁部に対して大幅に多い。底部などに対して口縁部の数が大幅に少ないことは、これらの土器類が溝から離れた位置で壊れ、大破片のみが溝内に投棄されたことを示すものと考えられ、その意味ではこれらの土器群は集落内で使われていた土器群の構成比率を概ね反映したものと推測される。

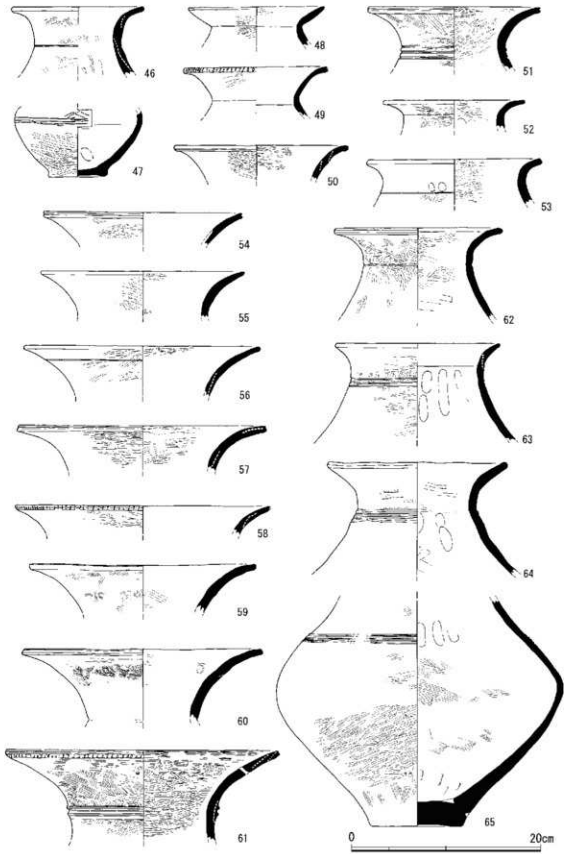
口縁部と底部等による個体数の認識が概ね一致したこと、及び残存率の合計を基にした各器種の構成比率が概ね大差ないものであったことは、その個体認識方法に大きな間違いがないということであろう。よって、S D02出土弥生土器の各器種の数量は、壺・甕・鉢及び小型の鉢の口縁部での確認数に把手で確認した蓋の数を足したものとし、壺31、甕41、鉢20、蓋6、小型の鉢3の101個体と仮定することができる。また、器種構成比率は、壺3:甕4:鉢2:その他1となる。以下、各器種について詳細を述べる。

壺(第27図46～65、第28図66・67、第32図134～165)

壺は口縁部により31個体確認した。なお、体部の文様等について特徴的なものを拓影と断面図で示した。これについては同一個体を含む可能性が高く、個体数に反映させていない。なお、各

付表2 7トレンチ溝S D02出土弥生土器の構成に係る数量把握

	口縁部				底部・把手			
	個数	割合	残存率の合計	割合	個数	割合	残存率の合計	割合
壺	31	32.0	5.3	34.3	49	50.5	29.8	52.3
鉢	20	20.6	1.9	12.3				
甕	41	42.3	6.7	43.2				
蓋	2	2.1	0.3	2.0				
小型の鉢	3	3.1	1.3	8.2				
	97	100.0	15.4	100.0	97	100.0	57.0	100.0



第27図 出土遺物実測図 土器3(7トレンチSD02-1)

土器の口径については、残存率が1割以下のものについて約〇〇cmと標記した。

壺には広口壺以外に長胴の体部を持つ直口壺(67)がある。

広口壺には頸部が縮まり口縁部が外反するもの(46～65)と、大型で太い頸部をもつもの(66)がある。66・67を除くすべての壺が前者に該当する。口径14～15cmの小型のもの、17～21cmの中型のもの、23～29cmの大型のものとして記述を進める。なお、外面及び口縁部内面の調整はハケと磨きによって丁寧に行われており、体部内面はハケとなでによるものが多い。胎土には地元の花崗岩を起源とする石英・長石を含む。

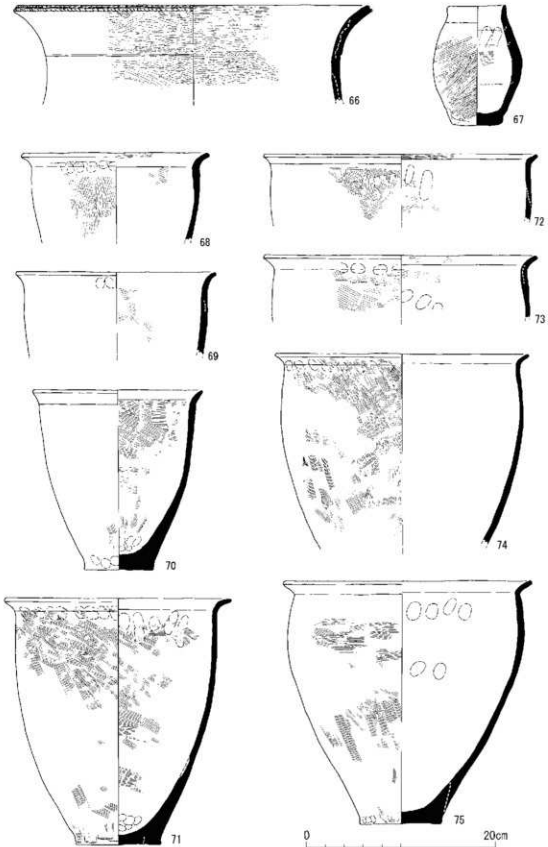
46は口径14.7cmを測る小型の壺で、頸部に段をもつ。小型のものには、48・49・52があり、それぞれ口径14.2cm、15.0cm、15.0cmを測る。49は、口縁端部に刻み目をもつ。47は体部下半部である。胴部最大径の位置に3条のヘラ描き沈線を施す。

口縁部の直径が17～21cmを測る中型のものには、50・51・53～55・62～65がある。

53は頸部境に段をもつもので口径約18cmを測る。段はヘラ状の工具で付けられているがその不連続性から貝によるもの可能性がある(図版第29)。頸部に段のみをもつものには、ほかに62・134～137がある。口径17.0cmを測る62はハケによる段を付けたのち、段部にヘラによる沈線を1条施文している(図版第29)。頸部下半部の137は、ハケによる段を付ける(図版第29)。口径18.6cmを測る64は頸部に段と沈線を組み合わせて施文するものである。段はハケ状工具により削り出して付けられ、その下に3条のヘラ描き沈線を施している。65は口縁部を欠くものであるが、頸部と胴部の境(以下頸胴部界と記す)に段と4条のヘラ描き沈線を施す。底部径9.8cmを測る。同様に段と沈線文を組み合わせたものに140～142・144・146がある。140は頸胴部界に浅い段の下に2条のヘラ描き沈線を施す。141は段を削り出した後、段の部分とその上に沈線を施す。142は頸胴部界付近に段+ヘラ描き沈線5条で施文を行っている(図版第29)。144は頸胴部界付近に2段にわたってヘラ描き沈線を施すもので、上段は段+ヘラ描き沈線3条で構成されている(図版第29)。下段は欠損しているため1条のみヘラ描き沈線を観察できる。146は頸胴部界付近に段+ヘラ描き沈線3条の下に貝殻羽状文を施す(図版第29)。

削り出し突帯をもつものには139・143がある。139は、頸胴部界付近に上下2段の削り出し突帯をもつものと思われる。上段は削り出し突帯に3条のヘラ描き沈線を施す。下段は欠損しており削り出し突帯があることがわかるにすぎない。143は胴部最大径のやや上に削り出し突帯を付けヘラ描き沈線3条を施す(図版第29)。その施文位置から139同様上下2段に施文されている可能性がある。

頸部や頸胴部界付近にヘラ描き沈線で直接施文するものには、51・63・166(図版第29)がある。51は口径18.0cmを測り、頸部に3条のヘラ描き沈線を施す。口縁端部にも1条のヘラ描き沈線をもつ。63は、口径17.2cmを測り頸部に3条のヘラ描き沈線を施す。51と63は同じく3条のヘラ描き沈線紋を施すものだが、口縁の形状は大きく異なり、51は頸部から口縁部が大きく外反して広がり、63は短く外反して終わる。内面の調整も異なり、51が頸部の下まで丁寧なヘラ磨きが残ることが特徴的である。166は、中型もしくは大型の壺の頸胴部界付近で、ヘラ状工具による直線



第28図 出土遺物実測図 土器4(7トレンチSD02-2)

文が施されている(図版第29)。54は口径23.0cmを測り、口縁部に1条の沈線紋をもつ。55は、口径約21cmを測る。

56~61は、口径が23~29cmを測るやや大型のものである。56は、口径約28cmを測る。口縁部と頸部の境に1条の浅い沈線紋を施す。57は口径26.0cmを測り、口縁端部に1条のヘラ描き沈線を施す。58は口径26.8cmを測り、口縁端部に刻み目を施す。59、60はそれぞれ口径23.8cm・24.9cmを測る。61は口径28.7cmを測り、口縁端部下端に刻み目を施すものである。口縁端面にはハケによるものか1ないし2条の浅い沈線が観察できる。口縁部には焼成後の補修孔があり、頸部には2条の貼付け突帯をもつ。頸部に貼付け突帯をもつものには、ほかに突帯上に刻み目をもつ157~159がある。157(図版第29)・158は1条の突帯を、159(図版第29)は3条の突帯である。

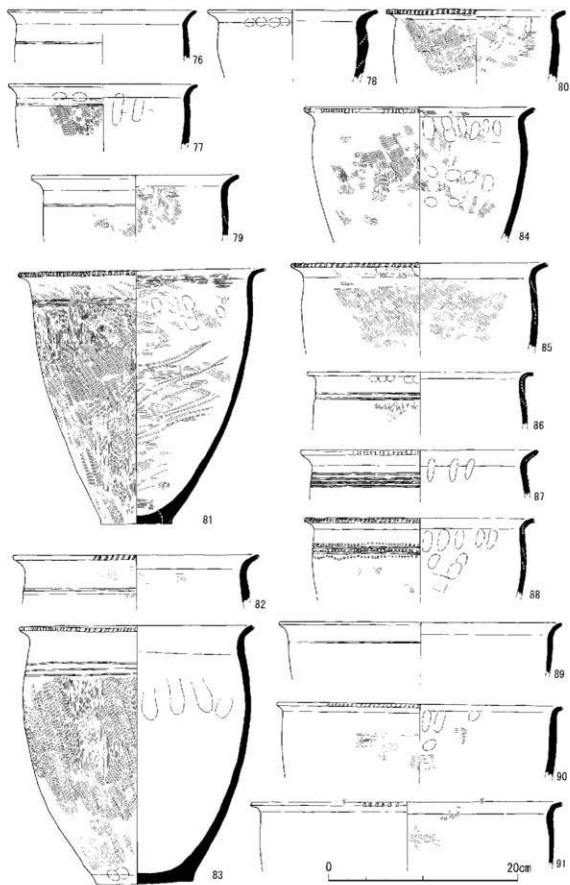
これら大型の壺は頸部以下の様子が不明であるが、61に突帯文が存在することから、肩部から胴部にかけて突帯文と羽状文で飾るもの可能性がある。

羽状文で飾るものには、146~156がある。羽状文はすべて無軸のもので、多くは復縁の殻内面に襷をもつタマキ貝などが利用されている(図版第29、146・150)。少数ながら、ヘラによる施文(155)も認められる。タマキ貝等による施文の場合は鋸歯状の圧痕が下を向いたものが大半である。ヘラ描き沈線と組み合わせるのは先述した146と147である。147は頸胴部界から胴部最大径直上まで5条のヘラ描き沈線+2.5組の羽状文+直線文1条+3.5組の羽状文+直線文2条で施文される。148には、縦位の3条の直線文があり、これを境に羽状文の向きを変えている(図版第29)。縦位の直線文は150(図版第29)・153にも認められるがいずれも3条である。148の下段の2条の沈線文が断続的な直線に見えること(図版第29)、153の横位の沈線に鋸歯状圧痕がわずかに見えること(図版第29)、羽状文が貝殻施文同様均質にわずかに円弧を描いていることなどから、鋸歯状の圧痕の見えないもの多くは復縁の内部に襷をもたないまぐりなどで施文された可能性が高い。151・152(図版第29)は、羽状文・直線文以外に竹管文を施文している。151は、貝殻の鋸歯状の圧痕が上を向く数少ない例である。羽状文には頸胴部界付近から胴部最大径直上までに施された突帯文と組み合わせるものが多い。150・152・155・156・164・165が該当し、多くは145のヘラ描き沈線の配置と同じく2段に構成されるものと考えられる。突帯は断面三角形の突帯を2条並べたものが多いが、3条から構成されるものもある。突帯上に刻み目をもつものと持たないものがある。165は、上下2段の突帯間に半円状の突帯による区画をもつもので、区画内には羽状文を施さない。

このほか、160~163のように貼り付け突帯文のみ観察できるものもある。なお、160は破片表面全面に赤彩がある(図版第29)。

66は口縁部に段をもつ大型の太頸をもつ大口壺である。口径約37cmを測り、高さは60cmほどになると予想される。口縁端部をヘラによる有軸羽状文(綾杉文)で飾る。67は、口径5.8cm、器高12.8cm、底径5.4cmを測る短頸の直口壺である。外面はハケのあとヘラ磨きを行っている。66・67ともに石英・長石を含む在地の胎土をもつ。

甕(第28図68~75、第29図76~91)



第29図 出土遺物実測図 土器5(7トレンチSD02-3)

甕は倒錐形を呈し、内面をハケとナデで、外面をハケで調整する。胎土はいずれも石英・長石を含む在地の花崗岩に由来するものである。口径17~20cmを測る小型のものと、口径24~31cmを測る中型のものがある。

68~75・78は飾らない甕である。口径17~20cmを測る小型の甕には68~70・78がある。68は口径19.4cmを、69は口径約20cmを、70は口径17.9cm・器高19.0cmを測る。いずれも短い口縁部が斜め上方に伸びる。78は口径17.8cmを測り口縁部が開き気味に延びる。72~75は口径24~31cm中型の甕である。72は短く屈曲する口縁部を持ち、口径28.8cmを測る。71・73~75はやや開き気味に延びる口縁部をもつ。71は口径23.9cm・高さおよそ26cmを測る。73は口径28.4cm、74は口径26.8cm、75は口径24.0cm・器高25.7cmを測る。

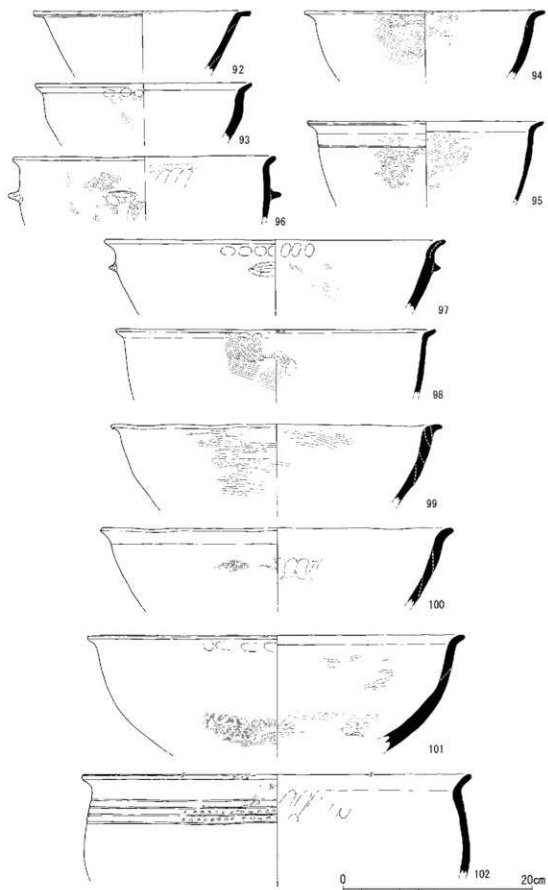
76~78・80~91は口縁部や頸胴部界付近を刻み目やヘラ描き沈線などで飾るものである。本来遠賀川式土器の甕は口縁部を刻むものであるが、日本海側には口縁部を刻まない甕が一定程度あることが知られている。確認した甕41個体のうち、口縁部を刻むものは14点に過ぎず、全体の25%と少ない。口縁部に刻み目をもち頸胴部界を飾らない甕には、80・84・85・90・91がある。80は小型の甕で口径18.9cmを測る。84は口径24.1cmを、85は27.0cmを、90は短い口縁部をもつもので口径30.4cmを測る。91は小破片で口径約32cmである。

76・77・79・81~83・86~89はいずれも頸胴部界付近にヘラ描き沈線などを施すものである。これらには、段や削り出し突帯、貼り付け突帯は見られない。76・77・79(図版第29)は小型のもので、頸胴部界付近にヘラ描き沈線を1条施す。口縁部径は76・77が19.8cmを、79が約21cmを測る。中型の甕では口径29.8cmを測る89のみが1条の沈線文で飾られ、それ以外は2条以上の沈線文により飾られている。81は口縁部に刻み目を施し、頸胴部界付近にヘラ描き沈線文2条を施す。口径26.7cm、器高27.1cmを測る。内面には松葉状の磨き痕跡が見られる。82も口縁部に刻み目をもち2条のヘラ描き沈線文を施すもので、口径約26cmを測る。86は口縁部に刻み目をもち口径約24cmを測る。83は口縁部に刻み目をもち、頸胴部界付近にヘラ描き沈線文3条を施すものである。口径25.0cm・器高27.6cmを測る。87は口縁部に刻み目をもち、頸胴部界付近にヘラ描き沈線文を4条施すもので、口径24.1cmを測る(図版第29)。88は口縁部に刻み目を施し、頸胴部界付近に2条のヘラ描き沈線文を引き、その上下3段にヘラ状工具の先端を利用した三角刺突文で加飾するものである(図版第29)。口径24.4cmを測る。

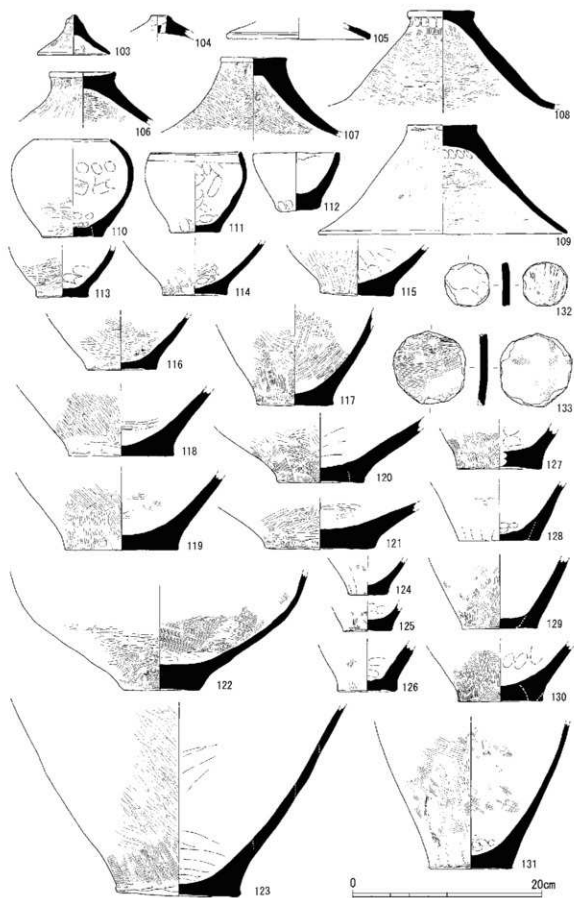
鉢(第30図92~102)

鉢は20個体確認したが小片が多く、口縁部の残存率が10%を超えるものは8個体で、全形をうかがえるものがない。この8個体については、口径13.0cmを測るもの1点、口径25~28cmを測るもの3点、33~40cmを測るもの4個体があり、概ね大中小の法量に分かれるものと考えられる。甕同様短い口縁部が大きく開き外傾する体部から底部に至る。底部は壺と区分できない。内外面ともハケとヘラ磨きで丁寧に調整するものが多くみられる。胎土にはいずれも石英・長石が含まれる。

92~96は、中型の鉢である。口径23~28cmを測る鉢は12個体ある。92・93は口径約23cmを測る。



第30図 出土遺物実測図 土器6(7トレンチS D02-4)



第31図 出土遺物実測図 土器7(7トレンチS D02-5)

94は口径25.3cmを測る。95は口径25.0cmを測り、体部上半に1条のヘラ描き沈線文を施す。ほかに沈線1条をほどこすもの(口径約26cm)と2条施すもの(口径約24cm)がある。96は口径27.4cmを測り、体部上半に一对の把手をもつものである。把手をもつものは後述する97と2個体確認した。

97~102は口径33~40cmを測る大型のものである。把手をもつ97が口径約36cmを、98が33.4cm、99が35.3cm、100が36.8cm、101が39.9cmを測る。102は体部が直立気味のもので、体部上半に3本のヘラ描き沈線文を施し、その中段と下段に円形に近い三角刺突文を施す(図版第29)。口径40.8cmを測る。

蓋(第31図103~109)

大小6個体確認した。103は乳頭状のつまみをもち、口径約7.6cm、器高4.2cmを測る。104も同様に乳頭状のつまみをもつが頂部に孔をあける(図版第29)。この2点は小型の鉢もしくは壺の蓋と考えられる。105~109は頂部の平たい傘状の蓋である。106~109は内外面を磨きで調整する。105が口径14.8cmを、109が口径26.2cm・器高11.5cm・天井部径7.3cmを測る。これら傘状の蓋には、内面に付着物があるものが含まれ、甕の蓋と考えられる。

底部(第31図110~131、図版第29)

壺、甕及び鉢の底部と考えられるものを88個体確認した。このうち113~123は壺もしくは鉢の底部である。124~131は甕の底部と考えられる。底部には成形方法を反映して、あげ底状を呈するものが見られる(116、図版第29)。また、167をはじめ底部付近にモミ圧痕を残すものが、甕2個体を含む12個体に認められた(図版第29)。

b. 土製円板(第31図132・133、図版第24)

7トレンチS D 02から2点出土している。132・133は甕の体部を円形に加工した円板である。穿孔はなく、紡錘車として利用されたものではない。

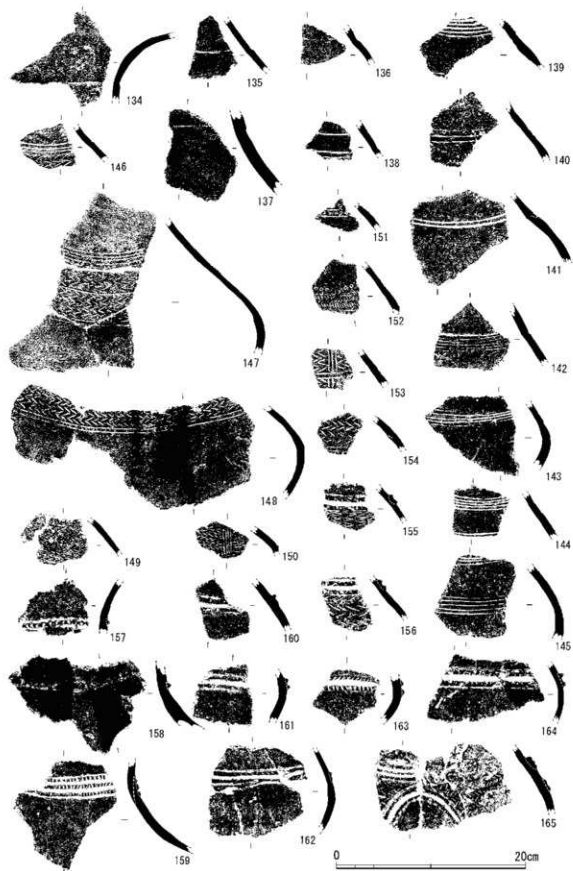
(肥後弘幸)

c. 人面付き土器(第33図、巻頭図版、図版第30)

7トレンチS D 02に多量に廃棄された土器に混じって出土した。頭部は完存しているが、首より下が割れており、欠損している土器を飾った人面と考えられるが、詳細は不明である。残存高8.5cm、顔の長さ9.15cm、顔幅5.6cm、奥行き7.1cmを測る。焼成は良好で、淡茶褐色に焼けている。胎土は精良であるが、1mm弱の白色砂が混じる。土器の内部は中空で、壺や甕を作るのと同じように粘土紐を積み上げている。与謝野町教育委員会の文化財担当の方にお伺いしたところ、この土製品の胎土や色調などは、与謝野町内で焼かれたとしてもおかしくないものである、との感想をいただいた。

土偶とは異なり、人の頭部を写実的・立体的に表現していることを特徴とする。一見して目を引くのが、頭頂部から後頭部にかけて縦方向に造形された、髻もしくは鶏冠の表現と判断される突起である。

目や口はヘラ状の工具により線刻されているだけで、やや簡略な表現である。それに対して、



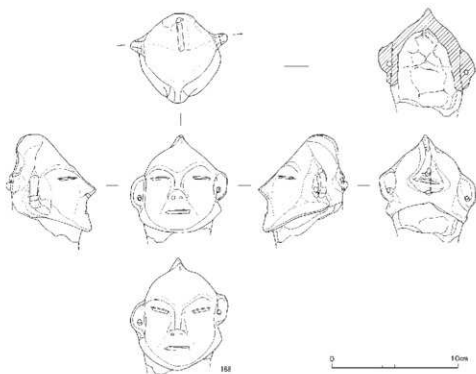
第32図 出土遺物実測図 土器8(7トレンチSD02-6)

鼻と耳は粘土を貼り付けて立体的に作っており、鼻と耳には管状の工具を刺突して穴が表現されている。隆起した鼻には、人間の鼻と同じ位置に2つの穴が穿たれているが、貫通はしていない。

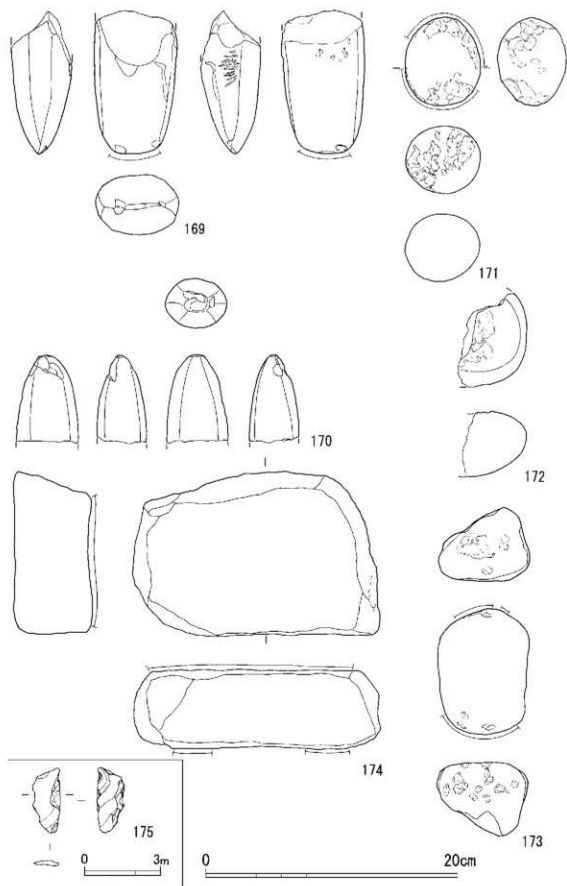
一方、耳の孔は両耳とも貫通しており、鼻の穴とは異なっている。耳の孔は耳介のやや下方、耳たぶの位置に正面方向から穿たれている。人間の外耳道の穴は顔の側面に空いているので、この孔は外耳道の穴を表現したものではないと思われる。人間の顔を正面から見ると耳のくぼみが認められるので、このくぼみを表現したと解釈することも可能である。しかしこの場合、なぜその孔が貫通しているのか、やや下方の耳たぶの位置に空けられているのかは理解できない。

以上のことから、耳飾り用のピアスの孔を表現していると考えるのが妥当と判断される。しかし、目や口・鼻は正しい位置に、線刻もしくは穴で表現されているのに対して、なぜ外耳道の穴が表現されていないのかはわからない。

頭頂部の突起は、前頭葉からはじまり、後頭部の上半部で終わっている。前頭葉から突起にかけてはなだらかに移行しており、前頭葉と突起の境に段や溝などの表現はなされていない。横から見ると、頭頂部が上方に引き延ばされたようになっている。突起の上辺は、他の部位と較べてややすり切れた状態になっているが、なぜこのようになったのかは不明である。突起は後頭部ではほぼ垂直になって終わっており、平坦な後頭部には楕円形をした突起が貼り付けられている。その上にヘラで、横方向の線刻1条がなされている。この突起の上・下には孔が開けられており、両孔の位置が上下に合致することから、縦方向に貫通していると判断されるが、現時点では孔の内部に白色の砂粒が詰まっており、貫通していない。髪を束ねて後方に折り曲げて、その先端部を櫛と棒状のヘアピンで留めたものとも思われる。



第33図 出土遺物実測図 人面付き土器(7トレンチ)



第34図 出土遺物実測図 石器

額と額の部分に朱色の斑点が観察され、頭頂部の突起の両側と根本部分が、赤黒く発色している。大阪府茨木市東奈良遺跡出土の人面付き土器では、朱・漆が塗布されており、温江遺跡の人面付き土器も朱や赤色顔料を混ぜた漆が塗布されている可能性が認められた。そのため、これらの部分について、理化学分析を実施した（理化学分析の節参照）。

その結果、額および額の赤色斑については、水銀は認められず、鉄分の比率についても地の部分と比較して有意な差は認められなかった。一方、頭頂部の赤黒い部分は、水銀は検出されなかったものの、鉄分が多く含まれていることが判明し、ベンガラが塗布されていることが明らかとなった。漆の塗布については、肉眼観察の結果、「漆特有の光沢が無く肉眼的に判断することは困難であるが、極度に漆が劣化しているか、漆の塗り甘いため残っていない」という所見を得ている。

人面付き土器は西日本での出土例は、弥生時代前期を中心に10例未満と少なく、いずれも首より下が欠損しているため、どのように土器を飾り、用いられたのかはよく分かっていない。東日本では中期を中心に盛行し、千葉県三島台遺跡での例では、壺の頸部の上に頭部が付いており、頭頂部に穴が空いている。温江遺跡の事例は、首の部分はほぼ平らに割れていることから、おそらく割れ口が水平となるように壺などの土器に取り付けていたものと思われる。

2) 石器(第34図、図版第24)

169は大形蛤刃石斧片で、基部は破損している。刃部が胴部に対して幅が狭いのが特徴的である。全体に丁寧に研磨されており、刃部には使用に伴う欠損がある。現存長11.3cm、厚さは最大で4.8cmで、重さ463gである。閃岩。4トレンチ北壁耕作土中より出土した。170は乳棒状をした石斧の基部で、刃部は欠損している。尻部は敲打により平らかに潰れている。長さは現存で7.0cm、幅、厚さは4.9cm、3.9cmである。170g。閃岩。7トレンチ溝S D02より出土した。171～173は敲石である。171はほぼ球形を呈した花崗岩の円礫で、側縁部に敲打痕が残る。長さ7.0cm、幅5.9cm、厚さ5.4cm、重さ290gである。7トレンチS D02より出土した。172は大半が欠損しているが、表裏面にすり面が見られ、その上に敲打痕が残るものである。3トレンチの包含層中より出土した。長さ7.5cm(現存)、幅5.4cm、厚さ5.2cm、重さ245gである。閃岩。173の敲石は礫の両端にのみ敲打痕が残るもので、長さ10.0cm、幅7.2cm、厚さ5.8cm、重さ527gである。閃岩。171・173はともに石器製作に用いられたと判断される。7トレンチS D02より出土した。174は石皿で、7トレンチS D02より出土した。長さ19.5cm、高さ6.2cm、幅は13.0cmである。石材は砂岩である。175は剥片で、6トレンチS K03より出土した。

このほか、7トレンチS D02からは磨石や砥石などが出土している。

(岩松 保)

6. まとめ

1) 7トレンチSD02出土の弥生土器

丹後から出土する弥生前期の土器には貝殻施文の土器が含まれることはよく知られている。京丹後市網野町松ヶ崎遺跡、同丹後町竹野遺跡、同久美浜町両石浜遺跡などの海岸部と京丹後市峰

山町途中ヶ岡遺跡、与謝野町葦ヶ崎遺跡、舞鶴市志高遺跡などの内陸部の遺跡が知られる。しかしいずれも包含層資料や溝資料であり、丹後地域の前期弥生土器の変遷の具体像に迫れる資料ではなかった。今回は非常に狭い範囲から多くの土器が出土し、それらが時間幅の短いものであるかどうか、その場合、どの時期に位置づけられるのが課題であった。

先述のように今回出土した資料は壺、甕、鉢、蓋などの器種に恵まれ101の個体を確認することができた。それらは、壺、甕、鉢ともにある程度法量規格の高いものであった。壺は、大・中・小に、甕は中・小に、鉢は大・中に概ね分類できる。このことは、時間幅の短さを裏打ちするものであり、丹後地域での初めての弥生前期の古いまとまった資料と言える。なお、今回の資料は昭和41年の竹野遺跡の織物工場建設時の出土土器群との共通性が高い。たとえば、壺Aとされたものは今回の小型・中型の壺に、壺Bとされるものは大型の壺に該当するものであろう。

壺には、ハケや削り出しによる段、削り出し突帯、貼り付け突帯とともにヘラ描き沈線文が組み合わせて用いられている。沈線文は最大5条で、1～3条のものが主体である。頸部界付近には貝殻文や貼り付け突帯文による施文が大型の壺に頻りにみられる。甕・鉢には段をもつものはなく、多くは無文であるが、少数ながらヘラ描き沈線文を体部上半に施すものが少数ある。沈線文は最大4条で1～3条のものが主体である。これらの特徴から前期中段階の資料群と位置付けることができる。

今回の土器群は、貝殻施文以外にも丹後地域のこの時期の特徴を示すものである。遠賀川土器は口縁部を刻む甕を通常に所有するが、この土器群は無文の甕が3/4を占めている。体部に段をもつものはなく、沈線文を施すものは少ないことを合わせ、「飾らない甕」が主流である。当該地域が遠賀川式土器がまとまって見られる日本海側の東限であることを考えると、その状況は興味深い。また、甕蓋が一定量存在することも当該地域の特徴であろう。

(肥後弘幸)

2) 弧状に巡る溝について

今回の調査では、弧状に溝が巡る地点が数か所で確認できた。5トレンチ溝S D31・33、6トレンチ溝S D01である。時期が明確にわかるものは、5トレンチ溝S D31である。この溝は、幅約35～40cm、検出高20～25cmで、図上では径約6mに復原できるもので、底面には小ピットが穿たれていた。形状・規模より、堅穴が削平された竪穴式住居跡の周壁溝と判断されるものであるが、溝内からは第28図30～37の土師器甕・椀・高杯が出土しており、古墳時代前期のものと判断される。

同様に、5トレンチ溝S D33は、幅20～25cm、深さは数cm～10cmで、約2.2mにわたって検出したが、溝は北で東にやや湾曲しており、南から北に向けてわずかに深くなる。直径約6mに復原できる。検出した形状は竪穴式住居の周壁溝が削平を受けた形状であるが、土層断面では幅60cm、深さ10cmと幅広の浅いものであることから、堅穴の壁際が浅く掘り窪められたと言うべき形状である。これを竪穴式住居跡とすると、S K02が主柱穴の位置に当たり、内部より土師器小片が出土している。S K05からは弥生時代後期の遺物が出土している。

6トレンチ溝S D01は、幅25～30cm、深さ約10cmで、約38mにわたって検出した。その形状から竪穴式住居跡の周壁溝と判断されるもので、復原すると径7m程度の規模となる。

これらの溝は、通常であれば、その規模・形状から、円形竪穴式住居跡と判断されるものであるが、問題は、これらの遺構の所属時期である。基本的に、丹後地域でも古墳時代前期の竪穴式住居跡の平面形は方形もしくは隅丸方形を呈しており、円形のもの確認されていない。

温江遺跡の所在する与謝野町内の竪穴式住居跡の調査例をみると、駒田遺跡では古墳時代前期の竪穴式住居跡が調査されている。全貌は確認されていないが、平面形は5.36×3.17m以上の直線を基調とした隅丸方形である。今回の調査地の約800m東にある中上司遺跡では古墳時代中期後半の竪穴式住居跡が調査されているが、平面形は方形のものである。

丹後地域に目を向けると、京丹後市の岩木遺跡では弥生時代後期の隅丸方形の竪穴式住居跡が調査されている。京丹後市橋爪遺跡では、古墳時代前期の弧状に巡る溝が調査されている。径約12mと温江遺跡のもの比べて大きなもので、内側中央に3.2×2.0mの隅丸長方形を呈する土坑があり、土坑(住居跡?)を囲繞する溝と考えられている。宮津市桑原口遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡が調査されており、基本的に弥生時代は円形で、古墳時代には方形を呈する住居跡となる。京丹後市日光寺遺跡では古墳時代前期の隅丸方形を呈する竪穴式住居跡が調査されている。

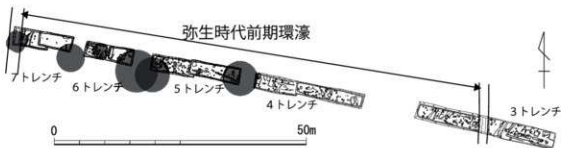
このように、温江遺跡で検出した弧状に巡る溝は、その所属時期の竪穴式住居跡の平面形を考慮すると、竪穴式住居跡とは判断できない。今回の調査では、弧状に巡る遺構全体を確認しておらず、全貌はわかっていない。加えて、5トレンチ溝S D31以外には、時期が明確に判断できる遺物が出土していないため、弥生時代に遡る可能性も否定できない。また、5トレンチ溝S D31も弥生時代後期の土器が混じっており、異なる時期の遺構が重複している可能性も否定できない。

今後の検討課題として、問題提議しておきたい。

3) 竪穴式住居跡に類似する遺構について

前項では溝S D31・33・01について、竪穴式住居跡の可能性について指摘した。もし古墳時代前期に円形住居跡が残るのならば、台石とも言うべき石の存在がある。

6トレンチ溝S D31の西側、床面と判断される位置に25cm×40cmの三角形を呈した黄色の砂岩系統の平たい石が、半ば地山に埋もれて置かれている。同じく、溝S D33の東側1.6mと2.9mの位置には、平らな石が壓っている。これらの溝が竪穴式住居の壁溝とするならば、これらの石



第35図 温江遺跡環濠・竪穴式住居跡状遺構配置図

は堅穴の床面に据えられていた台石と考えられる。

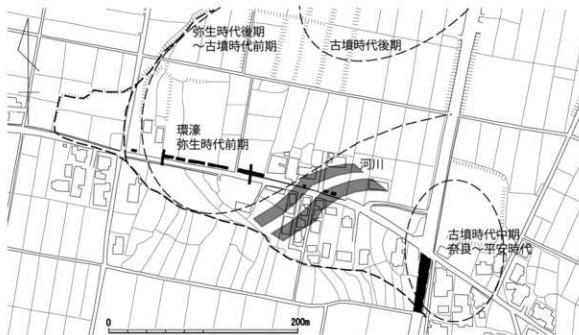
7トレンチでも同様の平石が見つっている。トレンチの南東隅に砂岩系統の平石があり、掘形が認められず、地山面に埋まった状態であったが、この平石も堅穴式住居の床面に据えられた台石と考えられる。この場合、復原径約5mに主柱と判断される柱穴が並んでいる。そして、そのように理解すると、7トレンチでは黒褐色土を埋土とするピットが数基しかないことも、堅穴の深さ分が削平され、住居床面の主柱穴のみが検出できたと解釈できる。

さらに、6トレンチ溝S D01に見るように、6トレンチの遺構検出面は堅穴式住居の堅穴分の高さにわたって削平を受けている。6トレンチの中央部やや西側では、小ピットに混じって、大形の深いピットがほぼ径3mの円形に並んでおり、堅穴式住居の主柱穴と判断される。主柱穴と判断されるSK05・10からは土師器と判断される土器小片が出土している。

4) 温江遺跡で判明したこと

今回の調査地は、温江遺跡の西南部にあたり、弥生時代前期の集落跡を確認し、野田川流域で初めて成立した弥生集落の1つと考えられる。この集落の東辺と西辺には大溝があることから、東西幅100mほどの環濠集落と考えられる。調査地は丘陵の南辺部に位置し、集落の中心は今回の調査地の北側に位置するものと推測される。西側の溝からは数多くの土器片が出土し、併せて人面付き土器が出土した。丹後地域の弥生文化や習俗を理解する上で、貴重な資料となるであろう。また、弥生時代前期の集落の後に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけても集落が営まれていることが判明した。

遺構の遺存状況は、今回の調査地は東から西に向けて緩やかに下る台地上に位置しており、田畑として開墾されているためか、包含層まで遺存している部分と大きく削平を受けている部分があるが、おおむね良好と言えるものである。



第36図 温江遺跡集落遺構想定図

環壕の中と判断される3～7トレンチでは、堅穴式住居跡と判断される遺構が6か所、堀もしくは掘立柱建物跡と判断される遺構1か所を検出した。これらは、明確に弥生時代前期までさかのぼるものはなく、時期がはっきりわかるものは弥生時代後期～古墳時代前期のものである。しかし、弥生時代前期の土器片を伴うピットや土坑が少なからず存在することから、前期の集落が存在することは確実であろう。

一方、弥生時代後期～古墳時代前期の集落および谷状地形が確認できたことは、周辺に数多く造られた前期～中期の古墳を実際に造営した集落である可能性もある。

また、6トレンチでは小片ではあるが、埴輪と判断される遺物が出土した。このことより、周辺に古墳もしくは埴輪製作に係わる施設が存在する可能性がある。

さらに、現地地を見ると、8トレンチの東側に段差が認められ、ここが丘陵の端にあたるものと考えられていたが、今回の調査で丘陵がさらに西に延びていることが分かり、温江遺跡の範囲はさらに西に広がるものと推測される。

遺構・遺物としては、耕作土・床土から出土したものを除くと、1～7トレンチでは弥生時代前期～古墳時代前期のものが大部分であり、わずかに、6トレンチで縄文土器片・埴輪片・須恵器小片、3・4トレンチで近現代の瓦片や陶磁器類を検出したにとどまる。遺構検出面を覆う包含層である黒褐色土には、弥生時代前期～古墳時代前期の遺物しか含まれておらず、過去の調査で確認されていた古墳時代後期・奈良～平安時代の遺構・遺物は全く確認できなかった。

このような遺構・遺物の堆積状況から、今回の調査地周辺は弥生時代前期～古墳時代前期に人が住まう居住区として用いられた後、人間がこの地を利用した形跡は、6トレンチの一部の溝以外には全く認められない。これは、古墳時代前期の集落が廃絶してすぐに、耕地として用いられたためと考えられるのではないだろうか。もしそうならば、温江遺跡が分布する丘陵上の水田開発は古墳時代中期にまでさかのぼると言え、それ以後、変わらずに、耕地として土地利用されていたと考えられる。

(岩松 保)

調査参加者は以下のとおりである

調査補助員：奥田栄吉、小笠原順子、長谷川陶子

整理員：村上優美子、長尾美恵子、田中ゆかり、寺尾貴美子、谷上真由美、松井忍、山川雪乃、赤瀬弓子

作業員：田辺延也、赤西利夫、有田博子、横谷都子、砂後裕、的場三郎、足立征男、横谷秀樹、近本正秀、

山崎記久子

参考文献

「橘爪遺跡発掘調査概要」〔埋蔵文化財発掘調査概報〕1981 第2分冊 京都府教育委員会) 1981

「日光寺遺跡 国道178号バイパス関係遺跡 昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」〔京都府遺跡調査概報〕第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

「桑原口遺跡 京都縦貫自動車道関係遺跡 平成7年度発掘調査概要」〔京都府遺跡調査概報〕第75冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

『岩木遺跡 京都府丹後町文化財調査報告』第4集 丹後町教育委員会 1989

『駒田遺跡・金屋遺跡 加悦町文化財調査報告書』第27集 京都府加悦町教育委員会 1982

『中上司遺跡Ⅱ 加悦町文化財調査概要』5 加悦町教育委員会 1986

『竹野弥生遺跡』丹後古代文化研究会 1992

濱田延充「口縁端部を刻まない甕—山陰地域の遠賀川式土器—」(『みずほ』第34号 大和弥生文化の会) 2002

付編 理化学分析 温江遺跡出土人面付き土器付着赤色物の蛍光X線分析

1) はじめに

与謝野町加悦に所在する温江遺跡からは、府道改良事業に伴い弥生時代前期の環濠と考えられる2条の大溝が検出され、その西側の溝より人面付き土器が出土した。ここでは、付着する赤色物について蛍光X線分析を行い、組成を検討した。

2) 試料と方法

分析対象資料は、弥生時代前期の人面付き土器である。資料は、顎・上唇の上部・額に褐色がかった赤色物が見られ、また、頭頂部の「とさか」状突起に黒色物および赤色物が見られる。そこで、顎の褐色がかった赤色物(No.1)、対照試料として赤くない箇所(No.2)、頭頂部の赤色物(No.3)の3ヶ所より、セロハンテープに極少量採取して分析試料とした(表)。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)で、試料室の大きさは350×400×40mmである。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いので、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。また、この装置は試料ステージを走査しながら測定することにより二次元的な元素分布図を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析での測定条件は、50kV、0.82～1.00mA(自動設定による)、ビーム径100 μ m、測定時間500sに設定した。定量分析は標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

3) 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1に示す。

いずれの試料からもアルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウ

表 温江遺跡人面付き土器分析試料一覽

分析No	部位	備考
No.1	顎	褐色がかった赤色物
No.2	土器内面	赤くない箇所
No.3	頭頂部	赤色物

ム(Ca)、チタン(Ti)、鉄(Fe)が検出された。

また、資料の実体顕微鏡観察により得られた画像を図版1上段～中段に示す。

4) 考察

弥生時代前期に使用されていた赤色顔料としては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は、硫化水銀(Hg S)を鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1μmのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており(岡田1997)、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す(成瀬1998)。

褐色がかった赤色物であるNo.1は、ケイ素など土中成分あるいは土器胎土に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定でき、顔料とするとベンガラの一種と考えられる。しかし、対照試料であるNo.2と比べると鉄が僅かに多い程度でしかなく、分析結果において明確な差異が得られたとは言いがたい。そこで、当初は資料が装置試料室に入らないため測定を見合わせていた元素マッピング分析について、慎重に検討を重ね試料の置き方を工夫した結果、一部測定が可能であることが判明したため実施を試みた。その結果得られた元素マッピング図を、図版1下段に示す。図を見ると、赤色部と他の部分との鉄の輝度の差は殆ど無いことがわかる。実体顕微鏡下での観察でも焼成後に塗られた様子ではないことから、総合的に考えると顔料として意図的につけたものではなく焼成時の火加減等により偶然出来たものである可能性が高いと思われる。

No.3もNo.1と同様水銀は検出されず、鉄が高く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定でき、顔料としてはベンガラに分類できる。また、採取試料を生物顕微鏡下で観察したが、パイプ状粒子は観察されなかった。なお、頭頂部の赤色顔料とともに存在する黒色物については、漆特有の光沢が無く肉眼的に判断することは困難であるが、極度に漆が劣化しているか、漆の塗りが甘いために残っていないなど考えられる。

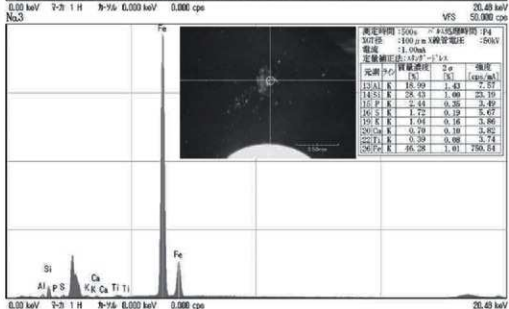
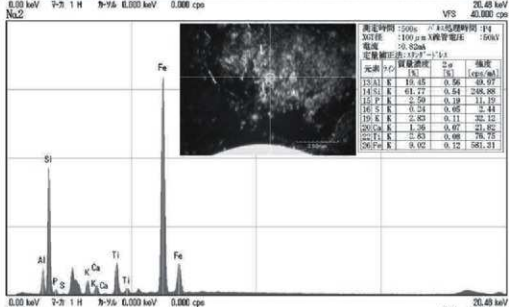
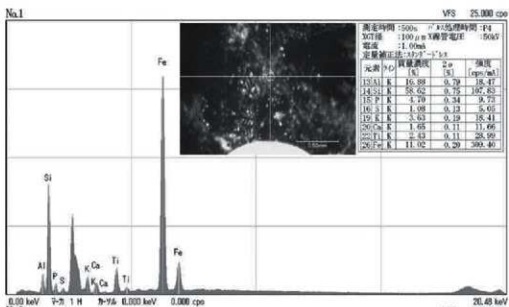
5) おわりに

温江遺跡より出土した人面付き土器に付着する赤色物について分析した結果、顎などにある褐色がかった赤色物は他の部分と鉄の含有量に殆ど差が無く、顔料である可能性は低いと判断された。頭頂部にある赤色物は、赤色顔料のベンガラと判断された。

竹原弘展・藤根久(パレオ・ラボ)

引用・参考文献

- 成瀬正和「縄文時代の赤色顔料Ⅰ—赤彩土器—」『考古学ジャーナル』No.438, pp.10-14, ニューサイエンス社 1998
- 成瀬正和「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要』 pp.13-61, 宮内庁正倉院事務所 2004
- 岡田文男「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』 pp.38-39 1997



2.室橋遺跡第15・17次発掘調査報告

はじめに

室橋遺跡第15次・第17次調査は、主要地方道亀岡園部線幹線道路改良事業交付に先立って、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。

室橋遺跡は、京都府南丹市八木町室橋に所在する。周辺は丹波地域の中でも遺跡が多く分布する地域であり、南に弥生時代後期の焼失住居や、平安時代後期の正方位をもつ掘立柱建物跡群が検出された野条遺跡や、玉作り工房や多数の方形周溝墓群が検出された弥生時代中期の拠点集落である池上遺跡が所在する。東には諸木山裾部に集落遺跡が広がり、弥生時代後期の住居跡や、古墳時代中期の導入期竈をもつ住居が点在する大谷口遺跡や、弥生時代後期前半の住居跡や、最古式の造り付け竈をもち、初期須恵器を出土する住居群を検出した諸畑遺跡が所在する。

室橋遺跡の調査は、は場整備事業の実施に先立ち、平成10年度から旧八木町教育委員会によって試掘が行われ、以後、17次の調査を経てその概要が明らかになっている。当遺跡は、弥生時代中期から近世までの複合集落遺跡で、これまでに弥生時代中期の住居跡、古墳時代中期から後期の集落、さらに奈良～平安時代にかけての溝群が確認され、各所に灌漑用水路が掘削されていることが明らかとなった。今回の調査では、第15次調査で、古墳時代後期の住居群が検出され、奈

付表3 室橋遺跡調査次数一覧(調査主体の各教育委員会を省略)

次 数	調査主体	調査年度	面 積	主 要 遺 構	備 考
第1次	八木町	平成10年度	40㎡	柱穴等(古代～中世)	試掘
第2次	南丹市	平成17年度	170㎡	竪穴式住居(古墳)・柱穴(奈良～平安)・溝(平安)等	試掘
第3次	当センター	平成17年度	200㎡	柱列(奈良～平安)・竪穴式住居・溝(鎌倉)等	試掘
第4次	当センター	平成18年度	400㎡	竪穴式住居(古墳中期)・溝(平安)等	本調査
第5次	当センター	平成18年度	1,230㎡	竪穴式住居(古墳後期)・溝(平安)等	本調査
第6次	京都府	平成18年度	236㎡	竪穴式住居(古墳中期)・掘立柱建物(奈良)等	本調査
第7次	京都府	平成18年度	—	竪穴式住居(古墳中期)・溝・土坑等	立会調査
第8次	南丹市	平成18年度	280㎡	竪穴式住居(古墳後期)・溝(平安)・柱穴等	本調査
第9次	南丹市	平成18年度	250㎡	溝・柱穴(平安)等	試掘
第10次	京都府	平成18年度	257㎡	竪穴式住居(古墳中・後期)・溝(平安)	本調査
第11次	当センター	平成18年度	2,600㎡	竪穴式住居(古墳中期)・溝(奈良～平安)	本調査
第12次	南丹市	平成19年度	400㎡	溝(奈良～平安)・柱穴	本調査
第13次	京都府	平成19年度	800㎡	溝(奈良～平安)・土坑(平安)・柱穴	本調査
第14次	南丹市	平成19年度	235㎡	溝(奈良～平安)・柱穴	本調査
第15次	当センター	平成19年度	1,830㎡	溝(弥生)・竪穴式住居(古墳後期)・掘立柱建物・溝(奈良～平安)	本調査
第16次	南丹市	平成19年度	580㎡	溝(平安～鎌倉)・柱穴	本調査
第17次	当センター	平成20年度	1,200㎡	溝(弥生)・溝(古墳中期)・竪穴式住居(同後期)・溝(奈良～平安)	本調査

良時代後期～平安時代初頭の大規模な掘立柱建物跡が確認されている。また第17次調査では、弥生時代の大規模な溝や、古墳時代中期の溝、平安時代後期の灌漑用水とみられる溝群を検出した。

第15次調査は、平成19年度事業として実施し、平成19年9月5日～平成20年3月7日の期間を調査期間にあて、1,830㎡の調査を実施した。また第17次調査は、平成20年度事業とし、平成20年12月3日～平成21年2月25日の期間をあて、1,200㎡の調査を実施した。発掘調査は、当調査研究センター調査第2課長肥後弘幸、調査第2課第2係長森正、同次席総括調査員辻本和美、同調査員高野陽子が担当した。本報告書の執筆は、(Ⅰ)を辻本が執筆し、(Ⅱ)を高野が執筆し、そのほかを高野がまとめた。

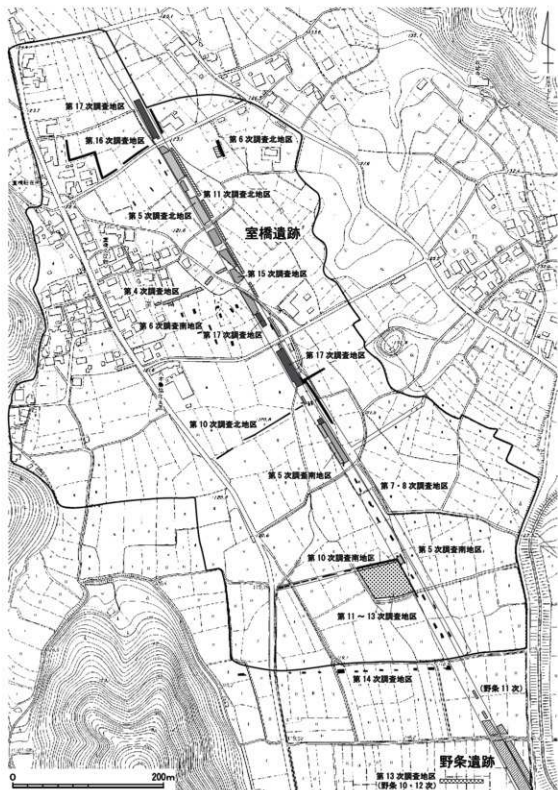


第1図 調査地位置図

- | | | | | | |
|----------|------------|------------|----------|------------|----------|
| 1. 室橋遺跡 | 2. 野条遺跡 | 3. 新庄城跡 | 4. 新庄遺跡 | 5. 船枝遺跡 | 6. 清谷古墳群 |
| 7. 大谷口遺跡 | 8. 諸畑遺跡 | 9. 八木田遺跡 | 10. 日置遺跡 | 11. 幡日佐遺跡 | 12. 如城寺 |
| 13. 野条城跡 | 14. 池上院 | 15. 筏森山古墳群 | | 16. 城谷口古墳群 | |
| 17. 池上遺跡 | 18. 池上古里遺跡 | 19. 刑部城跡 | | 20. 多国山古墳群 | |

調査に際しては、南丹市教育委員会、京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して、感謝したい。^(8.13)なお、今回の調査にかかる経費は、全額、京都府建設交通部が負担した。

(高野陽子)

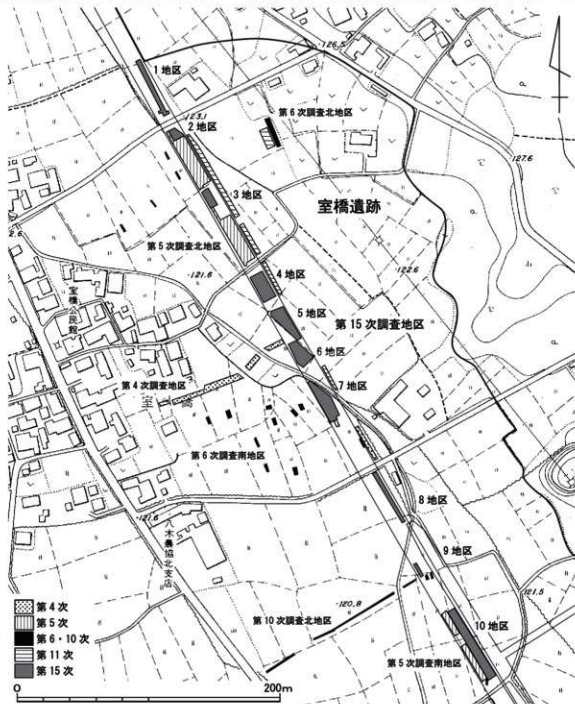


第2図 室橋遺跡調査区配置図

(I)室橋遺跡第15次調査

1. 調査の概要

第15次調査は、全体で10地区の調査区を設けた。室橋遺跡の北部に第1～6地区を設定し、南部に第8～第10地区を設定した。このうち、第1地区と第7地区は、試掘調査である。第1地区は、第17次の1地区調査が本調査となるもので、また第8地区は、第17次の第2地区調査で本調査を実施している。これらの報告については、後述する第17次調査報告においてあわせて述べる。



第3図 第15次調査地配置図

(1) 層序

第15次調査地における標高は、北側にあたる第1地区で122.3m、南側の第10地区で約119.6mを測り、北から南に向けて傾斜する地形を示す。検出遺構面の標高については、第1地区で約121.8m、第10地区で約119.2mを測り、ほぼ地形の高低と対応する。調査前の現状は第9・10地区が、道路造成土が敷設されていた以外は水田および畑地であった。層序は、耕作土の下が鉄分を含む灰色ないし暗褐色土の水田床土で、第1地区から第7地区では概ねこの直下で遺構を検出した。遺構検出面は暗黄灰褐色ないし黄褐色の粘質土で構成され、遺構面は後世の耕作等により多少削平を受けているものとみられる。第7地区以南の地区では、耕作土・床土の下に、いわゆる丹波黒ボクの再堆積と思われる黒褐色粘質土がみられた。

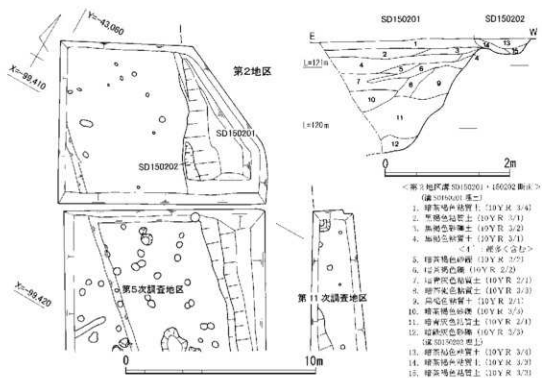
以下、それぞれの調査地ごとに主な検出遺構を概略する。

(2) 各調査区の検出遺構

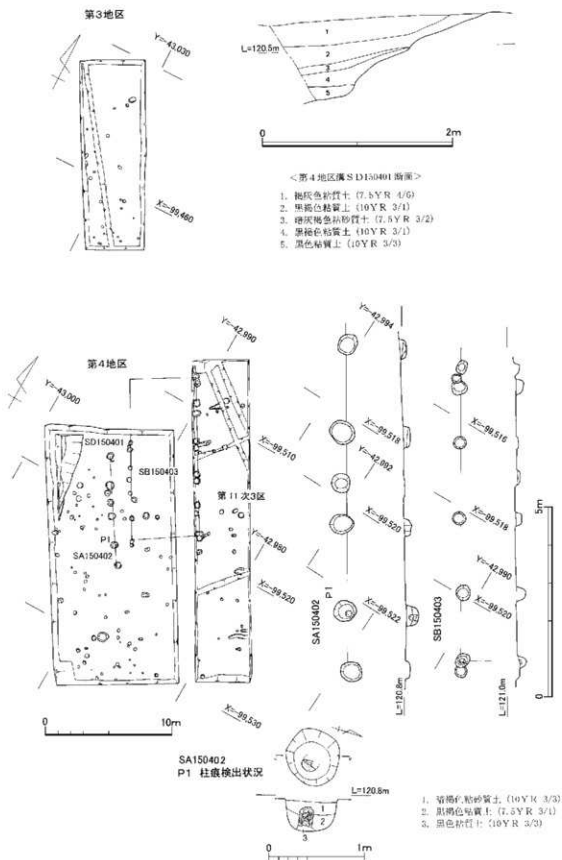
1) 第1地区

今回の調査対象地のうち最も北側に位置する。概ね室橋遺跡の推定範囲の北限に相当する地域である。第5・11次調査で、幅約5mにおよぶ大規模な溝(大溝)が検出されている。今回は、溝の延長部にあたる北側に調査区を設定し、溝の規模および残存状況を確認するために試掘調査を実施した。調査トレンチは長さ約37.5m、幅3.5mを測る。調査面積は131㎡である。

調査の結果、北西から南東方向にのびる大規模な溝(大溝)の延長を確認した。大溝は今回調査を行った室橋遺跡の推定範囲を越えてさらに北側に延長する。遺構検出面は現水田面から深さ約0.6mを測る。大溝のほか、調査地北部で小ピット群を検出した。なお、同地区については第17



第4図 第2地区遺構配置図、溝SD150201土層断面図



第5図 第3・4地区遺構配置図、横列SA150402、掘立柱建物跡SB150403実測図

次調査で大溝を中心とする本調査を実施した。

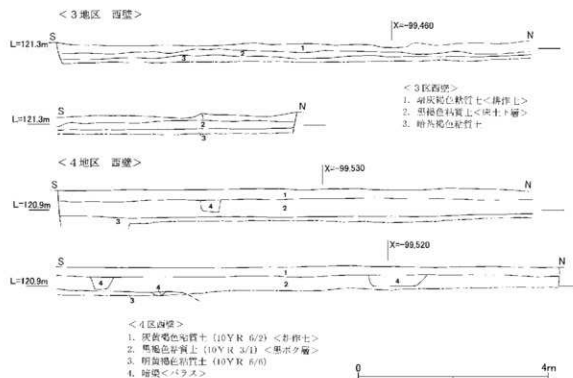
2) 第2地区(第4図)

第5次および第11次調査地の北側に接して設定した調査区で、前回調査で確認されている大溝の規模を確認することを目的とした。調査面積は87㎡である。

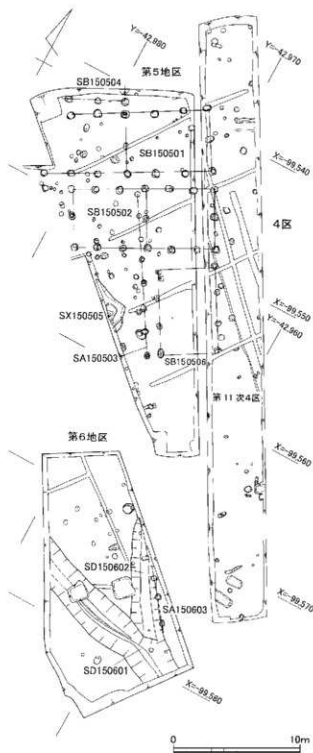
溝 S D 150201 調査地東側から、溝西側肩部の延長約8m分を検出した。溝は黄褐色の地山面から約55°の傾斜角度で掘り込まれている。溝の下部では傾斜角度が緩くなり、そのまま底部に移行していくと思われ、溝の断面形は底部が平坦な台形を呈するものと想定される。なお、トレンチ壁の崩落の危険があり、底部は西側下部付近の一部を確認するにとどまった。検出面から今回の溝最深部までの深さは約1.8mを測る。溝内の堆積土は、粘土質土と砂礫の互層からなり、上層(①～③層)、中層(④～⑩層)、下層(⑪層)の3層に大別される。特に中層では不整合な堆積面がみられ、滞水によって形成された粘質土層が、砂礫の移動を伴う強い流水によって削り込まれた状況が窺える。堆積の状況からみて、溝は滞水と流水を繰り返しながら埋没していったものと思われる。本溝内からは、第5次調査で弥生時代後期後葉～古墳時代初頭とみられる土器片が出土しているが、今回の調査では遺物は出土しなかった。第5次調査では上層から奈良時代後期後半から平安時代初期に属する須恵器が出土しており、溝の埋没時期が窺われる。

溝 S D 150202 溝 S D 150201の西側上部を切るかたちで平行に延びる溝である。幅0.9m、深さ0.25mを測る。溝の断面は底部が平坦な「U」字形を呈する。北側部分は溝 S D 150202と重複しており明確な溝形を検出することができなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

3) 第3地区(第5・6図)



第6図 第3・4地区土層断面図



第7図 第5・6地区遺構配置図

柱穴は直径約0.6mの円形で深さ約0.35mを測る。各柱間は2.3～2.4mを測る。主軸はN35°Wである。南端部の柱穴P1内に柱根の一部が遺存した。腐食が著しいが復原径20cmを測り、残存部の高さは20cmを測る。樹種はスギとみられる。

溝SD150401 調査地北西角で検出した南北方向に延びる溝である。溝上肩の東側辺約8m

第5次調査の第1地区と第2地区の間に設けた調査区で、第3次調査区の東側に位置する。第5次調査では、奈良時代後半から平安時代に属する掘立柱建物跡や工房跡と推定される半地下式建物跡が検出されている。今回の調査では柱穴状ピット、暗渠排水溝等を検出した。柱穴状ピットは規模が小さく建物跡としてはまとまらなかった。調査面積は83㎡である。

4) 第4地区(第5・6図)

第11次調査第3地区を西側に拡張して設定した調査区である。掘立柱建物跡1棟、柵1条、溝1条を検出した。調査面積は210㎡を測る。

掘立柱建物跡SB150403 第11次調査で東側桁行柱列が確認された掘立柱建物跡SB11301に対応するものと思われる。今回、この西側で平行する4基の柱穴を検出した。柱穴の規模は0.4m前後で、各柱穴間の距離は2.2～3.0mを測る。北側の2間分は調査範囲外になる。建物跡の主軸はN28°Wである。今回検出した西側柱列と東側柱列の柱間は約5.5mを測るが、この間では柱穴は検出できなかった。所属時期は奈良時代後半～平安時代初頭と推定される。

柵SA150402 調査地の中央部で検出した南東から北西にのびる4基(P1～P4)の柱穴からなる。東西に対応する柱穴がみられないことから柵とした。

分を検出した。溝西側は調査地外になる。掘削範囲での最深度は0.85mを測る。溝の断面は底部が平坦な台形を呈しており、中程で段を形成する。堆積土は黒褐色粘質土の互層からなる。溝の方向からみて、第5次調査の溝SD230および第11次調査の溝SD11201の南延長部に相当するものと思われる。第5次調査では上層から古墳時代前期の甕が出土しており、溝の埋没時期を想定できる。

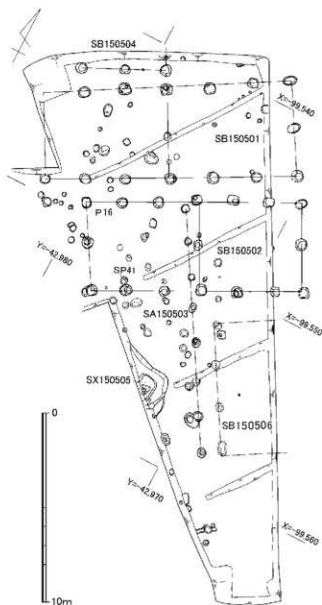
5) 第5地区(第7～9図)

第11次調査の第4地区の西側に接して設定した調査区である。掘立柱建物跡4棟、橋1条のほか、焼土坑、風倒木痕を検出した。調査面積は265㎡である。

掘立柱建物跡SB150501(第7～9図) 第11次調査第4地区のトレンチ西壁際で、建物東梁間を構成すると思われる3基の柱穴が検出されており(SB11405)、今回、西側への拡張で梁間2間(約5m)×桁行6間(約13.2m)の東西棟の掘立柱建物跡であることが判明した。建物西梁間柱列の北

西角柱と中間柱については、この地点が西側で一段下がるため検出できなかった。建物主軸はN62°Eである。柱穴掘形はほぼ方形で一辺の規模は約0.5～0.6m、深さ約0.2～0.3mを測る。掘形内には柱痕跡が認められるものがある。各柱穴間の距離は2.4～2.5m前後ではば8尺等間を測る。東側柱列から3間分にあたる梁間中央で柱穴が検出されており、内部を二等分する間切り柱をもつ建物に復原できる。南側に約1.2mの間隔を置き、掘立柱建物跡SB150502が同一方向に並行するが、近接具合からみて同時に建てられていたとは考えにくい。建物跡に切り合い関係がなく先後関係は不明である。所属時期については、柱穴掘形の規模や形状から奈良時代後半～平安時代初頭と思われる。

掘立柱建物跡SB150502(第7～9図) 掘立柱建物跡SB150501の南側に近接して検出された建物跡で、第11次調査で検出した掘立柱建物跡SB11406の西側本体部分にあたる。今回、桁



第8図 第5地区遺構配置図

行柱穴の南北各6基分を検出し、梁間2間(約4.8m)×桁行6間(約11.4m)の東西棟の建物跡であることが判明した。なお、建物北西隅柱の柱穴P16の西延長上に、柱穴状のピットが数基みられるが、掘形が浅く本建物とは直接関係しないものと思われる。建物の主軸はN62°Eで、掘立柱建物跡S B150501と並行する。柱穴掘形はほぼ方形で、一辺の規模は約0.4～0.5m、深さ約0.3m前後を測る。掘形内には柱痕跡を残すものがみられる。各柱穴間の距離は1.8m前後でほぼ6尺等間を測る。掘立柱建物跡S B150501と同じく、東側柱列から3間分の梁間中央で柱穴が検出されており、間仕切りをもつ。本建物の平面構造は、掘立柱建物跡S B150501に類似するが、柱穴規模が前者に比べ少し小振り、柱間隔も短い等、全体的に規模が小さい。しかしながら、両建物の東側柱列は揃えられており、計画性をもって建てられたことが窺える。所属時期については、掘立柱建物跡S B150501と同様、奈良時代後半～平安時代初頭と思われるが、先後関係については不明である。

掘立柱建物跡S B150504(第7・8図) 調査地の北端で東西に並ぶ3基の柱穴を検出した。今回検出した東端の柱穴から東側には柱穴が検出されないことから、これを南東隅柱とし北西側に広がる東西2間以上の掘立柱建物跡が想定される。建物主軸はN67°Eである。柱掘形は隅円方形を呈し、一辺約0.5m、深さ0.25m前後を測る。各柱間隔は2.1mと2.4mを測る。掘立柱建物跡S B150501と北側に1m程の間隔をもって近接するため、同時に併存しなかったものと思われるが、先後関係は不明である。時期は先の2棟同様、奈良時代後半～平安時代初頭と思われる。

掘立柱建物跡S B150506(第7図) 調査地南側で南北に並ぶ柱穴4基を検出した。第11次調査掘立柱建物跡S B11407に対応する西側柱の柱穴列とみられる。南北棟建物で、桁行3間(7m)を測る。主軸はN32°Wを示す。柱穴の一辺は約0.6mで、各柱穴の間隔は2.1～2.3mを測る。桁行の東側柱列との間隔は約4.7mを測るが、この中間にあたる位置では柱穴を検出できなかった。所属時期は、上記の建物跡群と建物方向が同じであることからみて、同時期と思われる。

櫓S A150503(第7～9図) 調査地中央で検出した柱列である。南東から北西方向に直線上に8基の柱穴が並び、この両側に対応する柱列が検出できなかったことから櫓とした。主軸はN31°Wで、長さ13.2m(7間)を測る。柱掘形は隅円方形を呈し、一辺0.4～0.5m、深さ約0.2mを測る。列北端の柱穴から3基目の柱穴は他のものに比べ浅い。各柱穴間の距離は1.6mから2.0mとばらつきがみられる。所属時期は、建物群と同時期と思われる。

焼土坑S X150505(第7・8図) 調査区の南東隅で検出した埋土に焼土が混じる浅い土坑である。検出範囲が部分的であるため規模や性格等については不明である。

6) 第6地区(第10図)

第11次調査第5地区の北西側に設定した調査区である。主な遺構としては、溝2条、土坑、柱穴列がある。調査面積は172㎡である。

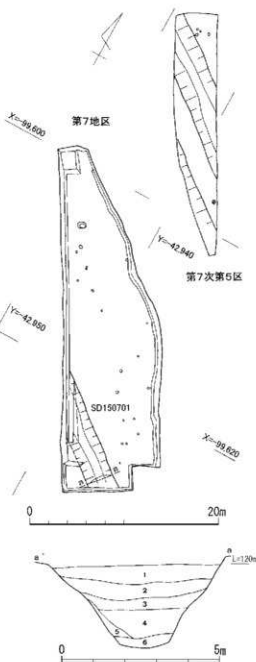
溝S D150601 調査区の西寄りで検出した北西から南東方向にのびる溝で、第5次調査第5地区で検出された溝S D501および第11次調査第5地区で検出された溝S D11501の北延長部にあたる。今回、延長15m分を確認した。溝上肩の幅は約3mを測る。後述する溝S D150602が南側

は認められないため、開削は、最初の溝掘削後の早い時期に行われたものと思われる。溝の開削時期は、出土遺物から奈良時代後半～平安時代初頭とみられる。後述する溝SD150602も同時期に比定されるもので、本流となる本溝(SD150601)への排水溝と考えられる。なお、本溝の南側では調査地南西角に向かって遺構面が大きく下がっていくことを確認した。

溝SD150602 溝SD150601の南東側で合流する溝である。北西方向からやや南東方向にのびる。約9m分を検出した。溝断面は緩い「U」字形を呈しており、溝内には暗褐色粘質土が堆積する。規模は最大幅2.3mを測り、溝底は合流点付近では深さ0.5m、北端部では0.1mとなり、南から北側に向かって急傾斜で浅くなる。北側部に位置する第5地区では、溝の延長が検出されていないため、途中で途切れるものと思われる。溝SD150601との合流点付近で少量の炭と共に墨書土器を含む須恵器杯がままとって出土した。出土した位置は溝SD150601内に含まれるが、層位的にみて本溝の溝底部の延長部にあたっており、本溝から流れ込んだ可能性が高い。溝上層の堆積層は、黒褐色の粘砂質土で溝SD150601の上層と一体となることから、同時期に埋没したことが窺える。溝上流方向の北西側には第5地区の奈良時代後半～平安時代初頭の掘立建物跡群が存在しており、本溝はこれらの施設の排水の役割をもつ溝と思われる。

柱穴状ピットSP3(第10図) 長径0.45m、短径0.35m、深さ0.15mを測る長楕円形のピットで、内部から土師器皿(第17図23)が出土した。

櫛SA150603(第10図) 溝SD150602の東上層の緑部から並んで検出した柱列で、柱穴3基2間分(長さ約3.6m)を検出した。主軸はN35°Wである。柱穴は径0.4m、深さ0.2mで平面形は円形を呈する。柱間は2.1m(南)、1.5m(北)を測る。北東側は調査地外、南西側は溝SD150602部分にあたり柱穴の延長を確認していないので櫛とし



<第7地区溝SD150701断面>

1. 黒褐色粘質土 (10YR 2/2)
2. 暗褐色粘質土 (10YR 3/2)
3. 暗茶褐色粘砂質土 (10YR 3/3)
4. 暗褐色粘砂土 (10YR 2/3)
5. 暗茶褐色粘質土 (10YR 3/3)
6. 暗褐色粘質土 (10YR 2/2)

第11図 第7地区遺構配置図、溝SD150701土層断面図

たが、東側に展開する建物跡になる可能性もある。溝S D150602の上から掘られており、所属時期は溝より新しい。

7) 第7地区(第11図)

第6地区から新庄用水を越えた南側に位置する調査区で、溝1条、小ピットを検出した。調査面積は300㎡である。

溝S D150701(第11図) 第5次調査6地区の試掘調査で確認された溝S D601の南東延長部にあたる。溝は北西から南東方向にのび、幅約3m、深さ約1.5mを測る。延長約15m分を確認した。溝の断面形は底部の平坦な台形を呈し、黒褐色粘質土面から掘り込まれるが、北側では砂礫を多量に混じえる面から掘削される。溝の埋土は、黒褐色ないし暗褐色粘質土で、以下が粘質土の中に砂礫を含む土層、最下層は強度の強い粘質土になる。今回の検出地点では西上肩部からの粘質土の流れ込みがみられた。溝上層からは、古墳時代から奈良～中世の須恵器・土師器・陶磁器片が出土したが、これらは後世の流れ込みによるものと思われる。溝の時期については不明である。

8) 第8地区

第7地区南側の道路を越えた地点で行った試掘調査である。溝2条のほか、小ピットを検出した。調査面積は132㎡である。本地区については、第17次調査第2地区で西側部分を拡張し発掘調査を行った。

9) 第9地区(第12図)

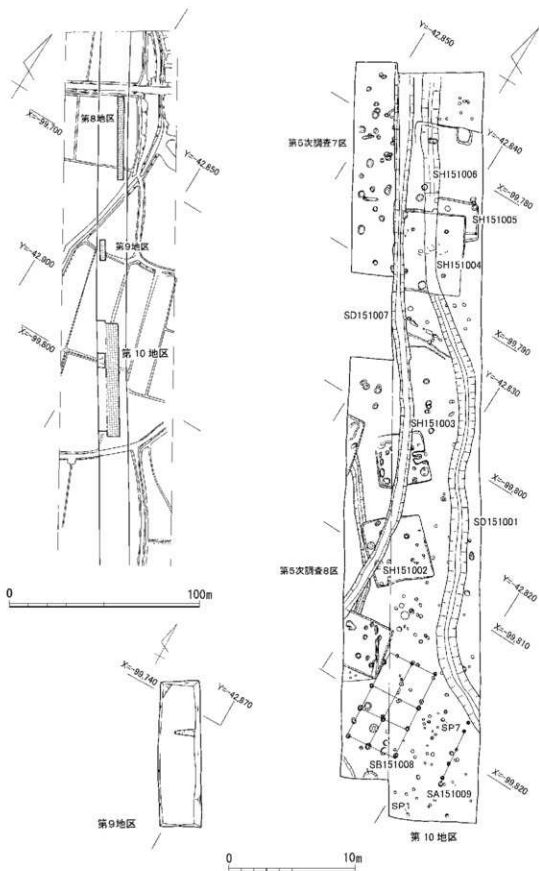
第8地区と第10地区の間に設けた調査区で、調査面積は30㎡である。調査地の北西肩で溝状の落ち込みの一部を確認した。このほかは特に顕著な遺構は検出されなかった。

10) 第10地区(第12・16図)

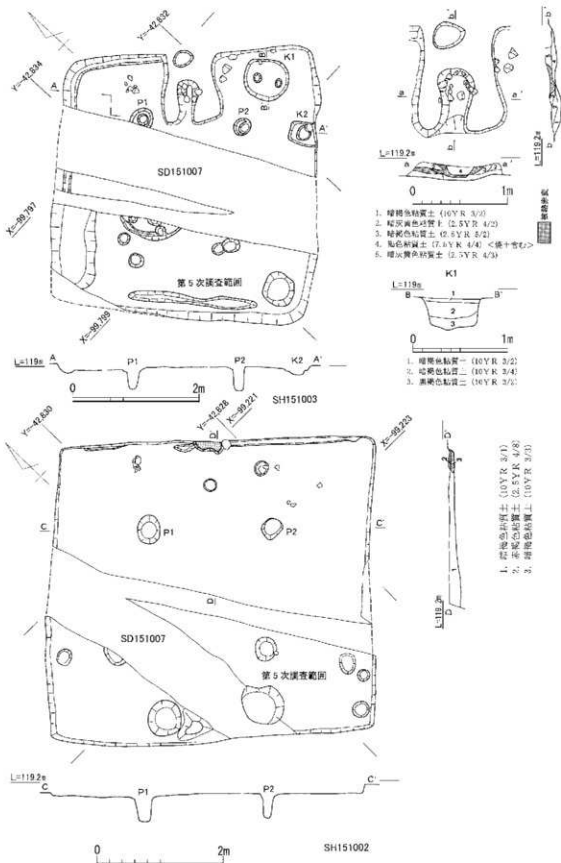
今回調査対象地のなかでは最も南側に位置する。主な検出遺構としては、竪穴式住居跡5基、掘立柱建物跡3棟、溝2条がある。調査面積は420㎡である。

竪穴式住居跡S H151002(第12・13図) 調査地南部で検出した方形竪穴式住居跡で、第5次調査の竪穴式住居跡S H805の北東側部分にあたり、未調査であった東側の2コーナーを確認した。住居跡東辺では、南北一辺の規模は長さ5mを測る。深さは最大で0.2m遺存する。主柱は、北東と南東の2基(P1・P2)を検出した。両柱穴の間隔は約2mを測る。住居跡東辺中央の壁面に沿って長さ0.5m、幅0.2mの被熱した粘土塊を検出した。遺存状態は悪いが造り付け竈の残存部と思われる。東側壁体に沿って浅い溝が遺存するが部分的である。住居内の東側床面付近で須恵器杯身、土師器甕片の散布が認められた。第5次調査でも陶器編年T K23～47型式に属する須恵器杯が出土しており、住居の所属時期は古墳時代中期末～同後期前葉に比定される。

竪穴式住居跡S H151003(第12・13図) 竪穴式住居跡S H151002の北側2.4m離れた位置で検出した方形竪穴式住居跡。第5次調査で未調査であった竪穴式住居跡S H807の北東部にあたる。今回、住居跡の北東と南東隅を確認し規模が判明した。住居跡東側辺の長さは約4mを測りやや小型の部類に属する。住居跡の中央から西側にかけて後述する奈良時代の溝S D15007によって



第12図 第9・10地区遺構配置図



第13図 竪穴式住居跡 S H 151002・151003実測図

削平を受けるが、床面には主柱2基(P1・P2)が遺存する。柱穴は径約0.3~0.4m、深さ約0.36mで、間隔は1.6mを測る。住居跡東壁のほぼ中央に幅約1m、長さ約1.2mの馬蹄形状の造り付け竈を付設する。竈上面は削平を受けており遺存状態は悪いが、焚き口部分は赤く焼け締まっており比較的原始をとどめる。竈の南東側で長辺0.8m、短辺0.7m、深さ約0.32mを測る貯蔵穴と思われる不整形土坑(K1)を検出した。土坑K1とは竈を挟んで反対側の東と北側辺の壁面に沿って幅0.1m程の浅い周壁溝をめぐらす。前回、北西側で検出された防湿用と思われる幅広の溝は、確認できなかった。竈の周囲から土師器残片が散乱した状態で出土しており、前回調査時の所見と合わせて住居の時期は古墳時代中期~同後期前葉に比定される。

竪穴式住居跡SH151004(第12・14図) 調査区の北側部分で検出した方形竪穴式住居跡で、重複して竪穴式住居跡SH151005が存在する。住居跡は南北方向の軸に対して30°程西に傾いており、他の2基の住居跡もほぼ同様な方位を示す。住居跡の規模は南北軸で約6.5mを測るが、西壁側については不明である。住居跡の上面は大きく削平を受けており、検出面から住居の床面までの高さは0.1m程度が残るのみである。溝SD151001が埋没した後に構築されており、住居床面には黄褐色粘質土の貼り床が一部に残る。住居跡の四周には幅約0.1mの浅い周壁溝をめぐらす。主柱穴は4基で、直径0.3m、深さ0.4mを測る。住居跡北側の壁面中央付近に、壁面に接して焼けた粘土塊が遺存しており、造り付け竈痕跡とみられる。南壁側には壁面に接して貯蔵穴と思われる径約0.6m、深さ0.1mの浅い円形土坑があり、床面中央付近には土師器片が散布していた。住居の時期は、出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

竪穴式住居跡SH151005(第12・14図) 竪穴式住居跡SH151004の北東部分と重複して検出した住居跡である。床面付近まで大きく削平されており住居跡と確定するには不安を残すが、「コ」字形に遺存する周壁溝と思われる細溝の状況から方形竪穴式住居跡とした。北東側の周壁溝の規模は長さ約3mを測る。北西側でも北東隅部分から約3m付近で途切れており、後述する竪穴式住居跡SH151006によって削平されたものと考えられるが当初から小型の住居であった可能性もある。南東側溝では0.5m内側に並行する溝があり、同一場所で拡張等による建て替えが行われたものとみられる。住居跡の床面付近まで削平されており出土遺物がないが、重複する住居跡との切り合い関係からみて、竪穴式住居跡SH151004・151006に先行するものと考えられる。

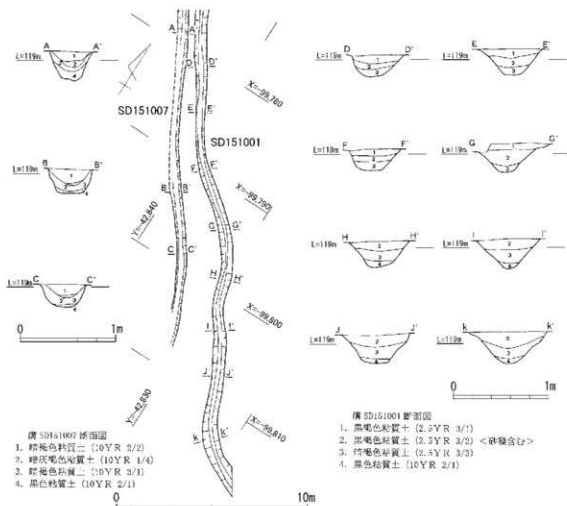
竪穴式住居跡SH151006(第12・14図) 調査区の北端に位置する住居跡で、竪穴式住居跡SH151004と同様、溝SD151001の埋没後に構築されている。住居跡の北西隅を含む北側と西側の壁面の一部を検出したのみで全体の規模については不明である。北壁側に造り付け竈を付設する。試みに竈を中心に周壁を北東側に折り返すと住居跡の全体規模は、一辺約7~8m程に復原できる。竈は長軸約1.2m、短軸約1.2mの規模をもつ。焚き口に当たる付近の床面からも炭や灰等の散布は認められなかった。竈は断ち割りの結果、燃焼部から須臾器高杯1個体(第17図12)が倒した状態で検出された。竈に掛ける土師の支柱として転用されたものと考えられる。主柱穴については明確でないが、溝SD151001の屑部で検出されたP5が主柱穴の一つに相当するものと思われる。P5の規模は径約0.5m、深さ約0.5mを測る。住居の時期は、竈内で出土した須臾器高

杯片から古墳時代後期(6世紀後半)に比定される。竪穴式住居跡S H151005との先後関係は、住居跡の南半分が削平されており明らかでないが、本住居跡が先行する可能性がある。

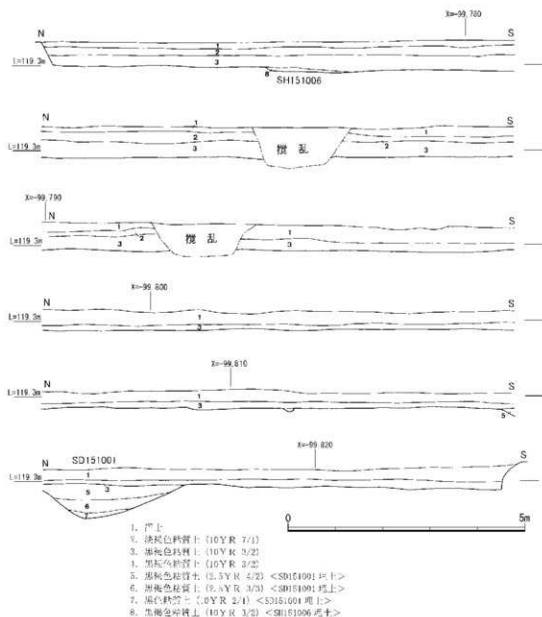
掘立柱建物跡S B151008(第12図) 調査区南端部分で検出した掘立柱建物跡で、第5次調査時検出の掘立柱建物跡S B801の北東部分にあたる。第5次調査では東西1間以上×南北3間の総柱建物跡に想定されているが、今回調査の結果、東西は2間であることがわかった。建物跡の各柱の間隔は南北列が2.4~2.5m、東西列は約2m等間を測り、建物規模は南北7.3m、東西4.2mに復元できる。柱穴は径約0.3~0.4mで、深さ約0.2m前後を測る。なお、妻部にあたる建物北側柱列の北側で柱穴1基を確認しており、建物規模がさらに北側に拡大する可能性がある。建物時期は平安時代後期~末頃に比定される。本建物の南側に位置するピットS P1からは瓦器碗2点が出土しているが性格については不明である。

欄S A151009(第12図) 掘立柱建物跡S B151008の東側で検出した欄で、5~6基の柱穴が1~1.5mの不等間隔で並ぶ。柱穴は径約0.3m、深さ0.4~0.5m前後を測る。出土遺物がなく時期は不明であるが、方位が掘立柱建物跡S B151008と等しく、同時期のものと考えられる。

溝S D151001(第12・15図) 調査地北西端から南東方向にやや蛇行しながらのびる溝である。



第15図 溝S D151001・151007土層断面図



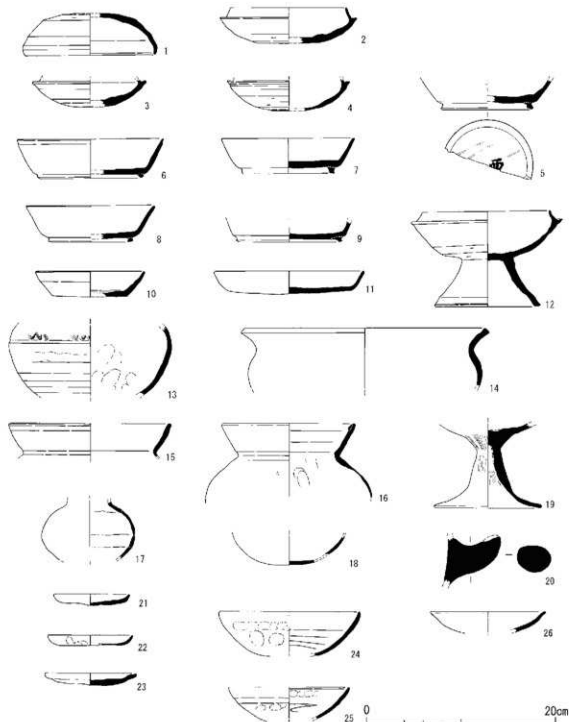
第16図 第10地区東部土層断面図

幅約1.1~1.6m、深さ0.6m前後を測る。溝断面は「V」字形ないし溝底幅の狭い逆台形状を呈する。溝の所属時期については、上層から土師器の小片が出土したのみで詳細は不明であるが、本溝の埋没後、竪穴式住居跡 SH151004~151006が構築されており、これらに先行するものである。

溝SD151007(第12・15図) 調査地の北西隅から調査地西壁の中程に沿ってのびる溝で、第5次調査時検出の溝SD803にあたる。幅約1m、深さ0.5mの断面台形状を呈する。今回、延長約40m分を検出した。溝北端部の上層から高台を有する須恵器杯身片1点(第17図8)が出土しており、奈良~平安時代に属するものと考えられる。この溝は埋没段階に掘り直されたことが埋土の状況からうかがえる。

2. 出土遺物(第17図)

第15次調査では、整理箱で計18箱の遺物が出土した。1～14は須恵器である。1は杯蓋で口径13.6cm、器高4.4cmを測る。第10地区堅穴式住居跡SH151006から出土した。2～4は杯身である。2は口縁部が受け部から直線的に内上方にのびる。復原口径12cm、器高3.85cmを測る。3・4は底部・口縁部とも欠損するもので、3は復原口径12.8cm、4は同12cmを測る。いずれも古墳時代後期に所属するものである。2・4は第10地区溝SD151007、3は第10地区堅穴式住居跡SH151002から出土した。5～9は高台をもつ須恵器杯Bである。底部から外上方に直線的に口縁



第17図 出土遺物実測図

部がのび、底部外縁のやや内側に高台を貼り付ける。口径は概ね13cmから15cm前後を測る。5は底部に「西」の字の墨書をもつ。下半部は欠損しており、これに続く文字があったかどうかは不明である。5～7・9は第6地区溝S D150601、8は第10地区溝S D151007から出土した。10・11は皿である。10は口径11.4cm、器高2.7cmを測る。11は口径15.4cm、器高2.45cmを測るやや大形のものである。10は前記の溝S D150601、11は第7地区から出土した。5～11の所属時期は、奈良時代後半～平安時代初頭(8世紀末～9世紀前半)に属するものである。12は須恵器高杯である。脚部は外反しながら底部にのびるが、下段ではやや内側に屈曲し稜をもつ。焼成はやや軟質である。第10地区竪穴式住居跡S H151006の竈内部から出土した。支脚として転用されたものとみられる。古墳時代後期に所属する。13は球形の体部をもつ壺である。胴部最大径の部分に波状文を巡らす。焼成は堅緻である。古墳時代後期前半に比定される。第10地区竪穴式住居跡S H151002から出土した。14は鉢あるいは甕と思われる体部上半部である。肩部の張った体部から短く立ち上がる口縁をもつ。焼成はやや軟質である。奈良～平安時代に所属するものと思われる。第6地区から出土した。15～20は土師器である。15は甕の口縁部である。16は甕の体部の上半から口縁部にかけての破片である。口縁端部はやや肥厚させる。肩部外面はハケ、体部内面はヘラケズリを施す。古墳時代中期後半に比定される。17は球形の体部をもつ小形の壺である。口縁部と底部を欠損するが、立ち上がりの短い口縁部を有するものと思われる。18は丸底の甕底部である。19は高杯脚部である。杯部は接合部を残して欠損する。脚部内面にしほり目、外面にはハケメを施す。20は牛角状を呈する甕の把手である。17～20はいずれも古墳時代中期から後期に属するものと思われる。15・18は第10地区の竪穴式住居跡S H151003竈周辺から出土した。16・17・19は第10地区竪穴式住居跡S H151004、20は同S H151002から出土した。21～23は中世の小皿である。21・22の口縁部は横ナデを施し、端部は丸く収める。色調は淡灰褐色ないし灰黄褐色を呈する。23は口縁端部を屈曲させる。21は第10地区溝S D151001上層、22は第10地区ピットS P 7、23は第6地区ピットP 3から出土した。11～12世紀に所属するものである。24・25は瓦器椀である。24の口縁部は体部から内湾気味に立ち上がる。体部外面は指オサエ、内面見込み部にはミガキを施す。25の口縁端部は丸く収め、内面に一条の沈線を施す。口縁部内面と体部下半には指オサエの痕がみられる。24・25とも第10地区ピットS P 1から出土した。12世紀に属するものと思われる。26は灰釉陶器皿の口縁部である。第5地区ピットS P 41から出土した。

3. まとめ

今回の第15次調査では、これまでに数次に亘って実施された調査と同様、各地区から遺構が検出され、室橋遺跡が広範囲に広がる事が再確認された。

第1・2地区で検出された大溝はこれまで推定されていた室橋遺跡の範囲を越えてさらに北側にのびることが判明した。

第5地区では、奈良時代後期後半～平安時代初頭と推定される掘立柱建物跡が3棟検出された。これらの建物は時期を違えて存在したものであるが、建て替えに際してはその規模や建物の軸を

揃えて建てられており、強い計画性をもつ。第6地区溝SD150601はこれらの建物群のある位置から南方向にのびる溝であり、今回室橋遺跡では唯一の墨書土器が1点出土した。以上のように断片的な資料であり推測の域を出ないが、これらの建物群については何らかの公的機関の施設であった可能性も考えておきたい。さらに今回の調査域の北東方向にあたる第6次調査では比較的小規模の大きい奈良～平安時代の掘立柱建物跡が検出されている。おそらく当地区から北東側の山裾にかけての部分に、同時期の集落の主要部が存在するものと思われる。

第10地区では、古墳時代中期から後期にかけての竪穴式住居跡が5基検出された。周辺では、これまでの調査で多数の竪穴式住居跡が検出されており、今回の調査結果からも、古墳時代の集落が広い範囲に及ぶことが確認できた。

室橋遺跡では、広範囲に亘ってほぼ南北にのびる大小規模の溝が多数検出されており、当遺跡を特徴づける遺構群となっている。これらの溝は基本的に灌漑用水として開削されたものと考えられるが、掘削時期および各溝の関係や経路については不明な点が多い。今後の調査資料の増加と分析に俟ちたい。

(辻本和美)

(Ⅱ)室橋遺跡第17次調査

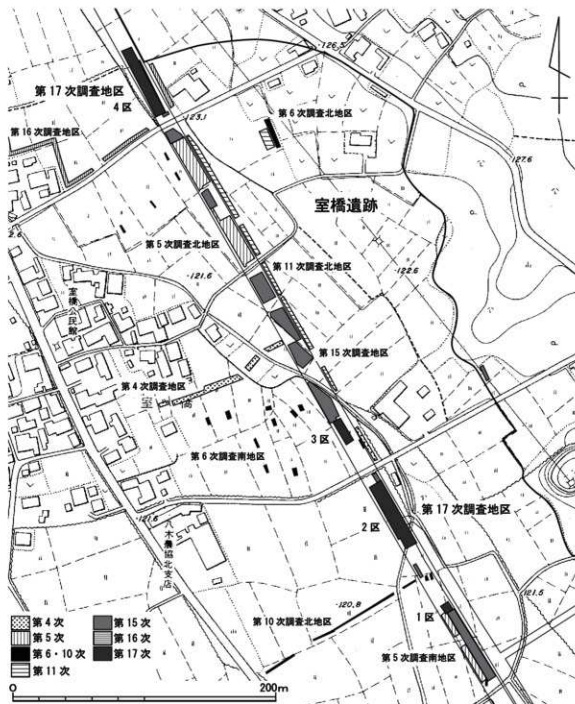
第17次調査の調査対象地は、道路建設予定地内における第15次調査の試掘結果を受け、京都府教育委員会・南丹市教育委員会との協議のもとに調査範囲を決定し、遺跡の北端部と中央部に計4か所の調査区を設定した。第1～3地区は、遺跡中央部から南部に配し、第4地区を遺跡北部に設定した。調査面積は、全体で1,200㎡を測る。

1. 調査の概要

(1) 第1地区(第19図)

今回の調査において最も南に位置する調査区であり、第15次調査における第10地区の調査成果を受け、北側に隣接して設定した。調査面積は、50㎡を測る。調査区周辺は平坦な地形が広がり、調査前には耕作地として利用されていた。調査前の標高は約1199m前後で、遺構検出面は115.5mである。遺跡周辺の土壌は、いわゆる丹波黒ボク層とされる黒褐色土およびその再堆積層が広がる地域である。調査区の層序は、上層から暗灰黄色粘質土(第20図下2層、耕作土)、オリーブ褐色粘質土(同3層)、黒褐色粘質土(同5層)、黒色粘質土(同19層)の順に堆積する。オリーブ褐色粘質土層は近世遺物包含層であり、第5層の黒褐色粘質土層は瓦器を含み、平安時代後期以降の遺物包含層とみられる。検出した主な遺構は、溝2条と柱穴群である。柱穴群は、調査区東寄りでも多く検出した。柱穴には土師器を出土するものがあり(P1)、おおそ平安時代を中心とした柱穴群とみられるが、調査範囲内で建物跡として復原するには至っていない。

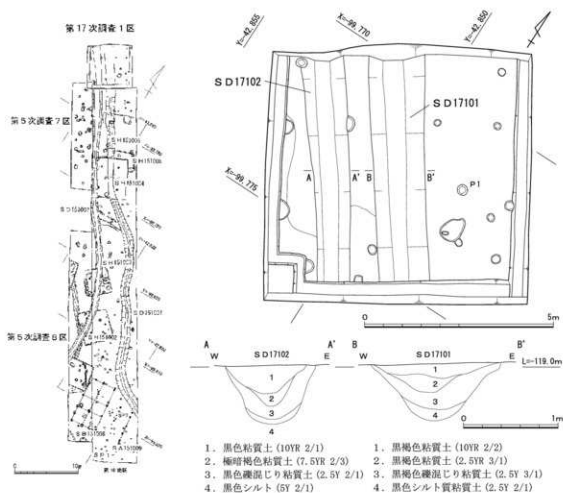
溝SD17101 調査区中央で検出した溝である。北西から南東方向に流れ、幅約1.4m、深さ



第18図 第17次調査地配置図

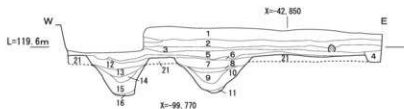
0.6~0.7mを測る。最下層はシルト質の土層をなし、下層にやや礫を含む。遺物は土師器片が出土したが、細片のため時期を明らかにできる資料ではない。南に隣接する第15次調査のSD 151001と連続する溝であり、おおそ古墳時代中期~後期にかけての溝と推定される。

溝SD17102 調査区西寄りに検出した溝である。幅0.9~1.1m、深さ0.6mを測る。溝内から土師器片や瓦器片が出土しているが、時期を明確にできる資料ではない。第15次調査の溝SD 151007、第5次調査の溝SD 803と同一の溝であり、過去の調査から平安時代中期~後期の溝と推定される。

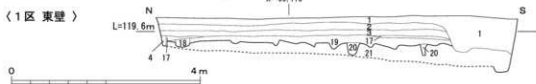


第19図 第1地区調査区配置図・遺構配置図、溝SD17101・17102断面図

〈1区 北壁〉

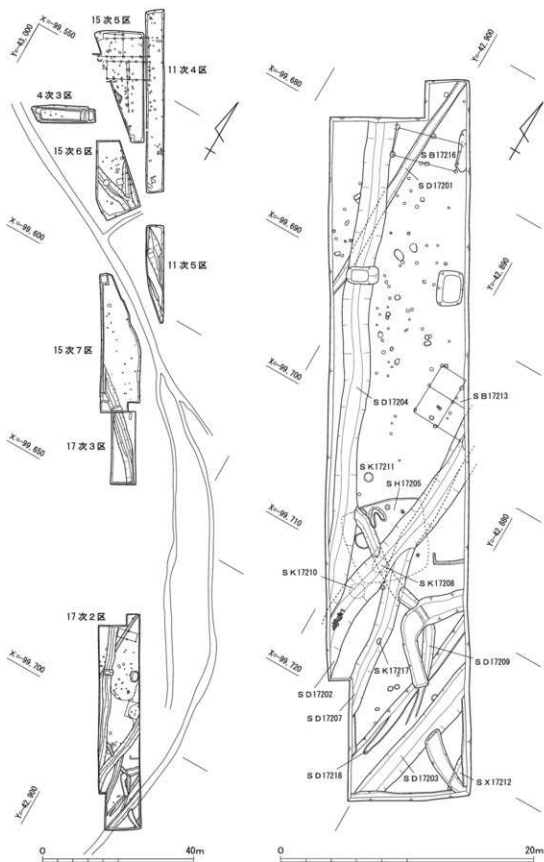


〈1区 東壁〉

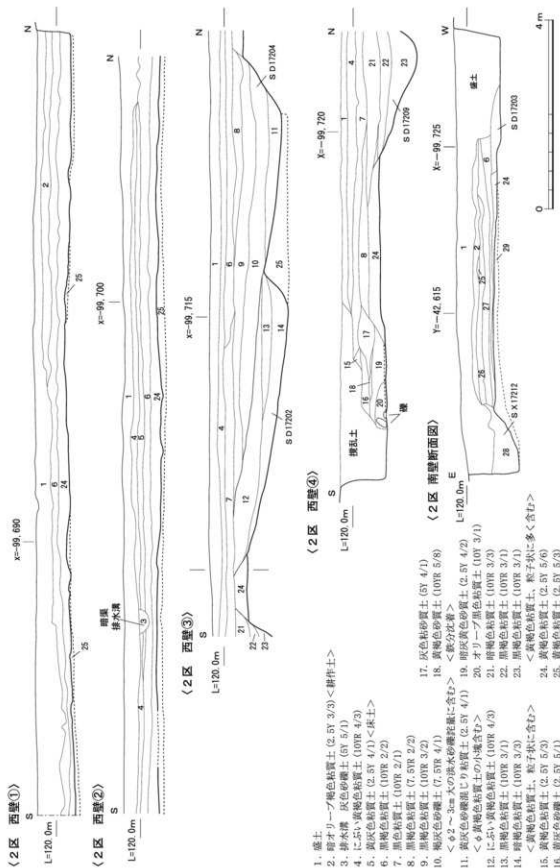


- | | | |
|--------------------------|---------------------------|--------------------------|
| 1. 盛土 | 8. 黒褐色粘質土 (10YR 2/2) | 15. 黒色礫混じり粘質土 (2.5Y 2/1) |
| 2. 耕土 暗灰黄色粘質土 (2.5Y 5/2) | 9. 黒褐色粘質土 (2.5YR 3/1) | 16. 黒色シルト質粘質土 (5Y 2/1) |
| 3. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/3) | 10. 黒褐色礫混じり粘質土 (2.5Y 3/1) | 17. 黒褐色粘質土 (2.5Y 3/1) |
| 4. 褐灰色粘質土 (10YR 4/1) | 11. 黒色シルト質粘質土 (2.5Y 2/1) | 18. 黒色粘質土 (10YR 2/1) |
| 5. 黒褐色粘質土 (2.5Y 3/1) | 12. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4) | 19. 黒褐色粘質土 (10YR 3/1) |
| 6. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y 4/2) | 13. 黒色粘質土 (10YR 2/1) | 20. 黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2) |
| 7. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 3/3) | 14. 極暗褐色粘質土 (7.5YR 2/3) | 21. 黄褐色粘質土 (2.5Y 5/4) |

第20図 第1地区土層断面図



第21図 第2地区調査地配置図・遺構配置図



第22図 第2地区土層断面図

(2)第2地区

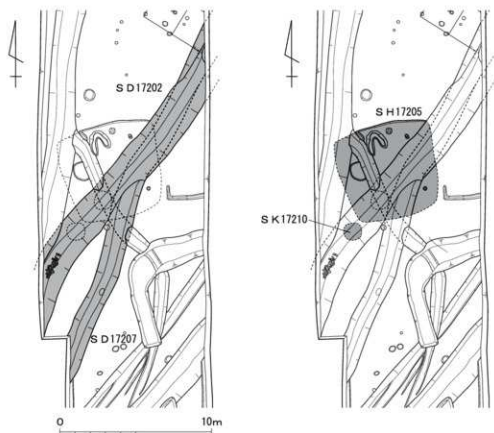
遺跡のはば中央に位置する調査区である。第15次調査の試掘地点(第8地区)を拡張し、調査地を設定した。調査面積は、580㎡を測る。主な検出遺構は、古墳時代中期の溝1条、中期～後期の溝1条、古墳時代後期の竪穴式住居跡1基と土坑1基、さらに平安時代から鎌倉時代前期にかけての溝群である。調査前の周辺の標高は約120.3mを測る。層序は、上層から耕作土(暗オリブ褐色粘質土、第22図2層)、黄灰色粘質土(同5層)、黒褐色粘質土(同6層)、黒色粘質土(同24層)の順に堆積し、黄褐色粘質土層が基盤層となっている。黒褐色粘質土層中には、瓦器等を含むことから平安時代後期以降の包含層とみられる。

①古墳時代の遺構

第2地区南部では、同一検出面に古墳時代中期～平安時代の溝が錯綜し、検出には困難を極めた。古墳時代の遺構は、おおよそ2時期あり、溝を中心とする中期～後期にかけての遺構群と、竪穴式住居や土坑からなる後期後半を主体とする時期がある(第23図)。

竪穴式住居跡 S H 17205 (第25図) 調査区中央南東寄りで検出した住居跡である。溝 S D 17204・溝 S D 17209により西半を大きく削平されている。規模は、約5.8×6.1mを測る。主柱穴は4本からなると推定されるが、西側床面は削平されているため、詳細は不明である。北辺中央に造り付け竈をもつ。竈は、西側袖部の一部を後世の溝によって削平されるが、残存状況は比較的良好で馬蹄形を呈する壁体が良く遺存していた。規模は、長さ1.2m、最大幅1.3mを測る。中央部で火床とみられる炭化物を含む暗赤褐色層の広がりを確認した。また主軸上の中央南寄り、竈支脚と推定される粘板岩の小石材を検出した。遺物は、竈中央部の落ち込みから土師器甕が出土し、前庭部東寄りで須恵器杯身が出土した。また竈の西側の床面で、土坑(K-1)を検出した。土坑内から須恵器杯身とみられる土器片が出土していることより、住居床面に伴う土坑と推定される。東半を溝によって削平されているが、復原径約1.2mと推定される。床面から出土した須恵器は、陶邑TK10～TK43型式に相当し、おおよそ6世紀中頃～後葉の住居跡と推定される。

溝 S D 17202 (第24図) 中央部で約20mにわたって検出した溝である。北から南へ向かって流れる溝とみられ、規模は、幅約2.5m、検出面からの深さ1.1mを測る。断面形は「V」字形を呈する。S D 17202の層位は、最下層から中層にはシルト質粘質土を主体とし、砂礫を多く含む層はみられないことから、主に集落を区画する溝としての機能を持っていたと推定される。最下層には、ベースと同様の黄褐色粘質土が粒子状に入り、掘削から比較的早い段階に埋没したとみられる。中層には断面形に合わせて落ち込むシルト質のふい黄褐色粘質土が堆積し、滲水する状況があったことが伺える。また上層には小礫を多く含む黒色礫混じり粘質土が堆積するが、なお緩やかな「V」字形の断面形を有していることから、溝の機能は維持していたとみられる。溝は層状の堆積によって自然に埋没し、その後新たにS D 17207が掘削されている。溝の南西部の下層で長さ約2mの範囲に甕・高杯などの土師器がまとめて出土した。土器はほぼ完形に近い個体に復原できる高杯などを含むが、全体に完形率は低く、一括廃棄されたとみられる。出土した土師器はおおよそ布留2式新相～3式古相に位置付けられ、古墳時代前期末～中期初葉を中

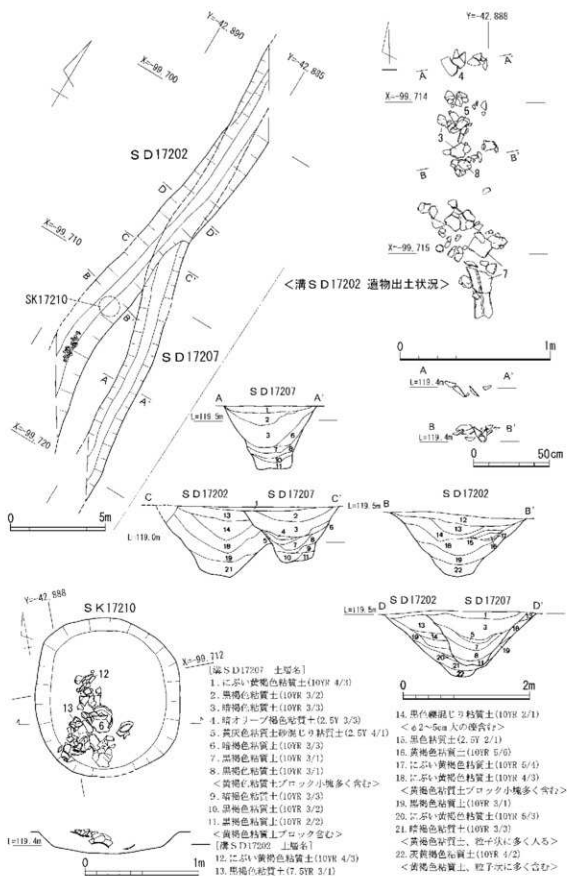


第23図 第2地区古墳時代遺構配置図

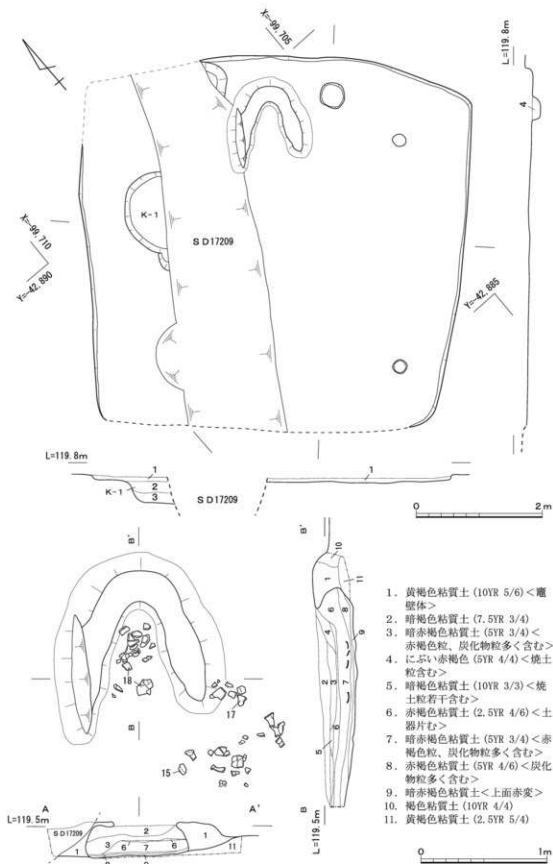
心とする資料である。

溝SD17207(第24図) 中央部から南西部にかけて検出した溝である。北東から南西方向へ流れ、北部ではSD17202と重複して検出した。規模は、1.3~1.5m、深さ0.85mを測る。断面形は逆台形を呈する。溝掘削面の立ち上がりは、下層の勾配が66°と大きい。溝SD17202と大きく重複する溝の北東部では、溝SD17202よりも徐々に北寄りに掘削され、調査範囲外へ延びる。南西部では大きく南東側に方向を変える。土層断面の観察から、SD17202が完全に埋没してから、新たに掘削された溝であることがわかる。埋土は、全体に砂礫が極めて少ないことから、基本的には流路として機能していたものではなく、SD17202と同様、空濠として区画溝などの性格を有していたと推定される。最下層は、基盤面の黄褐色粘質土のブロックを含み、下層には、黄褐色砂礫を多く含むことから、溝は比較的早い段階に埋まったと考えられるが、上層は良く締まった粘質土が層をなして堆積し、比較的長期間の間に自然に埋没したと推定される。出土遺物は極めて少なく、須恵器片が出土したが、時期を明確にできる資料ではない。溝は、後期後葉の竪穴式住居跡と重複し、住居が溝上面に構築されることから、それ以前に掘削されたことが明らかである。須恵器片が出土していることより、古墳時代中期後葉以降、後期前半を下限とする溝と推定される。

土坑SK17210(第24図) 調査区南西部で検出した土坑である。SD17202と重複して検出し、その廃絶後に掘削された土坑である。平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は長軸1.6m、短軸1.3



第24図 溝SD17202・17207、土坑SK17210実測図



第25図 竪穴式住居跡SH17205実測図

mを測る。土坑から須恵器杯身・杯蓋や土師器が出土した。出土土器は陶器窯TK10～TK43型式に相当することから、土坑の時期は6世紀後葉と推定される。

②奈良・平安時代以降の遺構

掘立柱建物跡SB17213(第26図) 調査区中央東寄りで一部を検出した総柱の建物跡である。東西2間(約4.8m)以上、南北2間(約4.6m)の規模をもつ。主軸はN4°Eとほぼ正方位をとり、柱間の距離は、2.1～2.3mを測る。東側の調査範囲外に桁行がさらに広がるとみられる。柱穴からの遺物は乏しく、時期を確定できる資料は得られていないが、正方位をとることや、柱穴の形状や埋土から、平安～鎌倉時代の建物跡と推定される。

掘立柱建物跡SB17216(第26図) 調査区北東隅で検出した建物跡である。東西2間(約5.5m)、南北1間(約2.3m)の建物跡である。主軸は、N17°Wをとり、柱間は2.2～2.8mを測る。柱穴から遺物は出土していないが、SD17204に一部削平されることから、時期は平安時代前期以前の構築と推定される。

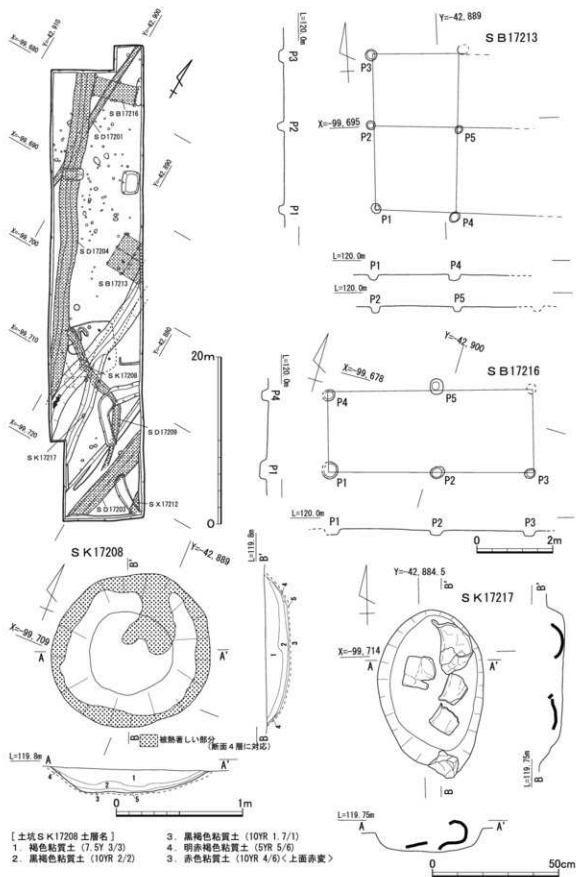
北部柱穴群(第26図) 調査区北半では、多くの柱穴を検出している。しかしながら建物として復原できるものは少ない。わずかながら遺物を出土する柱穴は、細片のため凶化していないが、土師器・瓦器片があり、多くは平安時代から鎌倉時代にかけてのものとみられる。

土坑SK17208(第26図) 調査区南部中央で検出した円形の土坑である。SD17202・SD17209、SH17205と重複して検出した。重複する遺構をいずれも削平し、最後に掘削された土坑である。規模は、直径約1.2m、検出面での深さ0.2mを測り、浅い播鉢状をなす。底部から側面にかけて、全体に被熱しているが、特に土坑内面上部が著しく被熱している。形状や被熱の状況から炉跡とみられ、炉床部分が残存したものとみられる。この土坑は耕作土の直下で検出し、土層は後世の削平を受け、上部構造は不明である。土坑内には炭化物を含む黒褐色粘質土が堆積していたが、遺物は出土していない。帰属時期は、平安時代後期～鎌倉時代前期と推定される溝SD17209の埋没後に構築されていることから、中世後期以降の炉跡と推定される。

土坑SK17217(第26図) SD17207の中央上層で検出した小規模な楕円形の土坑である。規模は、長軸0.7m×短軸0.4m、深さ約10cmを測る。土坑内から甕1点と石材1点が出土している。出土土器から、平安時代前期の土坑と推定される。

溝SD17204(第27図) 調査区西寄りで約40mにわたって検出した溝である。幅1.8～2.2m、深さは0.8～0.9mを測り、断面は逆台形状をなす。埋土は上層と下層に明瞭に分かれ、下層は砂礫層が堆積している。遺物は主に上層から出土し、奈良時代後期～平安時代中期の時期幅のある土器が出土した。遺物のほとんどは平安時代前期に帰属することから、奈良時代後期～末に流路として最初に掘削され、平安時代以降も再掘削され機能したものとみられる。出土土器の多くは溝南部で出土し、甕・鍋類が多く含まれることから、周辺に居住域があると考えられる。上層と下層に明瞭に分かれる埋土の状況は、後述する3地区SD17301と類似し、同一の溝である可能性が高い。

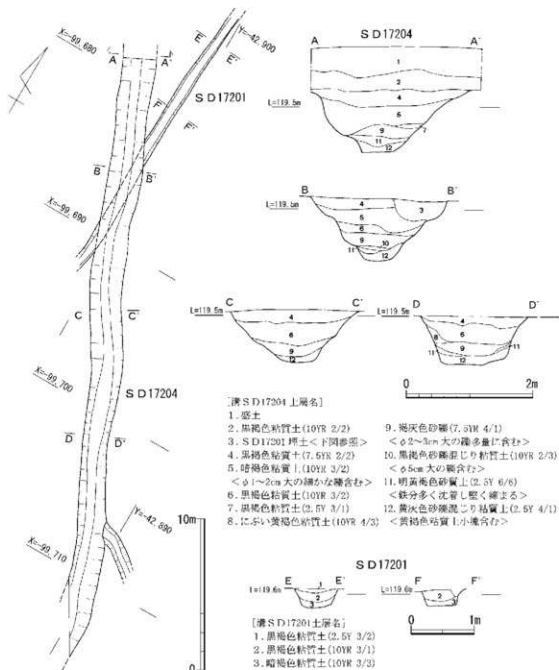
溝SD17201(第27図) 調査区北部で検出した南北方向に直線的に掘削された溝である。規



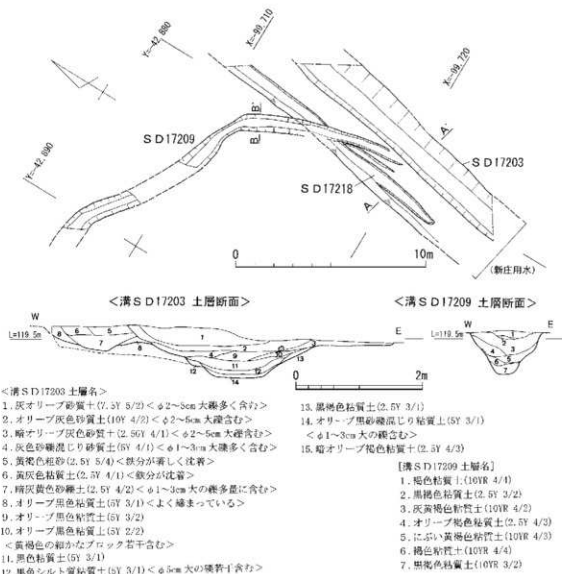
第26図 掘立柱建物跡 SB17213・17216、土坑 SK17208・17217実測図

模は、幅約0.7m、深さ0.3mを測り、断面は逆台形状をなす。約20mにわたって検出したもので、SD17204と一部交差する。断面観察からその埋没後に掘削された溝であることが明らかである。出土物から、時期は平安時代後期と推定される。

溝SD17203(第28図) 調査区南部で空橋地区の灌漑用水として活用されていた新庄用水の下層を調査し、新庄用水とはほぼ主軸を一にして検出した南北方向の溝である。規模は、幅約2.1~2.5m、深さ0.4mを測り、断面は上層に向かって大きく開く逆台形状を呈する。溝上層は、幅約3mの規模の近世遺物を含む砂礫層からなる溝に大きく削平されている。溝の立ち上がり勾配などから、本来の規模は3m以上の規模をもつ溝であったと推定される。埋土は最下層から順に



第27図 溝SD17201・17204実測図



第28図 溝SD17203・17209実測図

細かな砂礫を多く含むオリブ黒色粘質土、その上層に黒色シルト質粘質土が堆積していることより、流路として掘削され、滞水する状況もあったとみられる。出土遺物は12世紀中頃～後半頃の平安時代後期の遺物を主とするが、細片ながらやや古相を示す11世紀頃の須恵器片を含むことから、この時期にはほぼ同様な位置で再掘削され、最終的に平安時代後期に掘削された可能性が高い。

溝SD17209(第28図) 調査区南部で検出した北西から南東へ向けて掘削された溝である。規模は、幅約0.8~1.0mを測り、断面形は逆台形状をなす。溝の南東端で、SD17203と重複する溝である。出土遺物はSD17203と同様、11~12世紀頃の遺物と、13世紀前葉頃の遺物が出土していることから、平安時代中期~後期に掘削されたのち、鎌倉時代初期に再掘削が行われたと推定される。

落ち込みSX17212(第21図) 調査区南東隅で検出した落ち込みである。深さ約0.3~0.5mを

測る。調査区外の南東に向かって緩やかに傾斜し、溝の肩部を検出した可能性がある。

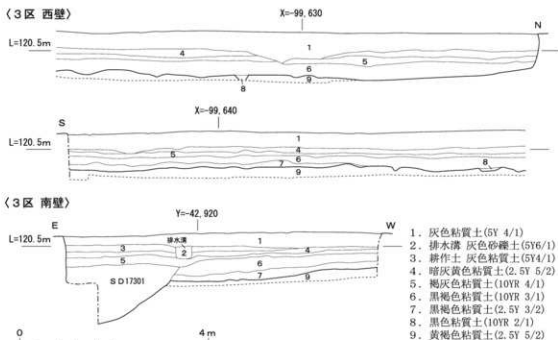
溝SD171218(第21図) 新庄用地下水層で、溝SD171203と平行して検出した小規模な溝である。幅0.3m、深さ5cmを測る。染付片が出土し、江戸時代後期以降の溝と推定される。

(2)第3地区

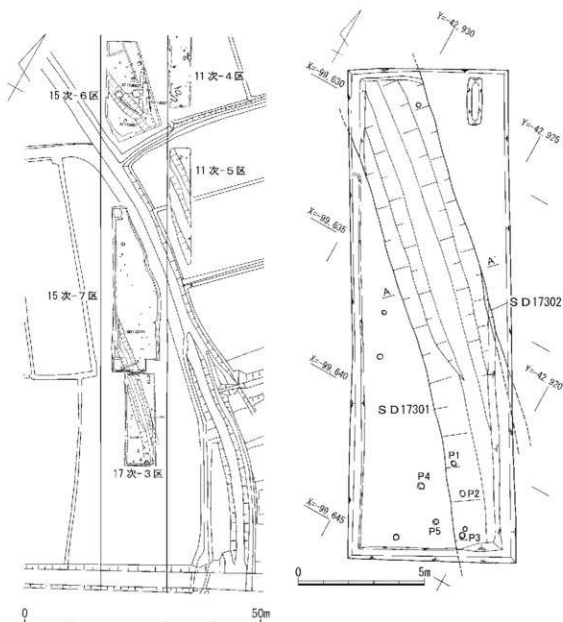
室橋遺跡のほぼ中央に位置し、第15次調査の第9地区南に設定した調査区である。調査面積は130㎡を測る。層序は、耕作土以下、上層から順に、暗灰黄色粘質土(第29図4層)、主に鎌倉時代～室町時代の遺物を包含する褐灰色粘質土(同5層)、平安時代の遺物包含層である黒褐色粘質土(同6層)、遺物をほとんど包含しない、いわゆる丹波黒ボク層の再堆積層とみられる黒褐色粘質土層(同7層)からなり、黄褐色粘質土層(同9層)を基盤層として確認できる。遺構面は、標高119.9m付近である。

調査区のほぼ中央部で溝を検出した。検出当初、1条の溝として認識していたものだが、調査の進行にしたがって、溝断面の断ち割りや出土遺物から2条の溝であることが判明した。また溝の周辺で柱穴群を検出したが、建物跡および柱列として復原できる柱穴群は確認されていない。柱穴には、土師器の細片を出土するものがあり、平安時代に帰属するものがある。

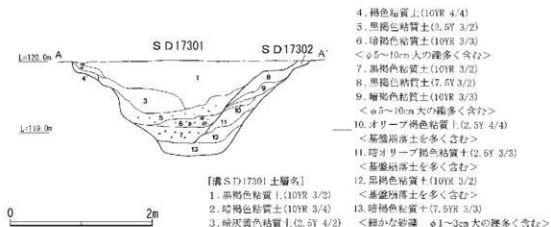
溝SD17301(第31図) 調査区中央で検出した溝で、北西から南東に向けて掘削されている。第10次調査の第9地区で検出されたSD15901の南東延長部にあたり、南に向けて徐々に西寄りに掘削される。規模は、幅約3.1m、深さ1.2mを測り、断面形は逆台形状をなす。層位は、砂礫を多量に含む下層と、砂礫の包含が極めて少ない上層に大きく分けられる。下層には、5～10cm大の中礫や、2～5cm大の小礫が層状に約0.5～0.7mの厚さで堆積し、流路として掘削されたと推定される。出土遺物は、わずかながら奈良時代後期～末に位置付けられる須恵器を含む



第29図 第3地区土層断面図



第30図 第3地区調査区配置図・遺構配置図



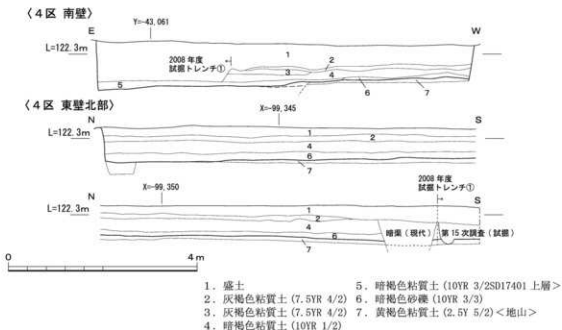
第31図 溝SD17301土層断面図

が、主に9世紀前葉の遺物を主体とし、さらに最終的な埋没に伴うとみられる若干の瓦器片が出土している。下層から出土した土器は極めて少ないが、9世紀前葉の土器を含むことから、奈良時代後期～平安時代前期にかけて機能した溝と推定される。また溝内の南西肩部で、4基の柱穴を検出し、南西平坦面でも柱穴を確認していることから、架橋に伴う支柱穴の可能性が高い。なお、溝の南東延長部は、第4次調査で試掘が行われ、顕著な遺構は検出されなかったとされるが、南西部に向かって谷状に落ちる地形がみられ、溝の落ち込みを検出した可能性が高い。第2地区西側で検出したS D17204とは、埋土の状況や規模・断面形、出土遺物などが同様であり、連続する溝と推定される。

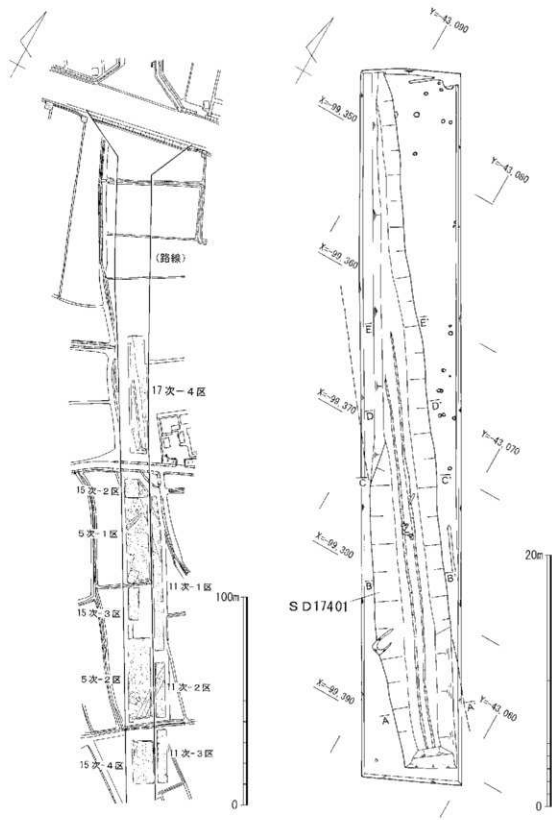
溝S D17302(第31図) S D17301下層で検出した溝である。最下層(第31図13層)には、1～3cm大の小礫が多量の土器片とともに堆積し、流路として機能した溝と推定される。この層位からは細片化した土器が多く出土したが、歴史時代以降の遺物は含まず、いずれも古墳時代中期に帰属するものである。S D17301が調査区南部で徐々に西寄りに方向をとるのに対し、S D17302は南東に向け、直線的に掘削される。南部の第2地区S D17202と規模や断面形、時期などを同じくすることから、弧を描くように緩やかに屈曲し、S D17202に繋がる可能性が高い。

(4)第4地区

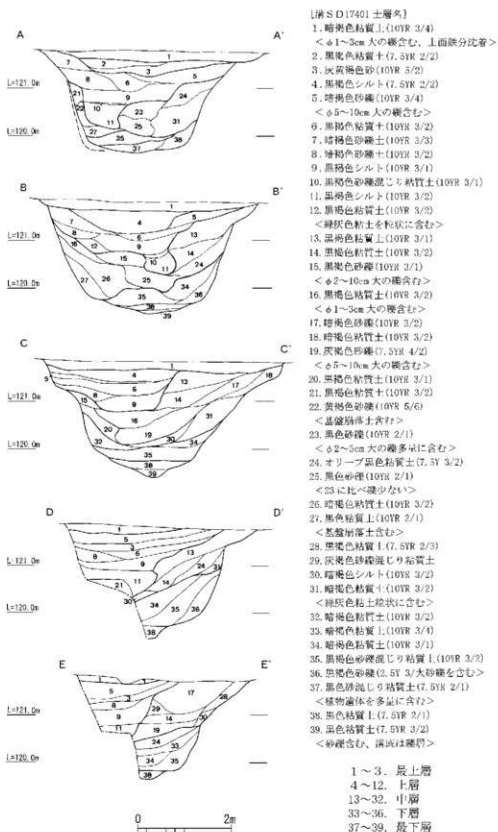
第4地区は、遺跡北端に位置し、第15次調査の試掘を受け、設定した調査区である。調査面積は440㎡を測る。検出遺構は、大規模な溝1条と柱穴群である。柱穴は、建物跡や柱列として復原できるものも確認されず、遺物は出土していないため時期は不明である。耕作土および床土下層で、瓦器片を出土する中世遺物包含層の暗褐色粘質土(第32図4層)が堆積し、その直下の標高119.8m付近で遺構面を検出した。



第32図 第4地区土層断面図



第33図 第4地区調査地配置図・遺構配置図



第34図 溝 S D 17401土層断面図

溝 S D 17401 (第33図) 調査区中央において、北西から南東にむけて掘削された大規模な溝である。調査区内で約50m以上にわたって検出し、南東地点を調査した第11次調査の S D 11101 に繋がるとみられる。規模は、幅約5.0m、深さ約2.4mを測る。断面形は、逆台形状を呈するが、底面が広く掘削され、約2.0～2.5mの幅をもち、60～70°と急激な勾配の立ち上がりをなす。底面中央部は、幅約0.6m、深さ約0.15～0.2mの規模で一段深く掘削されている。溝は深度が深く、掘削作業の安全確保のため、人力掘削に加えて一部、重機を使用しながら中層まで掘削し、下層を主に人力掘削によって掘り進めた。溝の層位は、奈良時代～平安時代前期の遺物を出土する層を最上層とし、以下、大きく4層(上層・中層・下層・最下層)に分けられる(第34図)。上層から中層は、砂礫層とシルト層の互層であり滞水と堆積層の流失を繰り返していたとみられる。下層には、砂礫層が堆積したのち、黒褐色シルト・オリープ黒色シルトが厚く堆積し、この層位には植物遺体が多く含まれていた。また最下層は、砂礫を多く含む黒褐色粘質土層であり、この層からも樹木や種子など多くの植物遺体が出土した。最下層は一部土壌サンプルの花粉分析を実施し、「遺跡周辺は水田分布が示唆される」とする分析結果を得た。^(G3) 出土遺物は、上層～中層、および下層上面からわずかに土器が出土している。上層遺物には、古墳時代前期の土師器の可能性のある細片が含まれ、中層から下層上面では弥生時代中期～後期とみられる土器細片が出土しているが、時期を詳細に確定できるだけの資料は得られていない。第11次調査では、この溝の南東延長地点を調査し、中層から下層上面でわずかながら弥生時代後期後半の土器片が出土したことから、溝の年代をおおよそ弥生時代後期後半～古墳時代初頭と推定した。一方、第11次調査と今回の調査において、ともに下層・最下層から出土した炭化物の加速器による放射性炭素年代測定を実施しているが、いずれも弥生時代中期の年代を得ている。^(G4)

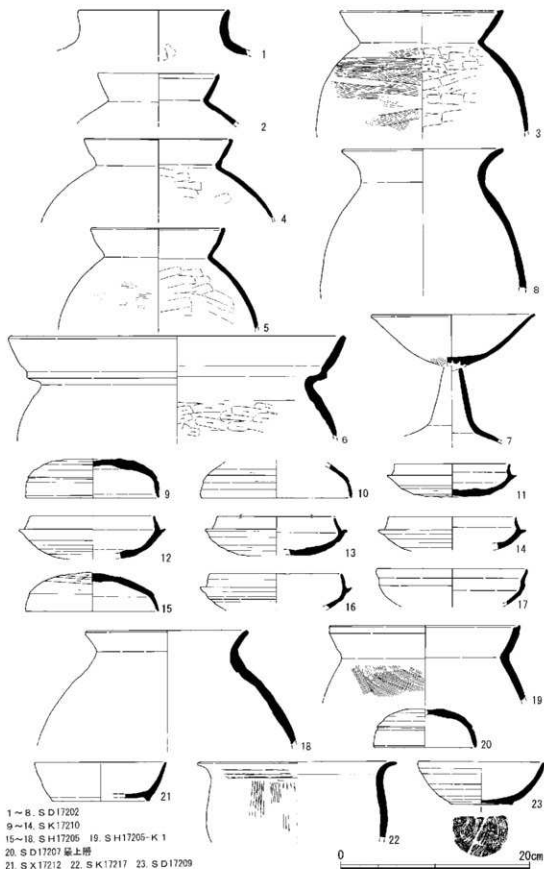
2. 出土遺物

第2～4地区から、整理箱計約25箱が出土した(第35～37図)。

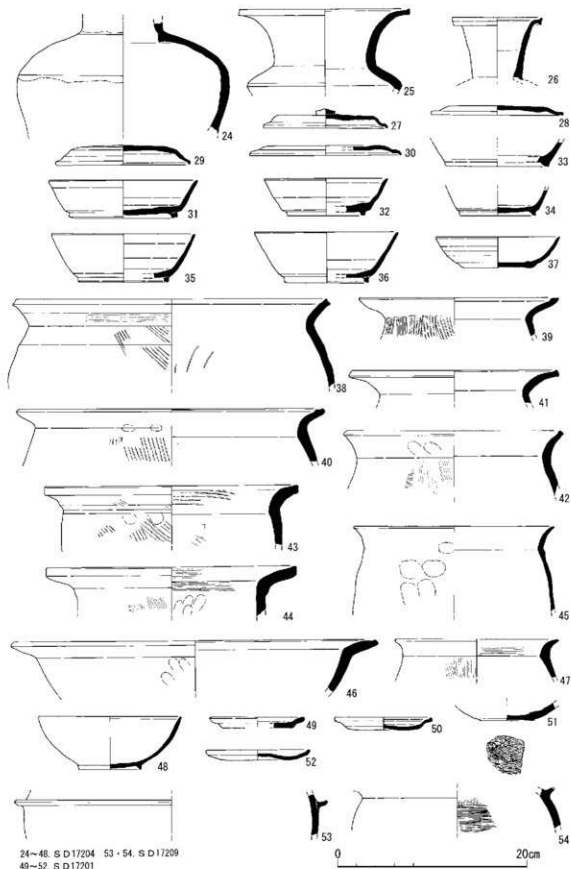
1～7は、第2地区溝 S D 17202から出土した土器である。1は、短頸壺口縁部で、口径166cmを測る。3～7は、溝南西部で一括して出土した。3～5は布留式甕である。口縁端部が肥厚するが、いずれも内傾角度が小さいことを特徴とする。6は、山陰系複合口縁甕である。7の高杯は、杯底部外面に刺穴をもつ山陰系の技法を残す。全体に布留2式新相に帰属する資料とみられる。

8～14は、土坑 S K 17210から出土した。9の杯蓋は口縁内面に段を残す。杯身は、底部外面に丁寧にヘラケズリを施し、受部立ち上がり深い古い様相を示すもの(12・13)と、浅い新しい様相を示すもの(11・14)がある。おおよそ陶器窯 T K 10型式～T K 43型式の特徴をもち、6世紀中葉～後葉の資料とみられる。

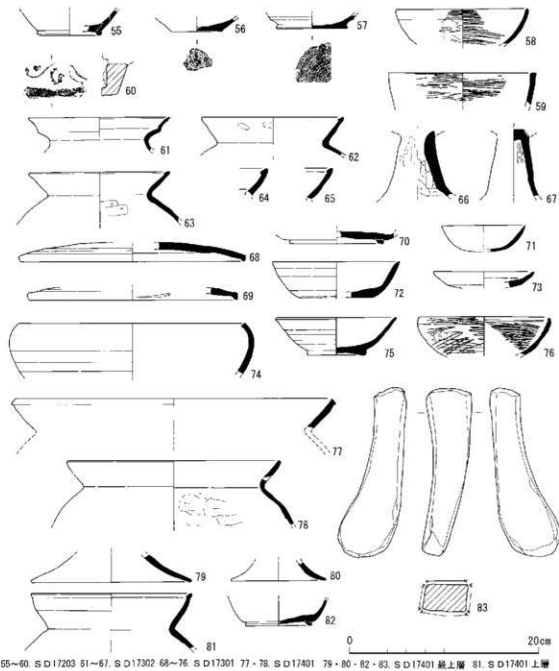
15～19は、竪穴式住居跡 S H 17205から出土した。15は、竈前庭部で出土した。天井部に丁寧にヘラケズリを施す。16は、内面の稜を消失しているが、深い受部をなす。陶器窯 T K 43型式に相当する6世紀後葉の資料である。16～18は、竈の西袖部で出土した。17は土師器杯で、口縁部



第35図 出土遺物実測図(1)



第36図 出土遺物実測図(2)



55~60. S D17203 61~67. S D17302 68~76. S D17301 77・78. S D17401 79・80・82・83. S D17401 最上層 81. S D17401 上層

第37図 出土遺物実測図(3)

が緩やかに屈曲して立ち上がる。18は、竈内から出土した単口縁の甕である。

20は、2地区南部包含層から出土した須恵器杯蓋である。

21は、落ち込み S X17212から出土した。9世紀前葉の平安時代前期の資料とみられる。

22は、土坑 S K17217から出土した。口縁部が緩やかに外反する土師器甕で、おおよそ平安時代前期に帰属する。

23は、溝 S D17209から出土した底部糸切り痕のある杯で、12世紀頃の資料とみられる。

24~48は、溝 S D17204から出土した。24は、肩部が張り、薄い灰釉がみられる。東海産の灰軸陶器壺である。25は、口縁部が大きく外反し、肩部に稜をもつ須恵器壺である。口径17.8cmを

測る。26は、9世紀前葉の須恵器小形壺である。27-30は、須恵器杯蓋で、宝珠つまみをもつもの(27)と、もたないもの(28・29)がある。31-36の須恵器杯は、いずれも高台をもつ杯Bである。器高が低く、高台を見込み側に内寄りに付すもの(31・32)と、器高が高く、高台を底部立ち上がり外寄りに付すもの(33-36)がある。前者はおおよそ8世紀後葉-末、後者は9世紀前葉の所産とみられる。37は、須恵器杯で、おおよそ9世紀前葉に帰属する資料である。38-45・47は、土師器甕である。「く」字口縁をもつもの(38)と、口縁部が大きく屈曲し、口縁端部内面が肥厚するもの(39・40)、同じく緩やかに外反するもの(41・45・47)、さらに口縁部が外方に大きく屈曲して開くもの(43・44)があり、バリエーションがみられる。いずれも8世紀後葉-9世紀前葉の資料である。46は、復原口径38.3cmを測る鍋で、時期はおおよそ8世紀後葉とみられる。48の瓦器椀は、口径14.9cm、器高5.6cmを測る。摩耗が著しく暗文等は確認できなが、12世紀後半に帰属するものであろう。溝内から出土した平安時代後期の土器は、図化できない細片がわずかに出土しているにすぎず、ほとんどは奈良時代後期-平安時代前期に帰するものである。

49-52は、溝S D17201から出土した。49・50は、「て」字口縁およびその系譜を引く土師器の皿である。51は、底部糸切り痕を有する須恵器杯である。おおよそ12世紀前半の資料である。

53・54は、溝S D17209から出土した瓦器の羽釜で、13世紀前葉とみられる。

55-59は、溝S D17203から出土した。55は、高台付きの須恵器杯、56・57は糸切り底をなす須恵器杯である。58の瓦器椀は、内面に密に暗文がみられる。59は、内外面に細かな暗文を密に施す瓦器で、器種は鉢と推定される。60は、唐草文様をもつ近世の軒平瓦である。

61-76は、3地区から出土した。61-67は、溝S D17302から出土した。61は頸部が短く外反する山陰系の特徴をもつ二重口縁壺である。62-65は布留式甕で、66・67は高杯の脚部である。高杯は脚部径が大きく、66は弥生時代後期後半の遺物が周辺から混入したものであろう。おおよそ布留2式新相から布留3式古相を示す資料と考えられる。

68-76は、溝S D17301から出土した。70の須恵器杯は、高台をもつ杯Bで、奈良時代後半の資料とみられる。68・69はおおよそ9世紀前葉に帰属する須恵器蓋である。74は須恵器鉢で、口縁が大きく内湾する。75は、緑釉陶器の椀で、9世紀前葉のものである。口径12.6cm、器高4.0cmを測る。76は、溝内から1点のみ出土した瓦器椀である。内面に細かな圈線ヘラミガキを施し、12世紀前半の所産とみられる。

77-83は、4地区から出土した。いずれも溝S D17401から出土したものである。77は、「く」字口縁甕の細片を図化したもので、復原口径は約33cmを測る。大形の甕とみられることから、弥生時代中期-後期に帰属する資料であろう。78の「く」字口縁甕は、溝下層上面から出土したものである。内外面の摩耗が著しいが、内面ケズリにより器壁は薄く、口縁は単口縁をなす。内面ケズリ調整の「く」字口縁甕は、周辺地域では野条遺跡第7次調査の竪穴式住居出土資料にもあり、時期はおおよそ弥生時代後期後半とみておきたい。しかしながら、この土器が出土した土壌の加速器放射性炭素年代測定では、後述するように弥生時代中期の年代値が出ている。79・80は、高杯脚部である。79は椀形高杯の脚部、あるいは器台の裾部とみられる。81の布留式甕は、

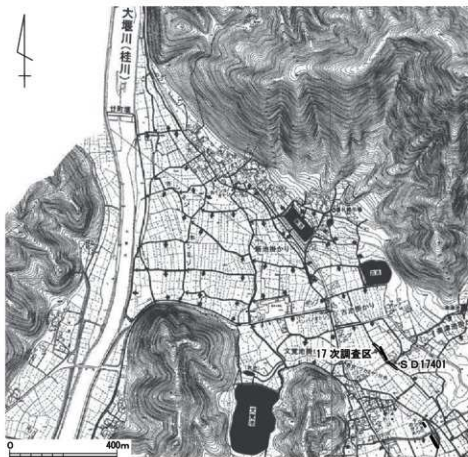
検出面から約0.5m掘り下げた埋土上層で出土したものである。おおよそ布留3式に相当する土器である。82は、最上層から出土した高台付きの須恵器杯Bで、83は、各平坦面に砥面をもつ砥石である。いずれも奈良時代後期の所産とみられる。

(高野陽子)

3. まとめ

今回の調査成果とともに、調査対象となった各時代の遺構が集中する室橋遺跡北部から中央部の遺構変遷について主に述べ、まとめとしたい。

弥生時代 第15・17次調査における弥生時代の主な遺構は、遺跡北端の4地区で検出した溝SD17401をあげることができる。幅約5m、深さ2.4mに達する極めて大規模な溝で、北西から南東へほぼ直線的に掘削されている。掘削時期は、第11次調査と17次調査で出土した若干の土器から、おおよそ弥生時代後期後半と推定しているが、加速器放射性炭素年代測定では弥生時代中期に相当する測定年代を得ている。溝の性格に関しては、集落を画する溝としては規模が大きく、また埋土は砂礫層と粘質土層の互層からなり流水と滞留を繰り返していたとみられることから、基本的には灌漑用水として掘削された溝と推定される。後述するが、この地域は大堰川(桂川上流)が盆地西縁の丘陵背後に流れをとる地点にあり、古来、耕作のための水の確保に苦慮してきた地



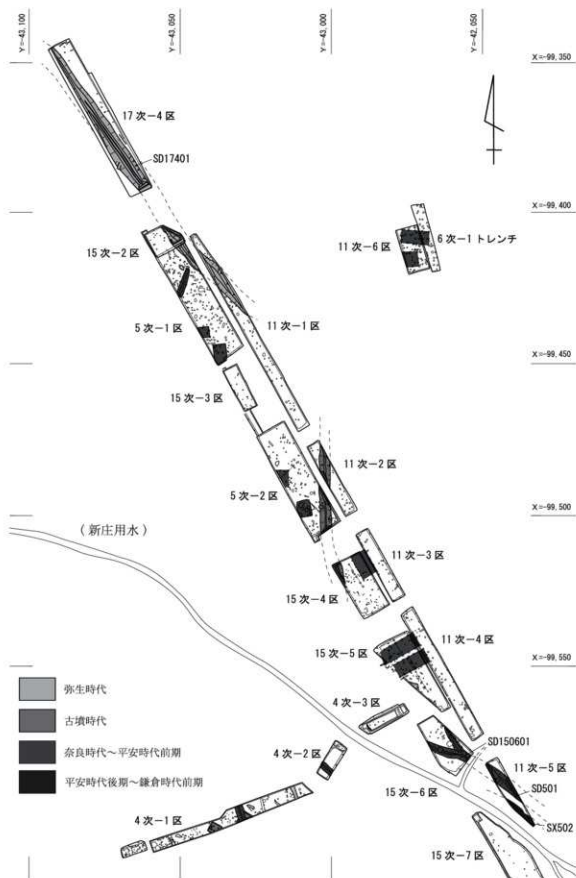
第38図 大堰川水取水堰・新庄用水配水路図(注5文献に加筆)

域である。溝SD17401は調査区外に向けて、北西に直線的に掘削されているが、その延長上には、現在でも室橋から池上の農業用水が取水されている大堰川(桂川上流)とその取水堰がある(注5)。この大規模な溝は、その延長上にある大堰川へ向けて、掘削されている可能性がある。また溝の構造で注目

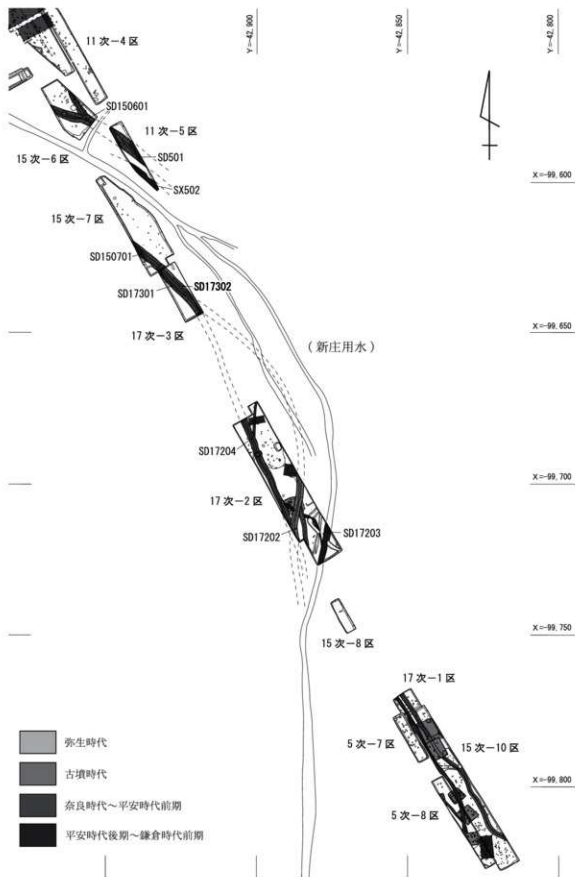
されるのは、底面が幅2m超と下層まで幅広く掘削されている点である。小舟の運行を可能にさせるだけの規模をもち、灌漑のための導水路としての機能にとどまらない可能性がある。溝からの出土遺物は極めて少なく、これまでの調査では、歴史時代の遺物は最上層から出土するに限られ、上層で布留式甕の小片が出土し、中層～下層上面では、弥生時代後期後半と推定されるわずかな遺物の出土が確認された。さらに下層および最下層からの土器の出土は皆無である。前述したように、これらの層位の土壌および炭化物の放射性炭素年代は2か年にわたって実施した4点のサンプルがいずれも弥生時代中期中葉頃の測定値を示すが、出土土器からみると、その可能性があるものが本報告の弥生時代中期の口縁部細片をみるにとどまり、溝の掘削年代の把握を困難にしている。弥生時代の集落は、後期の集落に関しては、後期後半の住居跡が東に位置する大谷口遺跡の調査などから、諸木山掘部に点在し、また野条遺跡南部でもいくつかの住居跡が検出されているが、母体となりうる大規模な集落は確認されていない。一方、弥生時代中期の集落は、室橋遺跡でも遺跡中央部で円形住居や溝が検出されているが規模は小さく、南方約1kmに展開する池上遺跡がこの地域の拠点的な集落となっている。放射性炭素年代の測定値を溝の掘削年代にそのまま当てはめたとすれば、弥生時代中期中葉にはじまる池上遺跡の集落形成にかかわる溝の可能性も出てくる。いずれにせよ、弥生時代の溝としては、近畿地方でも稀にみる大規模な人工水路であり、今後、周辺部の調査の進展によってさらに溝の性格や時期が解明されることを願いたい。

古墳時代 室橋遺跡は、古墳時代前期末～中期前葉に、導入期の竈や初期須恵器をもつ新興の勢力によって新たに開発されたと考えられる。古墳時代の遺構は、大きく前期末～中期の遺構群と、後期の遺構群に分かれており、前者は遺跡北部を中心に展開し、やや離れて遺跡南部にも居住域が広がることが判明している(第11次調査)。また後期の集落は、遺跡南部を中心とし、第5・7次調査や第15次調査で多くの竅穴式住居群が検出されている。今回報告した第17次調査の溝SD17402は、幅約3mの断面「V」字形の溝であるが、約200m北で検出した第5次調査の溝SD230と規模や断面形が酷似し、同一の溝である可能性が高い。出土土器から溝SD17402は、前期末に掘削されていることが明らかで、古墳時代中期に大きく展開する集落の初期の段階に掘削された溝と推定される。中期前半の住居跡は、第4次調査や第13次調査立会で遺跡中央から西部にかけて検出されていることから、溝SD17402や第5次調査の溝SD230は集落の東側縁辺部に掘削された区画溝と考えられる。

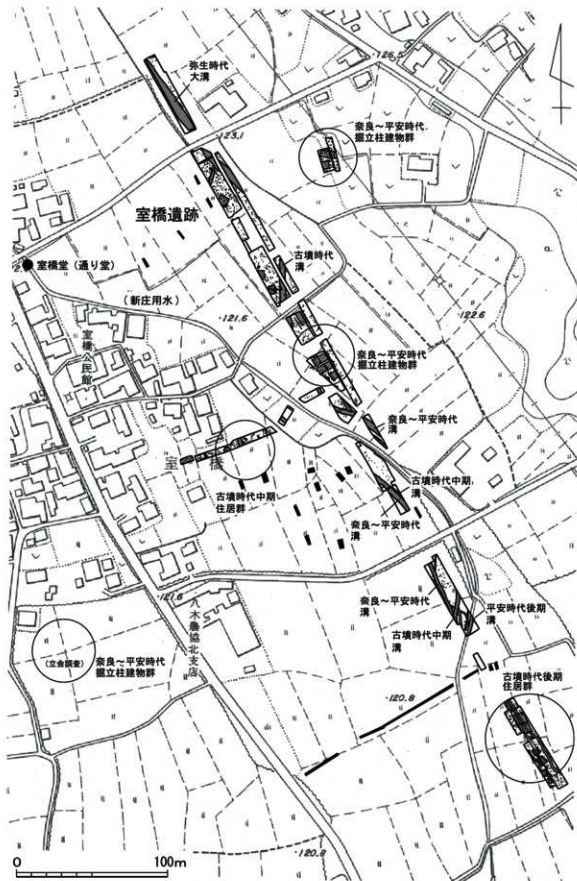
歴史時代 今回の調査では、遺跡中央部を対象とした第15次調査で、方形堀形をもつ方形掘立柱建物跡3棟を検出した。方形堀形をもつ掘立柱建物跡は、これまでに遺跡北東部を対象とした調査と(第6・11次調査)、西部を対象とした調査(第13次調査)でも確認されているが、建物の規模はさらに大きなものである。今回検出した地点から、第6・11次調査地点へさらに同時期の建物跡が広がる可能性がある。周辺の溝からは墨書土器が出土し、柱穴の出土土器から、奈良時代後期～平安時代初頭と推定される。これらの建物跡は主軸を合わせた規格性の高い建物群で、公的な施設である可能性が高い。



第39図 調査地北部遺構変遷図



第40図 調査地南部遺構変遷図



第41図 室橋遺跡調査区配置図

これまでの調査で検出された奈良時代以降の遺構の多くは大小の溝である。規模の大きな溝は、砂礫層の堆積が顕著で、灌漑用水とみられるものが多く、農業用水の確保に苦慮し、灌漑用水路の掘削が繰り返し行われたことが伺える。用水整備の時期は大きく3時期あり、大形掘立柱建物跡が建設される8世紀後半～9世紀前葉、平安時代後期の11世紀後葉～12世紀前葉、さらに平安時代末の12世紀後葉である。灌漑用水路網の開削は、すなわち耕地整備を意味する。各時期における用水路の開削と耕地整備の背景について述べ、まとめとしたい。

歴史時代における最初の灌漑用水の掘削時期は、大形掘立柱建物跡が検出される8世紀後葉～9世紀前葉である。第11次調査の溝 S D 11501と第15次調査の溝 S D 150601、第15次調査の溝 S D 150701と第17次調査の溝 S D 17301は連続する溝で、いずれもこの時期である。また、やや離れるが第17次調査の溝 S D 17204も、断面形や埋土から溝 S D 17301から続く溝とみられる。この時期の大規模な開発は、国衛との関係を無視できないが、諸説ある丹波国府の所在地については、近年、発掘調査の成果から、当初から南丹市八木町屋賀から亀岡市池尻周辺に位置した可能性が高まっている⁽⁸⁶⁾、その場合、室橋地区を含む刑部郡は、国衛の北部隣接地域となり、耕地管理が特に厳しく行われた地域とみることができる。8世紀後半～9世紀前半の溝は、遺跡南西部を対象とした第14次調査でも新庄用水の東側で確認され⁽⁸⁷⁾、広範囲に灌漑用水の開削が行われていることが明らかであり、国衛の主導による耕地開発が行われたと推定される。

9世紀以降、律令国家的な土地所有が変質してゆくなかで、室橋遺跡においても、9世紀後半～11世紀前葉まで、新たに開削される大規模な溝は確認できず、一元的な耕地管理が崩れ、灌漑用水網も荒廃したと考えられる。この地域で次に再び灌漑用水網が大規模に新たに開削されるのは、過去の調査成果から11世紀後半頃と推定され、その対象は、室橋地区から野条、池上地区を含む広範囲に及ぶものと考えられる。室橋遺跡第11次調査の溝 S D 11707、野条遺跡第10・12次調査の溝 S D 201、池上遺跡との境界域に近い野条遺跡第9次調査の溝 S D 101などは、いずれも溝の規模、断面形、堆積状況などが一致し、最下層が砂礫層であることから、同時期に掘削された流路と推定される。最も北の室橋遺跡第11次調査の溝 S D 11705の検出地点から、南の野条遺跡第9次調査で検出した溝 S D 101まで、距離にして約1km離れ、大規模な灌漑用水の整備が行われたと推定される。これらの溝は、第11次調査の溝 S D 11705の出土遺物から、12世紀前半頃にその機能を終えたとみられる。11世紀後半以降の社会体制は「荘園公領制」と呼ばれ、11世紀中頃は、荘園政策の大きな転換点とされる時期である⁽⁸⁸⁾。そのきっかけは、長久元(1040)年の荘園整理令とされ、国衛はそれに基づき、荘園および公領の境界を確定し、田地面積やその管理者を確認して賦課単位を明らかにする検注作業を実施し、「郡郷制」とされる国衛領の再編成が行われた⁽⁸⁹⁾。室橋遺跡および野条遺跡にみる11世紀後半の大規模な灌漑用水の整備は、こうした国衛領の再編成と荘園政策の大きな転換に連動し、公領であったとみられる刑部郡内では、受領・在庁官人による新たな耕地整備が行われたのではないだろうか。

灌漑用水路が新たに開削される次の段階は、12世紀後半である。今回の調査では、発掘調査が実施されるまで農業用水として用いられていた新庄用水の下層で、灌漑用水とみられる平安時代

の溝 S D17203を検出した。埋土に12世紀中頃～後葉の土器片を含むことから、平安時代末期に掘削された溝と推定される。また、第11次調査でも新庄用水西側隣接地の調査で、用水側に向けて落ち込む溝の肩部とみられる S X502を検出し、12世紀後半の灌漑用水が、近年まで使用されていた新庄用水とおおよそ近いラインで掘削されていることが明らかになった。12世紀後半は、室橋地区を含む刑部郷の所有が目まぐるしく変わる時期である。以下、吉富庄の変遷について付記しておきたい。

吉富庄は、1087年に知行国主藤原頼親により立荘された現在の京北町を中心とした宇津庄と呼ばれる荘園を母体に、12世紀後半に成立したものとされる。この宇津庄は、11世紀に源義家に寄進されたと伝えられ、12世紀前半には源義朝の私領となるが、12世紀中頃に平治の乱で平家に没収されたのち、宇都庄として、平家と縁戚関係にあった藤原成親が伝領する。知行国主藤原成親は、新たにこれに神吉・八代・熊田・志麻、それまで公領であったとみられる刑部郷の五郷を加え吉富庄とし、12世紀後半、承安4(1174)年に後白河法皇御願の法華堂に寄進した⁽⁹¹⁾。新たに加えられた五郷は吉富新庄と呼ばれるが、これはほぼ現八木町の全域を含み、刑部郷に属する室橋地区もこれに含まれる。吉富庄は寿永3(1184)年には、荘園を元々所有していた源氏に帰し、源頼朝の所領となる。頼朝が神護寺の僧文覚と親交があったことから、吉富庄は高尾神護寺に寄進されたが、さらに文覚は後白河院領であった刑部郷を含む吉富新庄の寄進をも願ひ出て、同年、吉富庄一円が神護寺領として認められたという。

文覚は、12世紀後半に各地の開発伝承にみえる神護寺の僧で、室橋地区には、「文覚池」や、文覚の見水場とされる「室橋堂(通り堂)」など、僧文覚に由来した地名や伝承を今に伝え、この地の灌漑用水を造り、耕地開発にも大きく関わったとされる。今回、検出した平安時代末期の新庄用水下層の溝 S D17301や11次調査の S X502から、平安時代末期の灌漑用水と推定される溝が現在の新庄用水の流路と大きく重なっていることが明らかになり、こうした伝承を改めて想起させるものとなった。新庄用水は、船枝・室橋・諸畑・野条・池上の田地用水であり、「新庄堰水」がそのはじまりであるという。「新庄堰水」の開削については、室橋地区の如城寺蔵「室橋縁由」には「治承元(1177)年五月新庄堰水之工成り」と記される一方、船井郡誌では文治4(1188)年の開削とされ、約10年の開きがある。この間、刑部郷の所有は前述したように短い期間で変遷しており、前者であれば、神護寺に寄進される以前に「新庄堰水」は掘削されていたことになる。溝 S D17203からの出土遺物はわずかであり、その時期はおおよそ12世紀中頃～後葉の幅で捉えられるものである。溝 S D17203の開削時期は神護寺領となる時期よりもやや早く、後白河法皇領として寄進される前後であった可能性が高い。いずれにせよ、12世紀後葉の新たな灌漑用水の開削時期は、野条遺跡第10・12次調査で検出した条里型地割に沿う規格制の高い掘立柱建物群が構築される時期とおおよそ一致し、条里施行とも関連した大規模な耕地整備に伴う灌漑用水の開削が行われたと推定される。一方、溝 S D17203の周辺に流れ込む小溝である S D17209からは、13世紀前葉の土器片が出土していることから、この段階まで溝 S D17203は存続している可能性が高く、用水の管理が引き続き行われていたと考えられる。文覚伝承は、未だその開削時期が不明

な「文覚池」などと合わせ検証する必要があるが、平安時代後期～末期の大規模な灌漑用水網の建設や段階的に行われた改修を象徴する伝承としてこの地に長く伝えられたものであろう。

平成17年度以降、継続的には場整備と府道建設に伴う発掘調査を行い、弥生時代～近世に至る各時代の遺構を検出した。特に灌漑のための溝を中心とした遺構は、室橋遺跡だけでなく、野条遺跡にも広がり、古代～中世の耕地開発に関わる多くの資料を得ることができた。発掘調査によって得られたこうした成果が、今後、この地域の歴史を考える貴重な資料として大いに活用されることを願って止まない。

(高野陽子)

注1 調査参加者は以下のとおりである(敬称略、順不同)

(作業員) 西垣久江・梅井ゆき子・広瀬伊佐夫・杉山雅之・松本敏子・松本孝子・松本安治・川勝千代・笠波恒正・若井邦明・明田弘之・麻田忠晴・宅間文治・柳田晋・福本正吉・八木辰男・麻田節子・松井和美・松本拓・三勢順子・平井美登里・木村末子・西山高史・国府京子・西田恵美子・矢木正代・竹井美津子・中川智子・木村あき子・中川実・中川照子・服部良彦・山本雅彦・小林義明

(補助員) 中川慎也・廣瀬慶典・松元和也・野中洋志・井川怜・丹上新太

(整理員) 丸谷はま子・中島恵美子・松下道子・荒川仁佳子・茶園矢壽子・清水友佳子・村岡弥生・福島厚子・田村佳恵・大村潤子・梶啓宏

注2 福島孝行「府営農業整備事業関係遺跡 平成18年度発掘調査報告」(「京都府埋蔵文化財調査報告書」(平成18年度)-2 京都府教育委員会) 2007

注3 最下層および下層から出土した炭化物については、加速器による放射性炭素年代測定を実施した。測定は、(株)加速器分析研究所に委託した。資料サンプルの14C年代は、下層上面が 2310 ± 30 yrBP、黒褐色粘質土上層が 2240 ± 30 yrBP、最下層が 2240 ± 30 yrBPである。おおよそ弥生時代中期中葉頃の年代測定値となっている。

注4 花粉分析は、(株)古環境研究所に委託し、遺跡周辺の植生について、以下の報告を受けた。

花粉群集は樹木が多く、照葉樹のコナラ属アカガシ亜属と落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が優占し、他に照葉樹ではシイ属、落葉広葉樹ではトチノキ、カバノキ属が伴われ、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の針葉樹も比較的出现率が高い。周辺は森林の多い環境であり、低地にコナラ属アカガシ亜属を主にシイ属の照葉樹林が分布し、周辺山地の中高所にコナラ属コナラ亜属を主にカバノキ属の落葉広葉樹林が分布し、谷沿いにトチノキが分布していた。

遺跡周辺は、草本花粉でイネ属型を含むイネ科、ヨモギ属が、水田雑草の性格をもつオモダカ属、ミスアオイ属の水生植物を伴って出現し、水田の分布が示唆される。イネ科は水田雑草としてだけではなく、ヨモギ属とともに溝の周囲や畦などのやや乾燥したところに耕地雑草および人里植物として分布していたと推定される。

注5 八木町教育委員会編「神護寺領丹波国吉富荘故地調査報告書」(「八木町史編さん事業歴史資料調査報告書」第2集) 2009

注6 丹波国府推定地については諸説あるが、「丹波国吉富荘絵図」にみる「国八庁」と記された国庁の記載から、南丹市八木町屋賀から亀岡市馬路町池尻付近に求める屋賀説が有力だが、歴史地理学的検討から、木下良氏は千代川町坪田に国府があったと推定し、平安時代末期に移転したとする。上島

亨氏は、僧皇慶と池上寺の関係から国府の仏事を担う僧として迎えられたのではないかとし、11世紀前半には少なくとも丹波国府は屋賀周辺にあったとし、国府移転説そのものが文献的な根拠が乏しいとして否定的である。近年の発掘成果では、池尻遺跡で奈良時代後期の大形掘立柱建物群が検出される一方、千代川遺跡では国府に付随するような大規模な建物跡は確認されておらず、考古学的知見からも国府が当初から屋賀にあった可能性が高まっている。

木下良「丹波国府址—亀岡市千代川に想定する—」(『古代文化』第16巻 第2号) 1966

上島 亨「池上院と神護寺・丹波国府—新資料の紹介と皇慶の活動をめぐって—」(『郷土史八木』第10号) 2000

注7 福島孝行「府営農業整備事業関係遺跡 平成19年度発掘調査報告」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』(平成19年度) 京都府教育委員会) 2008

注8 網野善彦「荘園公領制の形成過程」(『日本中世土地制度史の研究』 塙書房) 1991

下向井龍彦「激動の院政」(『武士の成長と院政』 講談社) 2001

注9 川端 新「院政初期の立荘形態」(『日本史研究』407号) 1996

注10 院政期の荘園の立荘では、特に王家領などは寄進された私領を核にし、周辺の国衙領などの公領を取り込んで荘園形成がなされたのではないかとされる(坂本賞三「免除領田制」『日本王朝国家体制論』 東京大学出版会 1972)。室橋遺跡東方約2kmに「永所」という地名が残るが、この一帯は平安時代末期の丹波国府推定地の南丹市八木町屋賀に近く、「永所寄人住所」と吉富庄絵図にも見え、国衙領と考えられている。上島亨氏は近辺の寺院として創建された池上寺とともに、国衙領であった刑部郷一帯が、立荘に際して後白河院領として取り込まれたとする(上島前掲注6文献)。

注11 現存する荘園絵図として知られる京北町宇津の真籬家所蔵の「丹波国吉富庄絵図写」は、このとき作成されたものとされる。

仲村 研「丹波国吉富庄の古絵図について」(『史朋』2号) 1963

飯沼賢司「丹波国吉富庄と絵図」(『民衆史研究』30号) 1986

参考文献

田代 弘「野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

高野陽子「野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第5次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第128冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

辻本和美・高野陽子・中居和志「府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第130冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

辻健二郎「第19年度の調査」(『南丹市内遺跡発掘調査報告書』第7集 南丹市教育委員会) 2008

『京都府の地名』平凡社 1981

圖 版



(1) 調査地遠景(東南東から)



(2) 調査地遠景(西北西から)



(1) 1トレンチW 全景(東から)



(2) 1トレンチE 全景(南東から)

(1) 1トレンチW 北壁土層西半
(南東から)



(2) 1トレンチE 北壁土層西半
(南東から)



(3) 1トレンチE 北壁土層東半
(南西から)





(1) 2トレンチ全景(東南東から)



(2) 2トレンチ北壁土層(南南西から)



(1) 3トレンチE 全景(西北西から)



(2) 3トレンチE 全景(東南東から)



(1) 3トレンチE 東半現代土坑(西から)



(2) 3トレンチE 溝SD04・05(東南東から)



(1) 3トレンチE 溝S D04・05全景(南から)



(2) 3トレンチE 溝S D05北壁土層(南東から)



(1) 3トレンチW 全景(東南東から)



(2) 3トレンチW 全景(西北西から)

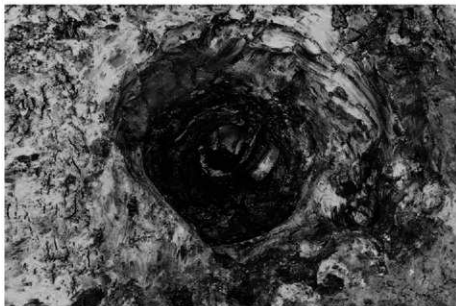
(1) 3トレンチE 東半現代土坑
(東南東から)



(2) 3トレンチW ビットP26
(北西から)



(3) 3トレンチW ビットP28
(南西から)





(1) 4トレンチE 全景(西北西から)



(2) 4トレンチE 全景(東南東から)



(1) 4トレンチW 全景(南東から)



(2) 4トレンチW 北壁土層(南西から)



(1) 5トレンチE 全景(西北西から)



(2) 5トレンチE 全景(東南東から)



(1) 5トレンチW 全景(東南東から)



(2) 5トレンチW 全景(西から)



(1) 5トレンチE 溝S D01(南西から)



(2) 5トレンチW 溝S D31(東南東から)

(1) 5トレンチW 溝S D31
(北西から)



(2) 5トレンチE 土坑S K09
(北東から)



(3) 5トレンチE 土坑S X08
(北西から)





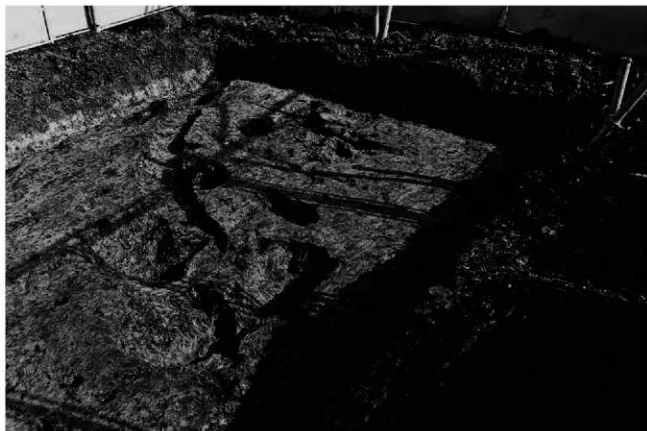
(1) 6トレンチ全景(西北西から)



(2) 6トレンチ全景(東南東から)



(1) 6トレンチ西半(西から)



(2) 6トレンチ溝S D01(南西から)



(1) 7トレンチE 全景(西から)



(2) 7トレンチW 全景(東から)



(1) 7トレンチW 溝S D02遺物出土状況(南東から)



(2) 7トレンチW 溝S D02完掘状況(南東から)



(1) 7トレンチW 溝SD02
遺物出土状況(南南東から)



(2) 7トレンチW 溝SD02
遺物出土状況(西から)



(3) 7トレンチW 溝SD02
遺物出土状況(北東から)



(1) 7トレンチW 溝S D02北壁土層(南東から)



(2) 7トレンチW 土坑S X03完掘状況(南西から)



(1) 8トレンチ全景(西から)



(2) 8トレンチ全景(北西から)



14



17



15



37



33



35



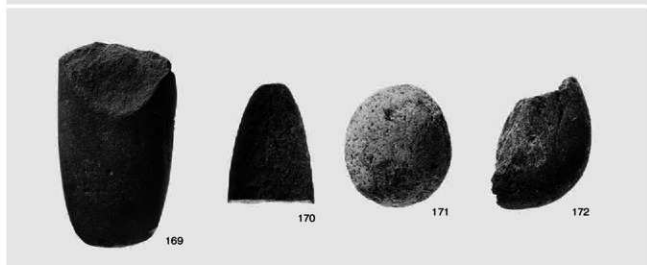
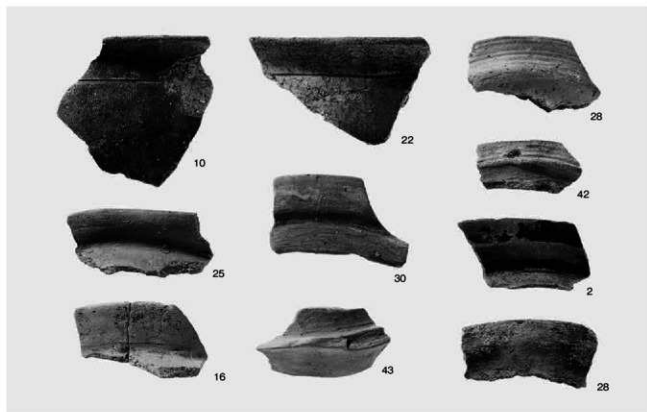
36



32



31





46



51



47



67



70



71



84



81



112



111



83



103



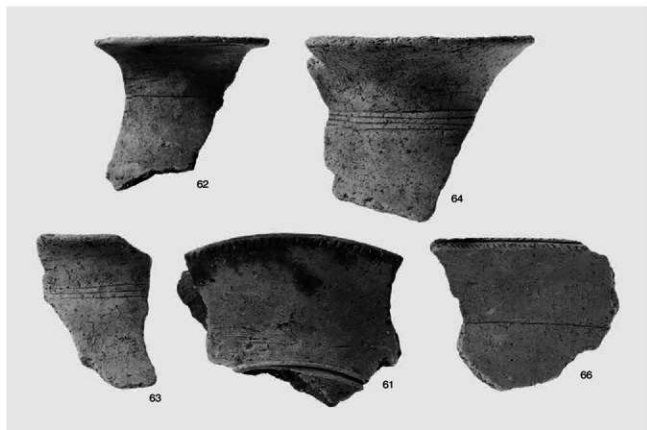
104



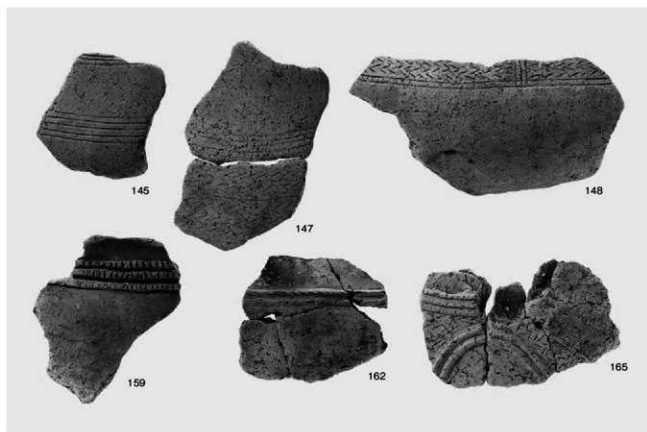
110



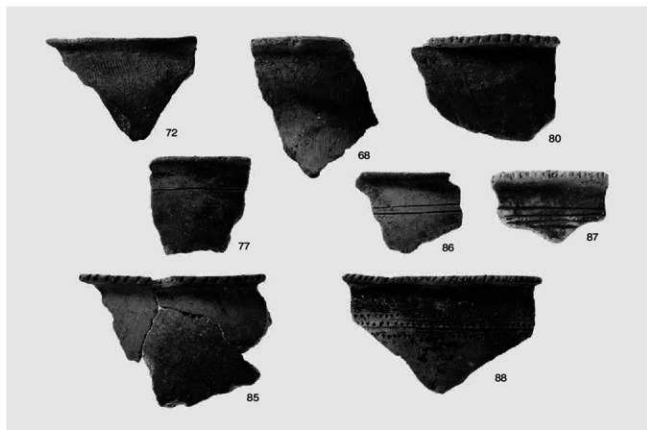
105



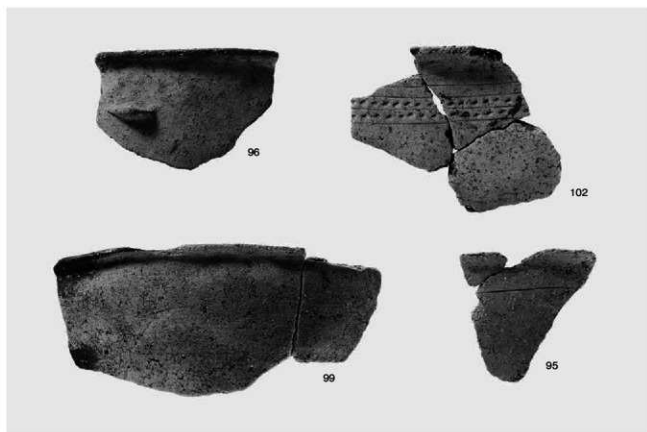
(1) 出土遺物 5



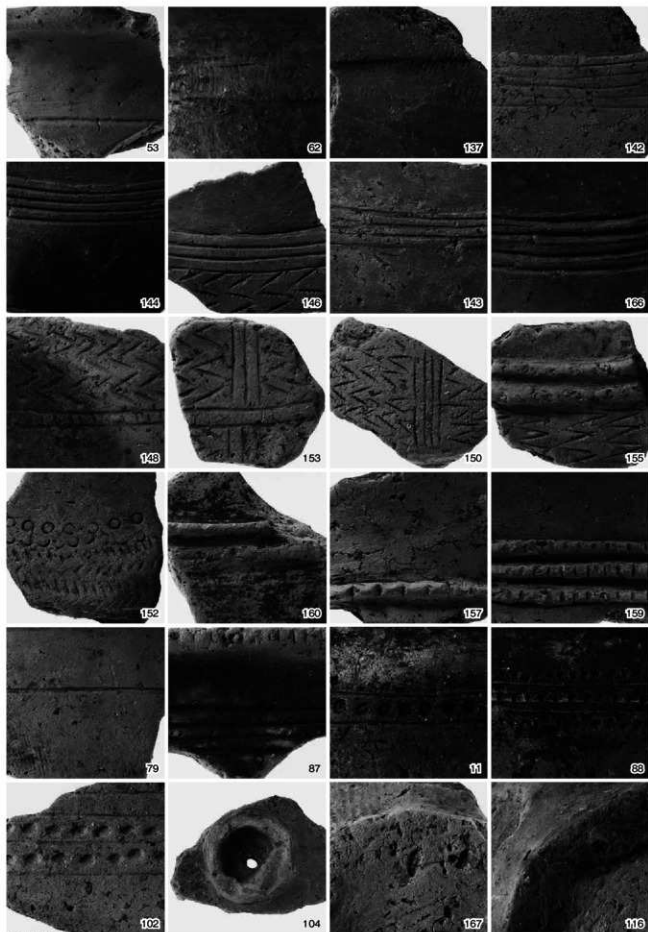
(2) 出土遺物 6

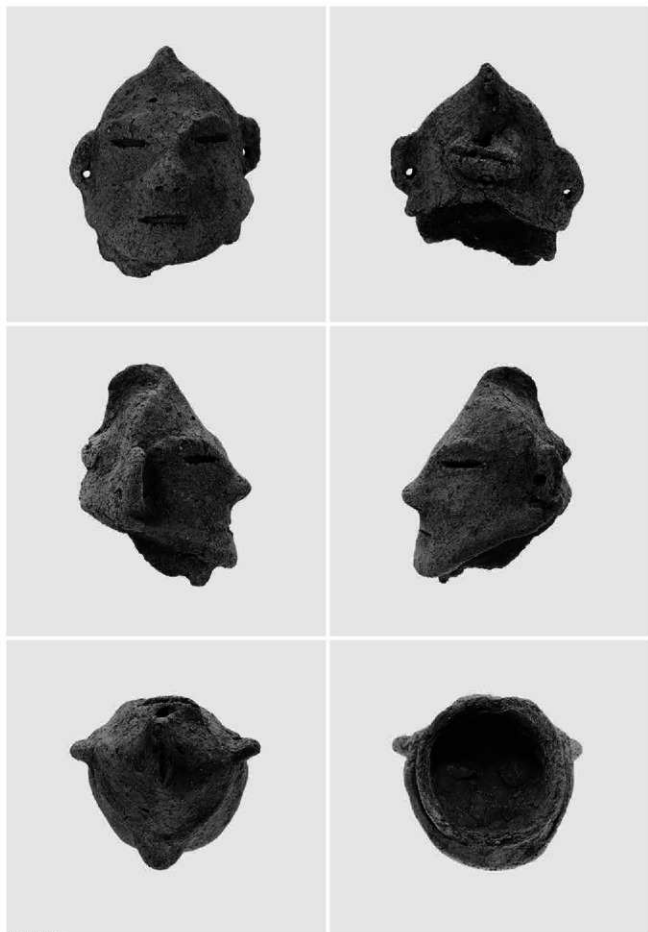


(1) 出土遺物 7



(2) 出土遺物 8





出土遺物10



(1) 第15次調査地遠景(上が南)



(2) 第15次調査地遠景(上が北)



(1) 第15次第1・2地区(南から)



(2) 第15次第4～7地区(南から)

(1) 第15次第1地区(南から)



(2) 第15次第2地区(南から)



(3) 第15次第2地区溝 S D150201
断面(南から)





(1) 第15次第4地区(上が東)



(2) 第15次第4地区全景(北から)



(1) 第15次第3地区全景(南から)



(2) 第15次第4地区横 S A150402
(南から)



(3) 第15次第4地区横 S A150402
柱穴 P 1 内柱根(南から)



(1) 第15次第4～6地区遠景(上が東)



(2) 第15次第5・6地区(上が東)



(1) 第15次第5地区掘立柱建物跡群、横列(上が東)



(2) 第15次第5地区掘立柱建物跡 S B 150501・150502・150504 (上が東)



(1) 第15次第6地区(上が東)



(2) 第15次第6地区全景(南から)



(1) 第15次北部調査地遠景(上が南)



(2) 第15次第7地区(上が西)



(1) 第15次第5地区掘立柱建物跡
S B150501・1505012
(北から)



(2) 第15次第6地区溝 S D150601・
150602(南から)



(3) 第15次第7地区溝 S D150701
(北から)



(1) 第15次第10地区調査地遠景(西から)



(2) 第15次第10地区全景(北から)



(1) 第15次第10地区調査地中央部(上が東)



(2) 第15次第10地区調査地北半部(上が西)

(1) 第15次第10地区竪穴式住居跡群
(北から)



(2) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151003(北から)



(3) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151003(西から)





(1) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151002(北から)



(2) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151002(南から)



(3) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151004 ~ 151006 (北から)

(1) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151004・151005 (北から)



(2) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151004・151005 (南から)



(3) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151006竈内高杯出土状況
(西から)





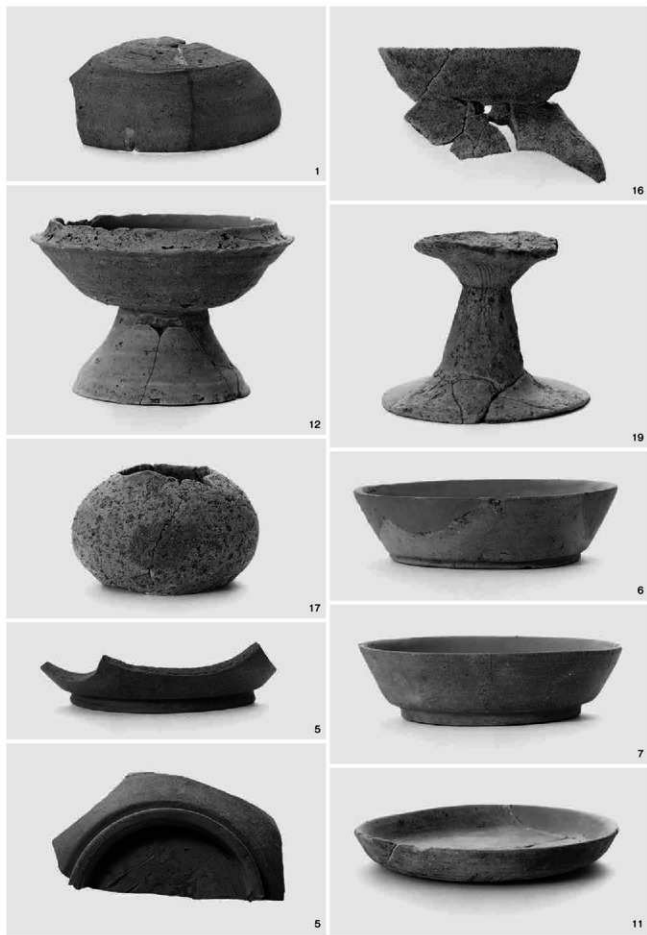
(1) 第15次第10地区溝 S D151001・
151007 (北から)

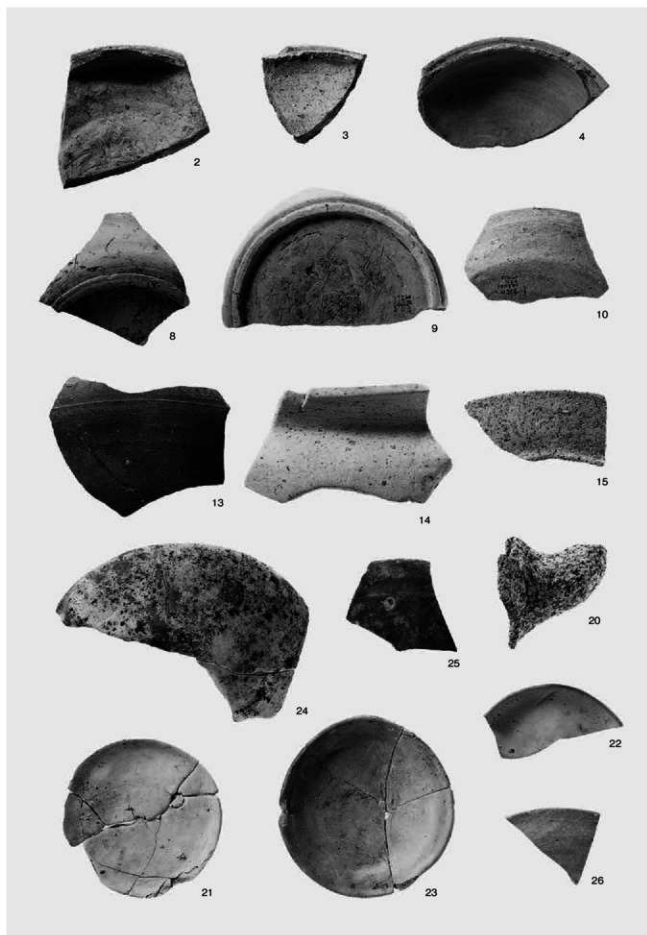


(2) 第15次第10地区溝 S D151007
断面(南から)



(3) 第15次第9地区全景(南から)







(1) 第17次調査地遠景(南東から)



(2) 第17次調査地近景(北西から)



(1) 第17次調査地北部近景<手前に新庄用水、丘陵背後に文覚池> (東から)



(2) 第17次調査南部調査区全景(上が北東)



(1)第17次調査第1地区全景(上が北東)



(2)第17次調査第3地区全景(上が南西)



(1) 第17次調査第2地区全景(上が南西)



(2) 第17次調査第2地区南部全景(上が南西)



(1) 第17次調査北部調査区全景<正面丘陵の基部に大堰川> (南東から)



(2) 第17次調査第4地区全景(上が南西)



(1) 南部調査区調査前全景
(南東から)



(2) 第17次1区全景(南東から)



(3) 第17次1区全景(北西から)



(1) 第17次第2地区全景(南東から)



(2) 第17次第2地区溝S D17203(南から)



(1) 第17次第2地区堅穴式住居跡
S H17205(南東から)



(2) 第17次第2地区堅穴式住居跡
S H17205竪(南東から)



(3) 第17次第2地区溝 S D17202・
17207(南から)

(1) 第17次第2地区溝 S D17202
土器出土状況(南西から)



(2) 第17次第2地区溝 S D17202
断面(南から)



(3) 第17次第2地区溝 S D17202・
17207断面(南から)





(1) 第17次第2地区掘立柱建物跡
S B17213(北西から)



(2) 第17次第2地区掘立柱建物跡
S B17216(北西から)



(3) 第17次第2地区落ち込みS X
17212(南東から)

(1) 第17次第2地区溝 S D17204
(南東から)



(2) 第17次第2地区溝 S D17204
断面(C-C') (南東から)



(3) 第17次第2地区溝 S D17204
断面(D-D') (南東から)





(1) 第17次第2地区溝 S D17203
(南東から)



(2) 第17次第2地区溝 S D17203
断面(南から)



(3) 第17次第2地区溝 S D17209
断面(東から)

(1) 第17次第2地区土坑S K17208
(南東から)



(2) 第17次第2地区西壁断面
(北東から)



(3) 第17次第2地区南壁断面
(北西から)





(1) 第17次第3地区全景(南東から)



(2) 第17次第3地区溝S D17301
断面(南東から)



(3) 第17次第3地区溝S D17301
西肩部柱穴検出状況(北から)

(1) 第17次第4地区調査前全景
(南東から)



(2) 第17次第4地区溝 S D17401
(南から)



(3) 第17次第4地区溝 S D17401
(北西から)





(1) 第17次第4地区溝S D17401(南東から)



(2) 第17次第4地区溝S D17401全景(南東から)

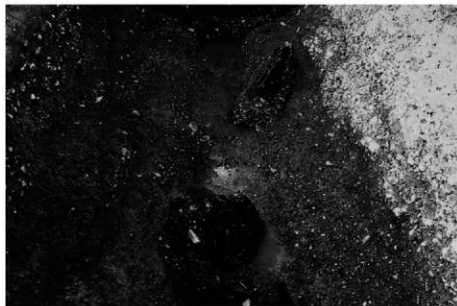
(1) 第17次第4地区溝 S D17401
断面(B-B') (南東から)



(2) 第17次第4地区溝 S D17401
断面(C-C') (南東から)

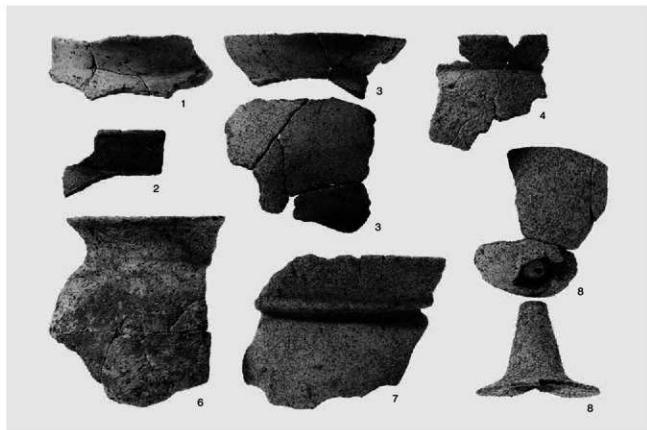


(3) 第17次第4地区溝 S D17401
底部検出状況(南東から)

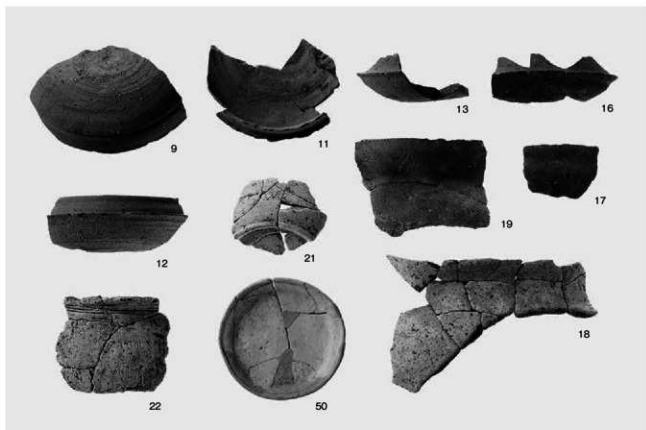




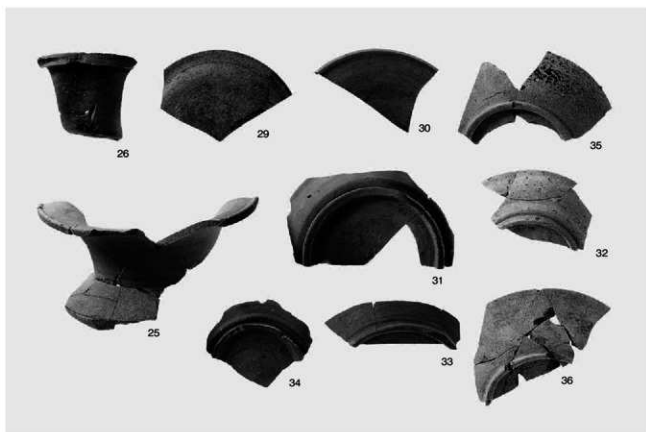
(1) 出土遺物 1



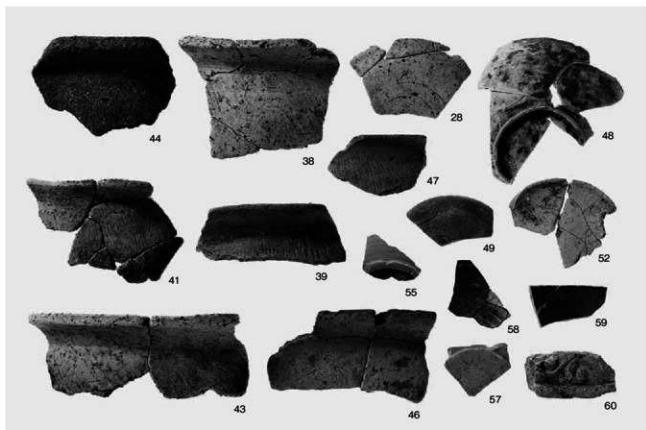
(2) 出土遺物 2



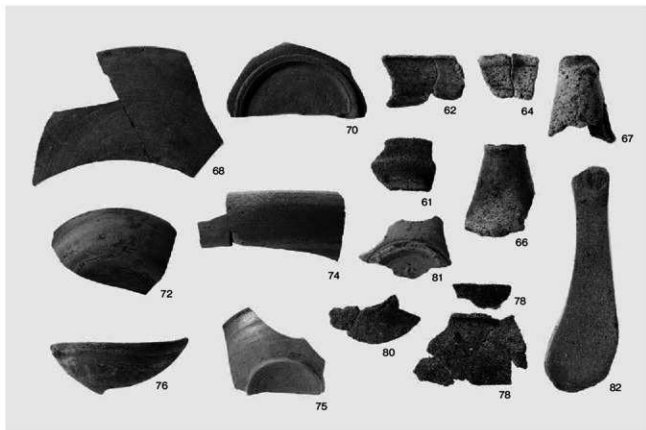
(1)出土遺物 3



(2)出土遺物 4



(1) 出土遺物 5



(2) 出土遺物 6

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第139冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Tel.075 (933) 3877
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
あつえいせきだいりくじ 温江遺跡第6次	よごくんよさの ちようかや 与謝郡与謝野町加 悦	26465 75	35° 30' 07"	135° 06' 01"	20081125 ～ 20090213	333.5	道路建設
むろはしいせきだい じゅうご・じゅうなな じ 室橋遺跡第15・17次	なんたんしやぎ ちようむろはし 南丹市八木町室橋	26213 6	35° 06' 07"	135° 31' 44"	20070905 ～ 20080307 20081203 ～ 20090225	3.030	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
温江遺跡第6次	集落跡 集落跡 集落跡	縄文 弥生 古墳	溝・土坑・ピット 溝	縄文土器 弥生土器・石斧・敲石・ 石皿・人面付き土器 土師器・須恵器・埴輪	弥生時代前期の 環濠集落、人面付 き土器の出土
室橋遺跡第15・ 17次	集落跡 集落跡 集落跡 集落跡	弥生 古墳 奈良～平 安 中世	溝 竪穴式住居跡・溝 掘立柱建物跡・溝 溝	弥生土器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・灰軸陶 器 土師器・瓦器	弥生時代、古墳時 代、奈良～平安時 代の灌漑水路 の確認

所収遺跡名	要 約
温江遺跡第6次	温江遺跡の南辺部分を東西250mの範囲を125mにわたって調査し、弥生時代前期～古墳時代前期にかけての遺構・遺物を検出した。弥生時代前期には約100mを隔てて、幅約2m、深さ1.2mほどの南北溝を2条と、その間で多数のピット・土坑を検出した。そのあり方から、環濠集落と判断された。特に西側の環濠内からは多量の土器に混じて人面付き土器が出土し、当時の習俗や精神世界を知る上で重要な発見となった。また、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構や遺物が検出されたことから、同時期の集落跡が広がっているものと判断される。

室橋遺跡第15・17次	亀岡盆地の北端部に位置する弥生時代から中世にかけての複合集落遺跡。弥生時代の大規模灌漑用水路のほか、古墳時代の堅穴式住居跡、平安時代の掘立柱建物跡、平安時代遺構の灌漑用水路などの遺構を確認した。
-------------	---

京都府遺跡調査報告集 第139冊

平成22年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141